

Ibn al-Marzubān' s The Book of the Superiority of Dogs over Many of Those Who Wear Clothes : Japanese Translation with Critical Notes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009895

資料 Research Resource

イブン・アルマルズバーン著
『衣服を着た多くのものよりも
イヌがすぐれている件についての書』

西尾哲夫*

Ibn al-Marzubān's *The Book of the Superiority of Dogs over
Many of Those Who Wear Clothes:*
Japanese Translation with Critical Notes

Tetsuo Nishio

- | | |
|-----------|-------------|
| 1 はじめに | 4 本訳の作業方針 |
| 2 著者と資料解題 | 5 本文訳ならびに注釈 |
| 3 写本と校訂本 | |

1 はじめに

作家であり詩人でもあった石牟礼道子はかつて、複雑化した現代において個人が社会を変えるために発信できる最大の武器が文学であると言った。文学と科学、一方は個性を極大化しもう一方は極小化し、一方は言葉を極限まで私化しもう一方は極限まで客化するが、個々の人びとの内面から立ち上がり、地球社会を

*国立民族学博物館

Key Words : dogs, animal stories, human beings and animals, Arab world, Arabic literature

キーワード : イヌ (犬), 動物誌, 人と動物, アラブ世界, アラブ文学

も内包するものでなければならないと彼女は言っているのである。日本における中東地域研究の動向とこれからの可能性について書いた論考の「人間・社会・自然の全体理解に向けて」と題した節のなかで、「2020年には、地球社会における個人と共同体のつながりを根底から揺るがす現象が進行し、個人の実践が、地域社会や国家システムを超越して地球社会へと直截に影響を与え、地球社会と個人が対峙した」として、人びとの皮膚感覚である「地球社会」の実相を捉える地域研究の必要性を説いた（西尾 2021a: 362-364）。そのうえで、研究倫理や論証不能という弁解が否応なく作り出す隘路のなかで等閑視されてきた、個人の内面性という極小化された世界と地球社会の認知地図という極大化された世界を接続して理解するグローバル地域研究の枠組みを提案した。

本訳の動機は私と愛犬との関係というきわめて個人的なものからはじまった。様々な原因がもつて左の眼と耳の身体的能力を失うということを経験しているさなかのことだった。こういうのを魔がさすと表現するのだろうか、心が折れて身体もろとも消え入りそうになったとき、隣にいた愛犬が何かを察した。何が起こったのか語る筆力は私にはないし、科学という名の学問の発表の場で語るべきことではないし、それこそが文学の領分なのだろうと思う。その時の私と愛犬とのあいだには、たしかに生き物としての何か言い難いつながりのようなものが生じたと思う。単純にそれが何だったのか、知りたいと思った。いま私の研究は、人間にとって物語とは何か、という問いに答えるために、言葉によるコミュニケーションからそれが顕在化する以前の前言語的な《物語》的環境認識メカニズムの研究に進みつつある。それは自然環境における生き物としての人間の存在を文学という営みの発生の現場まで遡って人類史のなかで探る研究でもある。この資料の翻訳作業は、私のささやかな個人的経験による問いから生まれたものであるが、人間が自然環境との関係性を物語化し言語的にエピソード化して文学的営みへと昇華させて、そして社会で共有する能力をいかに獲得してきたかを考察するための一環である。

アラビアンナイト（千一夜物語）のなかには、アラブ世界ではおなじみのラクダやヒツジ、ロバなどの家畜とならんでイヌ（犬）もよく登場する。たいていの場合は、魔法によって姿を変えられた人間である。「第二の老人と二頭の黒犬の話」に登場する二頭の黒犬は、末の心善き弟への裏切りのために妖精によって魔法で姿を変えられた二人の兄で、「王子である三人の遊行僧とバグダードの五人

の娘の話」のなかの「アミーナの話」に登場する黒い二頭の雌犬は、嫉妬心にかられて末の妹に悪しきことをしたために姿を変えられる¹⁾。

これらの話に登場するイヌは悪しきことをした罰として姿を変えられたのだが、「カリフ、ハールーン・アッラシードの冒険」のなかの「シーディー・ヌウマーンの話」では、妻思いの主人公のヌウマーンが、魔女である妻の正体を知ってもなお妻にやさしくするのに対して、逆上した妻によって「不運なる者よ、好奇心の報いとして犬になれ！」という魔法の言葉とともにイヌに変身させられている。ヌウマーンは人の心と知恵を持ったままイヌになり、飼ってもらうことになったパン屋では贖金を見抜く特殊な能力のおかげで評判となる。ここではイヌの持つ飼い主への忠心という特質とさらにイヌの持つ人間とは異なる能力が強調されている。同様に、「ロバと牡牛と農夫の寓話」に登場する番犬は、雄鶏との会話で主人の窮状と気持ちを代弁している。

一方で、「こぶ男の物語」のなかの「仕立屋が語った話」では、くだんのおしゃべり仕立屋が法官を罵って「くそ法官の犬野郎！」と言っている。「ペルシアの王子バドルとサマンダル王国の王女ジャウハラの話」では、娘を妻にほしいというサーリフに対して怒り心頭に達したサマンダル王が、「この犬畜生！」と罵っている。さらには「愛の奴隷、アブー・アイユーブの息子ガーニムの話」では、ガーニムの母と妹をかくまった者に対するザイナビー王のお触れに、「ダマスカスの住人であれ異邦人であれ、いかなる事情があろうともガーニムの母と妹をかくまったり、ひとかけらのパンあるいはひとすくいの水をあたえたりした者は死罪とし、その屍は犬にあたえる」とある。イヌとは蔑まれるべき存在でもある²⁾。「シーディー・ヌウマーンの話」でもイヌになった主人公が最初に逃げ込んだ肉屋は、「犬は汚れているという迷信を頑なに信じていたのです。こういった人たちは、通りすがりにたまたま犬に触れたというだけで、石鹸と水で服をどれほど念いりに洗っても気がすまないのです。」とある。

イスラーム³⁾の伝承によれば、預言者ムハンマドは猫好きだったらしいが、イヌについては『クルアーン（コーラン）』の第8章で好意的に言及されているものの、ハディース（ムハンマドの言行録）のなかでは、イヌがいる家には天使は入らない、黒犬は悪魔（悪いジン）が形を変えたものであるというように否定的なイメージが強い⁴⁾。イヌは不浄であるからイヌにさわった後で礼拝してはいけないとして、

その穢れを取り除く方法を推奨しているイスラーム法学派もある (Foltz 2006: 29-46; Vikør 2003)。イスラーム以前の習俗でも、イヌがトーテムであったのではないかと思われるカルブ (= 犬) 部族の存在が知られており、古詩にあるようにイヌは邪視と結びついていた。一方、アラブ遊牧民社会では猟犬や牧羊犬としてイヌが飼われており、アッバース朝期には闘犬係という役職があった (Ahsan 1979: 261)⁵⁾。西暦 9 世紀の文筆家ジャーヒズの『動物の書』によれば、イエメンのサルーク原産とされるサルーク犬のように優れた猟犬の値は 40 デイルハムにもなった (Smith 1980; Viré 1973)。同書ではイヌをめぐる多くの諺が紹介されており、「イヌを飢えさせれば従い、餌をやれば咬み、イヌの首をしめればさらになつく」などが挙げられている。イヌは文学においても様々な比喩として登場する。渴きから死んでしまいそうなイヌを助けた女性 (一説には売春婦) がその行為により天国にいったという逸話は、最も卑しめられている動物を助けたということを示している。神秘主義的な著作では、最も卑しい存在としてのイヌが神の前における人間の卑しさの比喩として文学的に称賛されることもある (Nathan 2016; Nurbakhshu 1989)。イブン・アルマルズバーン (ヒジュラ暦 309 年 / 西暦 921 年没) は『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』という著作の中で、忠誠、感謝、義務、謙虚といったイヌの長所を挙げ、これらに欠けていることは人間にとって望ましい状態ではないと述べている。

2 著者と資料解題

オスマン帝国時代のエジプトにおける動物と人間の関係について文献を博捜しながら社会史的分析を試みたアラン・ミカイルは、「イスラーム世界のイヌに関する歴史は概して誤解されている。イヌがイスラームの儀礼において常に不純なものに見做されているために、ムスリムとイヌのあいだにはよんどころないほど互いへの敵意をもってきたという伝統的な見方に反して、実際の歴史資料からわかるのは、全体としてムスリムとイヌとが互いにもっと好意的な関係にあったことである」と述べている (Mikhail 2017: 68)。そのような中世イスラーム世界のイヌに関するまとまった歴史資料としては、ジャーヒズの『動物の書』のなかのイヌに関する章がもっとも古いと言えるが、ジャーヒズより一世紀後にイブン・

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

アルマルズバーンによって著された『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』は、イヌが人間社会で果たす役割をテーマにしたもっとも長い論考である。

著者のイブン・アルマルズバーン (Ibn al-Marzubān)⁶⁾ の正式な名前は、アブー・バクル・ムハンマド・ブン・アルマルズバーン・ブン・バッサーム・アルバグダーディー・アルムハウワリー (Abū Bakr Muḥammad ibn al-Marzubān ibn Bassām al-Baghdādī al-Muḥawwalī) である。生年は不明で、没年はヒジュラ暦 309 年／西暦 921 年とされる⁷⁾。出自や出身地を示すニスバ形容詞が名前の最後に二つ、バグダーディーとムハウワリーと付いているが、前者のニスバについてはアッバース朝期のバグダードで活躍したためであろう。後者のニスバについては、バグダード西方の近郊にムハウワル⁸⁾ という村があったことが確認されており、ニスバの通常の用法から考えて、必ずしも彼自身がその村で生まれたり住んでいたりしたわけではないものの、おそらく彼の祖先の誰かがその村に関係していたと思われる⁹⁾。

西暦 9 世紀のバグダードの書籍商イブン・アンナディームが残した目録『アルフィフリスト』のなかで (Ibn al-Nadīm 1970: 327-328; Ibn al-Nadīm 2009: vol.I-2, 461-462), イブン・アルマルズバーン¹⁰⁾ を「史話や詩、説話のよく記憶する者 (ハーフィズ)」であると、十九の著作を挙げている¹¹⁾。なかにはクルアーンの注釈書もあるが、多くは説話や詩を編集したものである。イブン・アルマルズバーンの著作の中では、『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』以外に二つの著作と彼の手になる詩が今に伝えられている¹²⁾。

イスラーム勃興前後から中世にかけてのアラブ世界におけるイヌに関する情報源としては、前イスラーム期 (ジャーヒリーヤ〔無明〕時代) の詩、クルアーンやハディースなどの宗教関連の資料があるが、西暦 9 世紀以降に発達するアダブとよばれる広い意味での文学あるいは教養文学のなかにイヌをテーマとするものがある。その嚆矢と言えるのが、西暦 9 世紀の文筆家ジャーヒズが著した『動物の書』である。同書では、古詩やクルアーンなどをはじめ、アリストテレスやガレンなどの古代ギリシアの資料、さらには同時代のベドウィン (アラブ遊牧民) に関する民族誌的資料などが参照されており、浩瀚な博物誌的著作となっている。書名からも明らかのように、ジャーヒズの執筆の動機はひとつにはアリスト

テレスの『動物誌』を模範として、動物の外見や行動の特徴あるいはその性質を記述することになり、もうひとつにはそれらを描くことで神による創造の完全性の証拠を示すことにあった。これらの二つの執筆動機は、その後も有名なダミーリーの『動物の生活誌』やカズウィーニーによる百科全書的著作などに受け継がれていく。

イブン・マルズバーンもジャーヒズに倣って、イヌに関する情報をアラブ世界だけでなくペルシアやインド、ギリシアの文献からも渉猟しているだけでなく、『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』はさらに深く人間とイヌとの関係に焦点を当てながら考察したものと言え、まさに「10世紀イスラーム世界のイヌ観概説」(Mikhail 2017: 74)と評価できる。ジャーヒズ以降の博物誌的・百科全書的な動物に関する著作は、神(アッラー)によって創造された世界の完全性を証明し、そのために網羅的な分類と記述へと向かうことになるが、その描写においては当該の動物の長所と短所を他の動物と比較する方法がとられ、時に双方の動物を擁護する者による論争の形式がとられ、やがてひとつの文学ジャンルとして発達する。このような議論の方向性は、次の段階として特定の動物の持つ長所や短所を比喩的に用いて人間やその社会への批判的な観点からのアレゴリーとするスタイルが生まれてくる(Eisenstein 1984: 92)。動物全般の記述において人間社会へのかかわりというテーマが前景化されるに応じて、特にイヌに関してはそれが「野生」なのか「家畜」なのかという問題が議論の一つの焦点として浮かび上がってくる(Subasi 2011: 77)。

イヌという動物の存在を通じて、自然と人間社会の対比的な思考がイスラーム社会の都市化の進展とともに顕著になってくる。10世紀のイスラーム社会、特にバグダードを中心とするアッバース朝の世界では、急速に都市化が進むなかでイスラーム文明とよべる価値観が形成されていく一方で、かつての砂漠で暮らしていたころの遊牧生活が育んだ価値観が失われていき、人間と自然との関係も大きく変化していく過渡期なのである。成熟しつつあったイスラーム的世界観と、それにともなって変化した自然観あるいは動物観がもたらした人間社会を背景として、人と動物の関係を問い直したのが、このイブン・アルマルズバーンの『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』だと言える。

3 写本と校訂本

イブン・アルマルズバーンによる『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』¹³⁾のアラビア語写本については、写本目録等の書誌情報から少なくとも十個の写本が現存することが確認される¹⁴⁾。まず筆写年代のわかっているものを古い順にあげる。

写本

- ① *Kitāb faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. al-Qāhira (Cairo): al-Maktaba al-‘Azhariyya, (202) Abāzah (abazah) 6369.

ヒジュラ暦 991 年／西暦 1583 年筆写¹⁵⁾

- ② *Kitāb tafḍīl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. Berlin: Staatsbibliothek zu Berlin, Wetzstein II 1730. 38r-51v

ヒジュラ暦 1048 年／西暦 1638 年～ヒジュラ暦 1167 年／西暦 1753 年筆写

写本の第 51 葉の表にヒジュラ暦 1048 年サファル月に書写した日付が記してあるが、その次の第 51 葉の裏にはヒジュラ暦 1167 年にムハンマド・ブン・アリー・アッラーフィイーが書写した旨のことが記してある (Ahlwardt 1893: 25, なお項目番号は 5425)。他の版の最後の逸話に加えてさらに一つの逸話が第 51 葉の表に挿入されているだけでなく、その後アッラーフィイーによってさらにもう一つの逸話が挿入されている。これら二つの新しい逸話は本来なかったものである。写本自体の筆写年代は比較的古いものの、より古い本文伝承によると推定される他の版に比べると、この写本だけが採用している単語や表現が散見される。

- ③ *Kitāb faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. al-Qāhira (Cairo): al-Maktaba al-‘Azhariyya, 164 Abāzah (abazah) 6369. 18ff.

ヒジュラ暦 1308 年／西暦 1890 年筆写

アズハル大学図書館よりデジタル画像資料として公開されている。写本冒頭に記されている伝承経路から判断して、②のベルリン写本や⑤のパリ写本と同系に

属していると思われる。両者が逸話の加筆あるいは順番の入れ替えなどを行っているのに対して、このアズハル写本は正確な本文伝承に従っている¹⁶⁾。

- ④ *Kitāb faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. al-Qāhira (Cairo): Dār al-Kutub al-Miṣriyya, No. 4241.

ヒジュラ暦 1340 年／西暦 1922 年筆写¹⁷⁾

次に、正確な筆写年は記されていないが、書体や紙質、その他の状況証拠から制作年代がおおよそ推定できるものを古い順にあげる。

- ⑤ *Kitāb faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. Paris: Bibliothèque nationale de France, Arabe 6011. 1r-23r

西暦 18 世紀頃

写本カタログの情報では (Blochet 1900: 43-44)、西暦 16 世紀に書写された可能性を示唆しているが、後で検討するように同写本の伝承過程や内容等から判断すると、②のベルリン写本と同じ系統に属しており、それよりも早い時期に書写された可能性は低い。逸話の挿入順序に乱れがある。特に第 9 葉の表の 3 行目からは文が飛んで第 9 葉の裏の下から 2 行目に続き、そのまま第 12 葉の表の下から 6 行目まで続いた後で、第 9 葉の表の 4 行目に戻って来る。また他の写本に比べると、相互によく似ているアラビア文字の誤写が散見する。

- ⑥ *Faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. New Haven: Yale University, Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Landberg MSS 350. 14ff.

西暦 19 世紀頃

著名な東洋学者で冒険家でもあったランドバーグ (Carlo Landberg) が収集したアラビア語写本の一つである (Nemoy 1956: 159, なお項目番号は 1501)。書体から判断しておそらくランドバーグ本人による筆写と思われる。内容は⑨のペテルスブルグ写本と酷似しており、同一か同系統のより古い写本を底本にした可能性が高い。⑨の写本ではそのまま読むと意味不明の単語や不明瞭な文字をそのまま書き写しているのに対して、ランドバーグは他の写本を参照にしたのか、ある

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

いは自分の読みを記したのか即断できないものの、本文を修正したり欄外に異形(バリエント)を書き加えたりしている。その意味では単なる筆写版というよりも校訂版に近い印象を与える。ただまれにはあるが、判読不可能な文字列の単語については空白にしている箇所もある。

- ⑦ *Kitāb faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. al-Qāhira (Cairo): Dār al-Kutub al-Miṣriyya, No. 252. 11ff.

西暦 19 世紀頃

この写本の写真によるコピーを利用したスミスの校訂版では、この写本の第 1 葉が欠落しているために伝承経路を記した部分が確認できないとして、さらには本文中に文法的誤謬や単語の誤記の類いが少なからず見られることをもとに、信頼に足る写本とは捉えていない (Smith and Abdel Haleem 1978: xxi)。しかしながら最近出版されたカタログによると (Ḥalwajī 2011: vol.3. 581-582, なお項目番号は 840)、印刷校訂版の②、写本の⑥および⑨と同じ伝承経路が明確に記されている。スミスの校訂版のアラビア語本文注に記された同写本への言及と、これら三つの各版の当該箇所を照合すると、同写本(あるいは極めてよく似た姉妹写本)がこれら三つの版の直接の底本となったか、あるいはこれら四つすべてが、現在は伝わらないがもっと古い同一の写本を底本としていた可能性が高い。

- ⑧ *Kitāb faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. al-Qāhira (Cairo): Dār al-Kutub al-Miṣriyya, No. 7418.

西暦 19 世紀～ 20 世紀¹⁸⁾

- ⑨ *Kitāb faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. Saint Petersburg: Library of St. Petersburg State University, Ms. O. 911. 6ff.

西暦 1883 年 (?)

正確な筆写年はわからないが、ペテルスブルグ国立大学図書館のカタログ情報ならびに同写本の表紙のメモによると、1883 年 11 月 16 日¹⁹⁾に所蔵されることになったもので、それより少し前の時期に筆写された可能性が高いとされる。本文の内容については、⑥のランドバーク写本のところすでに記したように両者

は酷似している。ただしこのペテルスブルグ写本の方では、書写者が元の底本写本をより忠実に書き写そうとしており、底本写本の誤記や難読箇所をそのままにしている²⁰⁾。

- ⑩ *Faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. al-Qāhira (Cairo): Dār al-Kutub al-Miṣriyya, Taymūr 391. 21ff.

筆写年不明

カタログ情報によると (Ḥasan 2015: vol.6, 586–587, なお項目番号は 607), エジプト国立図書館に所蔵されているタイムール・コレクションのなかの写本である。アフマド・タイムール (1871~1930) は古典文学にも通暁したエジプトの作家・歴史家であるが、アラビア語写本収集家としても知られ、二万冊にも及ぶコレクションの全てが彼の没後にエジプト国立図書館に寄贈された (EAL 761)。

校訂本

- ① Louis Cheikho ed. *Kitāb faḍā’il al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. *al-Machriq*, année 12, Beyrouth, 1909, pp. 515–533.

校訂テキストとしてはもっとも初期のものである²¹⁾。近代アラビア語学に貢献したアナスタース・アルカルマリー神父が所蔵していた写本 (ヒジュラ暦 649 年 / 西暦 1251 年) を底本にしている²²⁾。シェイホの記述によれば、写本の状態は良好のようだが、校訂テキスト自体は他の校訂本の比較からかならずしも正確な読みがなされているとは言えない。また後で検討するように、シェイホによるペイルート版アラビアンナイトでの校訂に典型的に観察されることだが、キリスト教の神父でもあったシェイホはアラブ古典文学に通暁している反面、校訂の対象とする作品の倫理的側面に対して意図的に修正を加える傾向が見られる。当該写本の校訂についても同様で、意図的な削除や修正が散見される。

- ② Ibrahīm Yūsuf ed. *Kitāb faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. Maṭba‘at al-Maḥmūd Tawfiq, al-Qāhira, 1341 H (AD 1922).

エジプト国立図書館 (Dār al-Kutub) 所蔵の一つの写本を底本にしているが、どの写本かについての情報は明記されていない²³⁾。また当該写本を選択した理由

も明確でなく、他の所蔵写本との比較検討もない²⁴⁾。

- ③ G.R. Smith and M.A.S. Abdel Haleem trs. and eds., *The Book of the Superiority of Dogs Over Many of Those Who Wear Clothes*. Aris & Phillips Ltd., Warminster, England, 1978.

現在におけるもっとも信頼のおける校訂印刷本である。ただし基本の底本としたテキストの選択には現在の写本等の研究状況からみるとその選択に疑問の余地がある。カイロで印刷されたテキスト（上記の校訂本②）を校訂のための基礎とし、かならずしも同テキストの底本とは断定できないがより近いと判断可能な写本（上記の写本⑦）に拠りながら、時にシェイホの印刷テキスト（上記の校訂本①）も参照している。理由としては、カイロ印刷本が比較的古いテキスト伝承を反映している（と判断できる）こと、ならびに「妥当なテキスト (sound text)」であることを挙げている。しかしながら同書刊行後に存在が発見されたエール大学図書館所蔵写本やアズハル図書館所蔵写本の方がテキスト伝承としてはより妥当であるという可能性が高いことから、同印刷校訂本が必ずしも最善のテキストであるとは言い難い面もある²⁵⁾。

- ④ Ibn al-Marzubān, *Taqḍīl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. Taqḍīm wa dirāsa wa taḥqīq, al-duktūr ‘Aṣṣām Muḥammad Shabārū, Dār al-Taḍāmūn, Bayrūt, 1992

写本については、序文でベルリン写本（写本②）とシェイホの校訂本（校訂本①）の底本写本の二つが存在すると述べているだけで、同書の底本としてどの写本を利用したかを明示していない。テキスト本文はベルリン写本に近いので、おそらくそれを底本にしてすでに印刷出版されたテキストをもとに本文に注釈を付していったものと想像できる²⁶⁾。ただし、古典詩に出てくる難解語の場合、その印刷版や写本にも確認されない単語を、おそらく独自の意味解釈によって現代語に差し替えたりしている²⁷⁾、正統な古典本文として扱うには注意を要する。しかしながら、イブン・アルマルズバーンが利用した文献についての新たな知見も含まれており、本文解釈における注釈書としての利用価値はある。

- ⑤ 'Abū Bakr Muḥammad ibn Khalaf al-Marzubān, *Tafḍīl al-kilāb 'alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. Taḥqīq wa dirāsa, 'Abū al-Muzaffār Sa'īd ibn Muḥammad al-Sinnārī, 2006?

底本とした写本や印刷本に関する情報はまったくない²⁸⁾。上記の④のものと同様に、本文テキストそのものよりも注釈書としての利用価値はある²⁹⁾。しかしながら、ベルリン写本でも観察されたし、④のシャバーラーの校訂本でもおこなわれていることだが、アラブ古典文学を継承していくということは、当該文献を墨守して伝えるのではなく、場合によっては書写当時の読者にとって読みやすいアラビア語文に修正したり、さらには著者の見解を補強するために類似の逸話を付加したりするのは、ある意味ではタフシールやシャルフとアラビア語でよばれる注釈行為の延長としてアラブ世界での古典継承の伝統から見て許容範囲なのかもしれない。しかしながら、そのような慣例的作業に暗い他の分野の専門家にとっては当該の作品を社会的資料として利用する上では適切とは言えない。

4 本訳の作業方針

校訂された各印刷版ならびに各写本の系統関係に関する詳しい分析は別の研究にゆずるが、ここではその準備作業として二つの特徴を比較することで、どの版に拠って翻訳の作業を進めていくかについての指針を得たい。

第一の特徴として各版の冒頭部分に記されている本文の伝承経路（イスナード）に関する情報を、原著者のイブン・アルマルズバーンから始めて時間軸を昇順に比較してみよう。まず①～⑩の各写本の情報をまとめる。

- ① 未確認のため不明

② (ベルリン写本と略記) アブー・バクル・ムハンマド・ブン・ハラフ・ブン・アルマルズバーン [原著者のイブン・アルマルズバーンのこと] 【人物 A】 ⇒³⁰⁾ アブー・ウマル・ムハンマド・ブン・アルアッバース・ブン・ムハンマド・ブン・ザカリーヤ・ブン・ハイユーヤ (ḥayyūya)・アルハラニー (al-ḥarānī) 【人物 B】 ⇒ 法官のアブー・アルカーシム・アリー・ブン・アルムハッスィン・ブ

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

ン・アリー・アッタヌーヒー【人物 C】⇒法学者のアブー・アルファトフ・ナスル・ブン・イブラーヒーム・アルマクディシー【人物 D】⇒法官で法学者のアブー・ムハンマド・アブドゥルマウラー・ブン・ムハンマド・ブン・アビー・アブドゥッラー・アッライスイー・アッラフミー・アルマーリキー³¹⁾【人物 E】⇒法官であり預言者の子孫たち（シャリーフ）の代表（ナキーブ）であるシャラフッディーンことアブー・アリー・ムハンマド・ブン・アビー³²⁾・アルバラカート・アスアド・ブン・アリー・アルフサイニー・アルハラーニー（al-ḥarānī）³³⁾【人物 F】

③（アズハル写本と略記）アブー・バクル・ムハンマド・ブン・ハラフ・ブン・アルマルズバーン〔原著者のイブン・アルマルズバーンのこと〕【人物 A】⇒アブー・ウマル・ムハンマド・ブン・アルアッバース・ブン・ムハンマド・ブン・ザカリーヤー・ブン・ハイユーヤ（ḥayyūya）³⁴⁾・アルハザール（al-khazār）【人物 B】⇒法官のアブー・アルカーシム・アリー・ブン・アルムヒップ・ブン・アリー・アッタヌーヒー【人物 C】⇒法学者のアブー・ムハンマド・アブドゥルマウラー・ブン・ムハンマド・ブン・アブー・アルファトフ・ナスル・ブン・イブラーヒーム・アルマクディシー【人物 D】⇒法学者のアブー・ムハンマド・アブドゥルマウラー・ブン・ムハンマド・ブン・アビー・アブドゥッラー・アッライスイー・アッラフミー・アルマーリキー【人物 E】⇒法官であり預言者の子孫たち（シャリーフ）の代表（ナキーブ）であるシャラフッディーンことアブー・アリー・ムハンマド・ブン・アルカーミル³⁵⁾・アスアド・ブン・アリー・アルフサイニー・アルジャワーニー（al-jawānī）【人物 F】³⁶⁾

④ 未確認のため不明

⑤（パリ写本と略記）アブー・バクル・ムハンマド・ブン・ハラフ・ブン・アルマルズバーン〔原著者のイブン・アルマルズバーンのこと〕【人物 A】⇒アブー・ウマル・ブン・アルアッバース・ブン・ムハンマド・ブン・ザカリーヤー・ブン・ハイユーバ（ḥayyūba）・アルハッザーズ（al-khazzāz）【人物 B】⇒法官のアブー・アルカーシム・アリー・ブン・アルムハッスイン・ブン・アリー・アッタヌーヒー【人物 C】⇒法学者のアブー・アルファトフ・ナスル・ブ

ン・イブラーヒーム・アルマクディシー【人物 D】⇒法学者のアブー・ムハンマド・アブドゥルマウラー・ブン・ムハンマド・ブン・アビー・アブドゥッラー・アッライスイー・アッラフミー・アルマーリキー【人物 E】⇒法官であり預言者の子孫たち（シャリーフ）の代表（ナキーブ）であるシャラフッディーンことアブー・アリー・ムハンマド・ブン・アルカーミル³⁷⁾・アスアド・ブン・アリー・アルフサイニー・アルジャワーニー（al-jawānī）【人物 F】³⁸⁾

⑥（ランドバーグ写本と略記）アブー・バクル・ムハンマド・ブン・ハラフ・ブン・アルマルズバーン〔原著者のイブン・アルマルズバーンのこと〕【人物 A】⇒アブー・アムル・ムハンマド・ブン・アルアッバース・ブン・ムハンマド・ブン・ザカリーヤー・ブン・ハイユーバ（ḥayyūba）・アルハッラーズ（al-kharrāz）【人物 B】⇒法官のアブー・アルカーシム・アリー・ブン・アルムハッスイン・ブン・アリー・アッタヌーヒー【人物 C】⇒法学者のアブー・ムーサー・イーサー・ブン・アビー・イーサー・アルカービシー【人物 G】

⑦（カイロ写本と略記）スミスの校訂版の情報によれば、伝承経路を記されていたであろう写本の最初の葉が欠落しているために確認できない。ただし、図書館カタログには写本の冒頭部分について、「法学者のアブー・ムーサー・イーサー・ブン・アビー・イーサー・アルカービシー【人物 G】が伝えた」とあることから、⑥のランドバーグ写本、⑨のペテルスブルグ写本と同じ伝承経路を記していた可能性が高い。

⑧ 未確認のため不明

⑨（ペテルスブルグ写本と略記）アブー・バクル・ムハンマド・ブン・ハラフ・ブン・アルマルズバーン〔原著者のイブン・アルマルズバーンのこと〕【人物 A】⇒アブー・ウマル・ムハンマド・ブン・アルアッバース・ブン・ムハンマド・ブン・ザカリーヤー・ブン・ハイユーバ（ḥayyūba）・アルハッラーズ（al-kharrāz）【人物 B】⇒法官のアブー・アルカーシム・アリー・ブン・アルムハッスイン・ブン・アリー・アッタヌーヒー【人物 C】⇒法学者のアブー・ムー

⑩ 図書館カタログには写本の冒頭部分の情報も掲載されているが、伝承経路に関する情報はない。

以上の伝承経路に関する情報を比較分析すると少なくとも二つのことが言える。まずひとつは、すぐわかるように伝承経路が短いもの(⑥, ⑦, ⑨)と長いもの(②, ③, ⑤)の二群に写本が分けられる。短い方を α 系統、長い方を β 系統と呼ぶことにする。普通に考えると、 α 系統よりも β 系統の方が後期に成立したとするのが自然であろう。ただし、現存する写本の実際の筆写年代を見ると、 β 系統(ベルリン写本やパリ写本)の方が α 系統(ランドバーグ写本やペテルスブルグ写本)に比してより古い時代に筆写されている。もちろん、ランドバーグ写本やペテルスブルグ写本は近代になってからヨーロッパの研究者によって書写複製されたものであって、底本となった写本はもっと古い時代のものであった可能性が高い。またカイロ写本が同じく α 系統に属するとすれば、 α 系統の成立をかなり古い時代に設定できるかもしれない。

伝承経路の比較分析からもうひとつ言えることは、 β 系統の成立期についてである。 α 系統と β 系統の伝承経路は、原著者のイブン・アルマルズバーンからタヌーヒーまでは同じだがその先が異なる。 β 系統の各写本では異口同音に、アラビア語文をそのまま読むと、人物 B の段階で、イブン・アルマルズバーンがイジャーザ(許認可)を直接与えた本文の手稿がいったん失われて、再度イジャーザなしに複製を作成した旨のことが記載されているが、同時に奇妙なことに、人物 C のタヌーヒーが人物 D のアルマクディシーに伝える際の表現として、「彼の書いた原本から(読み聞かせて)」とわざわざ言葉を補っている。ここからは推察であるが、 α 系統に属するものが失われたあと、あるいはその原本が入手できなくなったあと、タヌーヒーから別の系統に属する β 系統が形成されて伝承されたのではないだろうか。いずれにせよ、書写年代は比較的新しいものの、 α 系統に属するランドバーグ写本やペテルスブルグ写本(さらにはカイロ写本)の方がより古い伝承を残していると言えるだろう。

この点について、印刷校訂本の①(バイルート版と略記)と②(ユースフ版と

略記)とも比較してみると興味深いことがわかる。まずユースフ版を先に見てみると、*a* 系統の写本と同じグループに属していることがわかる。問題はバイルート版の方で、人物 C のタヌーヒーまでしか伝承経路が記載されておらず、もしシェイホが底本の写本のままに校訂したのだとすると、最も古い伝承経路による写本であったことになる³⁹⁾。

次に写本の比較分析のための第二の特徴について見てみよう。イブン・アルマルズバーンの本文中にイヌに因んだ人名を紹介しているところがある。スミスの校訂版を基準に整理すると、以下のような順番で名前が出てくる⁴⁰⁾。①アクラブ・ブン・ラビーア (ʾaklab b. rabīʿa), ②ムカッラブ・ブン・ラビーア・ブン・ニザール (mukallab b. rabīʿa b. nizār), ③キラブ・ブン・ラビーア (kilāb b. rabīʿa), ④クライブ・ブン・ヤルブーウ (kulayb b. yarbūʿ), ⑤ムカーリブ・ブン・ラビーア・ブン・ニザール (mukālib b. rabīʿa b. nizār), ⑥キラブ・ブン・ヤルブーウ (kilāb b. yarbūʿ) である。これらの人名が各写本や各印刷校訂本でどのように出てくるか、表にして比較してみよう。

表 1 イヌが語源の単語を使ったアラビア語人名例に関する各写本の比較

<i>a</i> 系統		<i>β</i> 系統			印刷校訂本	
ランドバーク写本	ペテルスブルグ写本	ベルリン写本	アズハル写本	パリ写本	バイルート版	ユースフ版
①	①	①	①	①	①	①
③	③	③	③	③	③	③
②	②	②	②	②	②	②
b. qidhār を b. nizār に戻し修正	b. nizār を b. qidhār に変更	b. nizār なし	②	b. nizār なし	b. nizār なし	②
⑥	⑥	④	④	⑤	⑤	④ yarbūʿ を yarūʿ に変更
				④	④	⑤ b. nizār を b. qidhār に変更
						⑥

(筆者作成)

一見ただけで、 α 系統の写本どうし、 β 系統の写本どうしが似ていることがわかる。ランドバーグ写本はペテルスブルグ写本が底本としたものとおそらく同一の写本を筆写して修正を加えたものであろう。パリ写本は他の箇所でも独自の修正や加筆をおこなっていることも考えあわせると、当該部分でもうひとつ名前の⑤を加えたものと推定できる。

もうひとつ一見してわかるのは、①、③、②の三つはどの写本にも共通して含まれており、順番も同じである。このことは二つの印刷校訂版も含めて、スミスの校訂版以外すべてに共通していることでもある。ところで①～⑥の名前の構成要素を細かく見てみると、ラビーア (rabī'a) という人物の息子の名前ということで、①、②、③、⑤は一括りにできる。同様に、ヤルブーウ (yarbū') の息子の名前ということで、④と⑥も一括りにできる。イブン・アルマルズバーンのこの部分での意図は、イヌを表すアラビア語のカルブ (kalb) から派生した名詞を名前にする人物を例示することであるから、論理的に考えると同じキラブ (kilāb) という名前を持った例を挙げるのはおかしいことになり、その意味では、 α 系統よりも β 系統の方が筋が通っているとも言える。しかしながら、イブン・アルマルズバーンの情報源であったジャーヒズの『動物の書』における参考箇所を吟味してみると⁴¹⁾、ラビーア・ブン・ニザールという人物が、わけあって自分の息子たちにイヌ由来の単語を名前としてつけたことがわかり、①、③、⑤、②の順番で名前を列挙している。イブン・アルマルズバーンの方での①→③→②という順番は、ジャーヒズに倣ったためだろう。それでもパリ写本を除く他の写本で⑤が省かれている理由はよくわからない⁴²⁾。②の名前に異同が大きいのは、おそらく情報源のジャーヒズの方でも本文伝承にゆれがあったためと推定される⁴³⁾。

それでは α 系統の⑥、 β 系統の④はどこから来たのであろうか。そして両者の異同の理由は何だろうか。ジャーヒズの『動物の書』の続きを読んでもみると、先のラビーア・ブン・ニザールの一族に関して述べたあと、「捕食動物 (シバーウ / sibā') としてライオン (アサド / 'asad), ハイエナ (ドゥバイア / ḍubay'a)⁴⁴⁾, オオカミ (ズィーブ / dhi'b), ジャッカ (?) (ズアイブ / dhu'ayb) がいるが、十五人のうち八人 [の名前] がこれらすべての捕食獣から来ている。この八人のうちの四人 [の名前] がイヌという名詞に由来している」と述べ、④に相当するクライブ⁴⁵⁾・ブン・ヤルブーウ (kulayb b. yarbū'), ③に相当するキラブ・ブン・

ラビーア (kilāb b. rabī‘a), さらにイブン・アルマルズバーンは採用しなかったカルブ・ブン・ワルバ (kalb b. warba) を挙げている⁴⁶⁾。④と⑥の名前はヤルブーウ (yarbū‘) という人物の息子の名前であるから、イブン・アルマルズバーンの意図が別の家系に属する人物においてもイヌに由来する名前を付けている例を挙げることにあつたとすれば、④と⑥は代替可能と言えないことはないだろう。

次に印刷校訂版について見てみよう。バイルート版はパリ写本と奇しくも同じになっている。イブン・アルマルズバーンが元々はジャーヒズの『動物の書』を省略せずに引用したと仮定すれば、バイルート版が底本とした写本の古さとあいまって古い本文伝承を残しているのかもしれないが、すでに述べたようにバイルート版とパリ写本における他の箇所では校訂者あるいは筆写者の意図的な修正部分が散見されることを考慮すると即断はできない。ユースフ版については、どの写本を底本にしたか不明な上に複数の写本を使ったかも知れず、そのなかにはおそらくランドバーグ写本やペテルスブルグ写本が利用したものも含まれている可能性も否定できないが、校訂者の意図としてはすべての例を網羅的に挙げていったのではないかと推察する。その上で、④と⑤についてはそれぞれに類似の⑥と②と最大限の差別化を図るために異本にある名前の一部を付加したり別の形にしたりして重複しないように変更を加えたと推定される。この推論をさらに進めれば、ユースフ版を底本の一つとしたスミスの校訂版は、ユースフ版を参考に独自の順番に並べ替えた上で他に参照したバイルート版やパリ写本、ベルリン写本などを網羅的かつ最大限に加えて再編集したと言えるだろう。

以上のような各写本と印刷校訂本の簡単な比較検討から、ここでは次のような方針のもとに本文の校訂翻訳を進めることとする。スミスの校訂版は当時利用できた写本や印刷校訂本を文献批判しながらアラビア語本文の校訂と英語訳をおこなっており一定の評価ができる。しかしながら、1) ペテルスブルグ写本やランドバーグ写本などの重要な写本を利用していないこと、2) それらを含めた写本間の比較によって α 系統と β 系統の二つの本文伝承があることを解明しなかったこと、3) イヌに由来する人名の部分の比較から明らかになったように一貫した校訂手法なり論理で校訂したのではなく往々にして網羅的かつ恣意的な選択による再編集であることなどを斟酌して、本稿では便宜的にスミスの校訂版を基準点として参照しながら、 α 系統の写本により重きをなして、その補完的情報源と

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

してβ系統の写本ならびに印刷校訂本を利用することにしたい。

5 本文訳ならびに注釈

衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書

慈悲ぶかく慈悲あまねきアッラーの御名において

われらが主人たるムハンマドさまに、そしてゆかりの者たちすべてにアッラーの祝福と平安がありますように。そこにわれらは助けを求めます。

法学者のアブー・ムーサー・イーサー・ブン・アビー・イーサー・アルカービシー⁴⁷⁾が知っていることを伝えるものである。その言では、法官のアブー・アルカーシム・アリー・ブン・アルムハッスイン・アリー・アッタヌーヒー⁴⁸⁾が彼に読み聞かせておしえてくれたものである。

そのタヌーヒーの言では、アブー・ウマル・ムハンマド・ブン・アルアッバーズ・ブン・ムハンマド・ブン・ザカリーヤ・ブン・ハイヤワイヒ・アルハッザーズ⁴⁹⁾が、381年ラジャブ月11日の水曜日に⁵⁰⁾、次のように語り伝えた⁵¹⁾。アブー・バクル・ムハンマド・ブン・ハラフ・ブン・アルマルズバーンが、わたしたちに⁵²⁾語ったことは以下のとおりである。

【人がイヌにゆずったこと】⁵³⁾

あなたをアッラーが嘉し給うように！⁵⁴⁾ あなたは私たちがいるこの時代について、そして人びとがもはや誠実な友愛の情を欠いていることについて、そして地に堕ちた道徳と卑しき人倫について語った。あなたは誠実な友人を求める旅が果てしなく続くことも語った。信頼を裏切らない友人、永遠に続く友情を楽しめる相手を求める人は、まるで迷いながら道を進む人であり、求めて心を砕くほどに目的地から遠ざかってしまう⁵⁵⁾。まことにあなたが語ったとおりである。

まさしく聞きおよぶところでは⁵⁶⁾、アブー・ザッル・アルギファーリー⁵⁷⁾（神の

恵みがありますように！) はこう言った。人間を葉に例えるならかつては棘がなかったが、今や私たちは棘を持ち、葉を失っている。

また、このようにも言われている。私たちの友人が多くの約束をして、度を越した言い訳をするとき、私たちは約束に嘘があるのではないか、おおげさな言い訳なのではないか⁵⁸⁾ と不安に思う。ある人が心からの約束をしたと信じられる日々は過ぎ去り、あやまちについて言い訳しない人はいなくなった⁵⁹⁾。

ラビード⁶⁰⁾ は次のように言った。

暖かい保護の翼のもとにいた日々は過ぎ去り、私は皮癬を患った人びとの末裔のもとに残された。

アブー・アルアッバース・アルムバッラド⁶¹⁾ は、師の一人がこう言ったと述べている。「私がビシュル・ブン・アルハーリス⁶²⁾のもとに一日いたときのことだが、彼はふさぎこんで日没まで何も話さなかった。それから彼は頭をあげるとこう誦した。

做うべきおこないをなし、不快なおこないすべてを忌み嫌っていた人たちは行ってしまった。私はたがいのあらがしに興じ⁶³⁾、たがいを罵りながら保身に走る人たちのただ中に残された。

このような詩もある⁶⁴⁾。

私が来るのを見て喜びながら、「ようこそ！」と言ってくれた人たちは行ってしまった。だが残されたのは、私が来るのを見て暗い顔になり⁶⁵⁾、「彼が来なければよかった！」と言う人たちだ。

別の詩人はこう言った。

本物の人たちは自らの道を歩んで行ってしまった。私たちは墮落したナ

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

スナース（人間もどき）⁶⁶のただ中にとり残された。目には人間のように映る者たちだが、試練にあえば⁶⁷人間ではないことがわかる。

さらに別の詩人もこう言った⁶⁸。

多くの人びとから塩⁶⁹は消え失せ、よき人たち⁷⁰はもう逝ってしまった。もっとも醜悪な者たち⁷¹が残った。死が彼らから〔私たちを〕解放してくれるように！

また別の詩人はこう言った。

かくある者たちは去ってしまった。私が怒っていたとしても、我慢してくれる⁷²。私が非礼であったとしても、礼を失しない。私が念願のものを手に入れば、ともに喜んでくれる。私が物惜しみしたとしても、同じようにはしない。

アブー・アブドゥッラー・アッサドゥーシー⁷³は私に次の詩を吟じてくれた⁷⁴。

恵みの雨のような人たちは行ってしまった。罰⁷⁵をくだされた者たちのみが残った。今や、親族の絆は断たれ、もともとそのようなものはなかったかのようだ⁷⁶。人間たちはみな同じ。会う人はだれもが醜さを露呈している。貧者は羨望にまみれ、妬ましさにむしばまれる。富者⁷⁷は吝嗇を見せつける。豊かな富に恵まれたゆえに、あなたに恩を施したと思ってもいようが、恩をくだされたのは別の御方⁷⁸。

また別の詩人はこう言った。

高貴な人びとは行ってしまった。彼らは枯れて風に舞う落ち葉のよう。彼らの死後、その住処は変わってしまい、悪しき末裔が善の座を奪った⁷⁹。私は邪悪への警戒を怠らず、夜にもてなす友人⁸⁰をさえ恐れる世に生きている⁸¹。

さらに別の詩人はこう言った⁸²⁾。

人びとは、もはやあなたが慣れ親しんでいた者たちではない。その家もあなたが知っていた家ではない⁸³⁾。あなたが愛した人すべてがあなたを愛しているわけではなく、あなたの友となった人すべてがあなたに義を通すわけではない。

そして別の詩人はこう言った。

真実の人びとと栄光の御代は去った。だが数少ないイヌたちは残った。オオカミとして人とかわからぬのであれば、いつかはオオカミに食われてしまうだろう。だが彼らは人のような顔をして、身には衣服をまとっている。あなたが会おうのはけちな嘘つきのみ。その者の目には⁸⁴⁾ あなたの絶望が刻まれている。

別の詩人はこう言った。

美德で知られた人たちは行ってしまった。干ばつになると鉢⁸⁵⁾を差し出した寛大な人びとは行ってしまった。もはやそのような人たちは一人もいない。一人前になったあなたには⁸⁶⁾、そのような人はもういないのだとわかるはずだ。残された者たちには美德も知性もない。ただわずかな名も知れぬ人たちを除いては。その者はいずこに？

別の詩人はこう言った。

その死を嘆くような人たちは行ってしまった。彼らと別れて私は一人になってしまった⁸⁷⁾。先人たちは去り、私はあとに残された。かくしてわがあとに続く人も行ってしまおうだろう。彼らは集めたものをほかの人のために残していった。かくして私もあとから来る人のために持ち物を残そう⁸⁸⁾。

アブー・タンマーム⁸⁹⁾はこう言った。

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

まどろむような時⁹⁰⁾の流れが彼から去り、その肩から上着が脱がされたなら、彼は私たちとともに人生⁹¹⁾を取り戻すだろう。だがわれらの時はロバのごとく愚かだ⁹²⁾。

別の詩人はこう言った。

美德をそなえた人たちは去り、約束と義務を忠実に果たしたわれらの祖先も行ってしまった。今や塵にも劣る人たちのただ中に取り残され、辛い日々を送るのみ。塵芥⁹³⁾がきまぐれに飛びかい、支配する者は支配される者になってしまった。邪悪がよせ集まり、あまりにも遠くから声をかけたときのように、善に耳をかたむける者はいない⁹⁴⁾。ものごとが変わるのなら、目の前の者たちを身代金に代えてでも行ってしまった者たちを呼び戻そう。

アリー・ブン・アルアッパース・アッルーミー⁹⁵⁾の次のような詩が語られた。

英雄として称えられ、馬の手綱を握った人びとは行ってしまった。彼らの武勲が謳われ、その美点は称揚された。彼らの寛大さは誰もが認めた。名声にふさわしき者の心には称える声が届く。信者の心に説教が届くように。卑しき人びとを避けよ。彼らを称えることはただの偶像崇拜にして、報われることはない。私が美しい牧野のごとき賛辞を述べたとき、いかに多くの者がこう言うだろうか。「めっそもないお言葉！ だが私はそのような者ではない」。私はよき報いを重んじ、帳尻をあわせよう⁹⁶⁾。

アブー・ハッフアーン⁹⁷⁾は私にこう語った⁹⁸⁾。

有象無象が騎乗しているとき、私があなたがたのただ中に徒歩で立っているのを見て驚くな。有象無象が高貴の人より上にいるとしてもなおさらだ。水の上にはかすや泡⁹⁹⁾が浮くのだから。

彼¹⁰⁰⁾は語った。私は¹⁰¹⁾ある日、イスマイル・ブン・ブルブル¹⁰²⁾に出会った。

彼は徒歩だった。私が彼に「いったいどうして歩いてきたのですか？」と言うと、彼は答えた。

寛大な人びとが周囲にほとんどおらず、歩かざるをえませんでした。卑しい人たちは莫大な富を持っているのに。私だけが困ったわけではありません。すべての人が等しく困っているのです。

あなたをいと高きアッラーが嘉し給うように！¹⁰³⁾ あなたは私に求めた。イヌが邪悪な友人に勝っているとされている点について、隠されているものも明らかなものも含めて、細大漏らさず集めるようにと。そこで私はこの件について充分なあかし¹⁰⁴⁾を集めた。あなた（アッラーが嘉し給うように！）は、封印の守護者¹⁰⁵⁾たるアブドゥッラー・ブン・ヒラール・アルカーフィー・アルマフドゥーム¹⁰⁶⁾とその隣人の話¹⁰⁷⁾について、きっとご存じだろう。その隣人がアブドゥッラーにイブリース¹⁰⁸⁾（アッラーの呪いがありますように！）に宛てて、隣人が望むことについての書状を書くようにと求めたことがあった。この話が疑わしいとしても、ある種の人びとにとってはよいたとえ話となるだろう。アブドゥッラーはイブリースに書状を書き、望むところを強調した。その隣人が書状をイブリースに届けると、イブリースは目を通して接吻し、両目の上に置くとこう言った。「アブー・ムハンマド¹⁰⁹⁾の仰せに従おう。お前の頼みは何か？」隣人は答えた。「私の隣人は寛容だ。その人は私に好意を持ち、私や子どもたちに家族によくしてくれる。私に必要なことがあれば、彼がかなえてくれる。借金が必要になれば、彼が金を貸してくれるし、すぐに用立ててくれる。私が遠出することがあれば、彼が私のかわりに留守家族の面倒をできるかぎりみてくれる」。これらの言葉を聞いてイブリースはこう言った。「よろしい。すばらしい！」その隣人がアブドゥッラーについて話し終わると、イブリースが言った。「彼について何を望むのか？」隣人は答えた。「彼の幸せな暮らしを終わらせて、彼を貧しくしてほしい。今の彼のようにも、豊かな財産も、長い寿命も、ずっと健康でいることも私には我慢ならない」。するとイブリースはこれまで聞いたこともないような叫び声をあげ、イフリートたちとその軍勢がぐるりと取り囲んだ。「何事でしょう？ 主〔あるじ〕なるおかた」と一同はイブリースに尋ねた。イブリースが彼らに答

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

えた。「おまえたちは全知全能のアッラーがおれよりも悪いものをお創りになったことを知っているか？」一同は答えた。「いいえ、知りません」。イブリースは続けた。「わが前に立つ者を見よ。こいつはおれよりも悪い者だ」

今、あなたが親しくしている者たちに思いをめぐらせるならば、件の書状をイブリースにもたらした男の同類を大勢知っているだろう。彼はあなたに会えばあなたを歓迎する。だがあなたと別れれば¹¹⁰⁾、あなたをひどく中傷する。あなたには親しげな顔を見せるが、心のなかに欺瞞を隠してあなたを損なう。あなたは裏切りについて言われていることを知っているだろう。預言者（アッラーの祝福と平安がありますように！）はこう言った。「この世で二つの顔を持つものは、復活の日に火の舌を二つ持つだろう！」預言者はこうも言った。「中傷に気をつけよ。それは姦淫よりも悪い。姦淫した男がまことに後悔すれば、アッラーはそれを取りなされよう。だがアッラーは、中傷された者がゆるすまでは中傷した者をおゆるしにならない」¹¹¹⁾

ビシュル・ブン・アルハーリスが語り伝えるところでは¹¹²⁾、アルフダイル・ブン・イヤード¹¹³⁾はこう言った。「敵にさえ裏切らないと安心されない限り、神を畏れる者の仲間とはなれない」¹¹⁴⁾。続けて彼は言った¹¹⁵⁾。「あきれはてたことに、かの者たちは行ってしまった！友人でさえも恐れるような人であれば、どうして敵が安心しようか？」このようなことを言った人もいた。「よき仲間たちと貸し借りを共にする人たちの世は去ってしまった。敵を警戒するように、友人を警戒せよ。万事慎重にかまえ、友人に秘密を漏らすな。あなたとの関係にひびが入ったとき、その友人は秘密を話してしまうだろう」

ザイド・ブン・アリーは次のような詩の一節を吟じてくれた。

不誠実な¹¹⁶⁾友人との友情に気をつけよ。その人は甘さと苦さをあわせ持っている。そして友情の日々にあなたのあやまちを数えあげ、恨みを募らせる¹¹⁷⁾。

ある賢人が尋ねられた。「どのような人を最も警戒すべきでしょうか？」賢人は答えた。「強力な敵、暴虐なスルタン、欺瞞に満ちた友人」

私はディウビル・ブン・アリー・アルフザーイー¹¹⁸⁾の次のような詩を聞いた。

友人のふりをするのは敵だ。朝夕の飲み物を彼とわかちあっている。彼には二つの顔がある。外面は従兄弟¹¹⁹⁾、内面は海千山千の悪党¹²⁰⁾！面と向かってはあなたを喜ばせ、陰ではあなたを損なっている。悪党¹²¹⁾とはそういうものだ！

クサイイル・アッザ¹²²⁾もこう言った。

あなたは、一緒にいないときにあなたのどの美点も不面目に変えてしまうような人びとと共にいる。彼らはあなたの面前では声をつにする。「あなたこそ誰よりも重んじられる人です！」

イブン・アビー・ターヒル・アルカーティブ¹²³⁾は次のような詩を私に披露した。

あなたが慣れ親しんだ時は変わってしまった。友情も変わってしまった。人びとは欺瞞と狡猾を兼ね備えるようになり、だれもが二枚の舌を持っている¹²⁴⁾。

【人間の最良の友】

あなたをご存じだろう（あなたをアッラーが嘉し給うように！）が、イヌが飼い主に寄せる愛情は、父が息子によせる愛情、あるいは兄弟どうし¹²⁵⁾の愛情にも勝っている。イヌは飼い主がその場にいようがいまいが、飼い主が眠っていようが起きていようが、飼い主を警護してその家族¹²⁶⁾を守る。イヌは手荒くあつかわれようとも、この役目をおろそかにすることはない。イヌは自らが見捨てられようとも、人間を見捨てたりはしない¹²⁷⁾。

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

ある人が賢人にこう言ったそうだ。「よき忠言をください」。その賢人は答えた。「この世では禁欲的であれ。誰とも競ってはならない。イヌがその主人にするように、いと高きアッラーに誠をとおせ。主人はイヌを飢えさせて打擲するかもしれないが、イヌはあくまでも忠実に主人を守る」

ウマル¹²⁸⁾・ブン・シュアイブが語ってくれたことなのだが、彼の父が祖父から聞いた話によれば、アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように！）は、殺された男を見てこう言った。「この男はどうして殺されたのか？」人びとは答えた。「おお、アッラーの御使いよ。彼はバヌー・ズフラの一団¹²⁹⁾にでくわし、雌羊をとったのです。そこで群れを守っていたイヌ¹³⁰⁾が彼にとびかかって彼を殺してしまいました」。アッラーの使徒はこう言った。「彼は自分で自分を殺したのだ。信仰¹³¹⁾を失い、偉大にして権威ある主人に刃向かった。そして同胞を裏切ったのだ。この裏切り者よりもイヌのほうが秀でている」。それからアッラーの使徒は仲間たちにこう言った。「同胞たるムスリムの命や富¹³²⁾や家族¹³³⁾を守ることにかけて、主人の群れを守ったこのイヌよりも劣っている者がここにいるというのか？」¹³⁴⁾

ウマル・ブン・アルハッターブ¹³⁵⁾（アッラーが彼を嘉し給うように！）は、ベドウィンが一頭のイヌを走らせているのを見た。彼は尋ねた。「あなたはここで何をつれているのか？」ベドウィンは答えた。「おお、信徒の長よ！ 彼は何とすばらしい道連れだろうか。何かを与えれば感謝する。とりあげたとしても辛抱する」。ウマルは言った。「何というよい友人だろう！ 彼をずっとそばに置くように！」

イブン・ウマル¹³⁶⁾（アッラーが彼を嘉し給うように！）はイヌがベドウィンといっしょにいるのを見て彼に言った。「そこに何を持っているのか？」ベドウィンは答えた。「私に感謝し、私の秘密を守る者だ」。イブン・ウマルは言った。「そういうことであればあなたの友人を大切に下さい！」

アルアフナフ・ブン・カイス¹³⁷⁾はこう言った。「あなたのイヌがあなたに尾を

振るのなら、本心から尾を振っているのだ¹³⁸⁾と安心してよい。だが、お追従をする¹³⁹⁾人間を信用してはならない。お追従をする人たちは裏切り者だ！」

アッシャアビー¹⁴⁰⁾はこう言った。「イヌの最もすぐれた性質は、愛情を示すときに偽善をおこなわないことだ」¹⁴¹⁾

イブン・アッバース¹⁴²⁾(アッラーが彼を嘉し給うように!)もこう言った。「信用できるイヌは欺瞞に満ちた人間よりもよい」

アルカーシム・ブン・ムハンマド¹⁴³⁾・アッラスディーが語るところによると、彼はムフリズ¹⁴⁴⁾・ブン・アウン¹⁴⁵⁾からその話を聞き、またその彼はある男を介して聞いたとのことだ¹⁴⁶⁾。ジャアファル・ブン・スライマーン¹⁴⁷⁾はこう言った。「マーリク・ブン・ディーナールがイヌといっしょにいるのを見た。私は彼に言った。『それは何か?』彼は答えた。『悪しき仲間よりもよいものだ。』」

アブー・ウマル・ブン・ハイヤワイヒ¹⁴⁸⁾が私たちに語ったところでは、彼はアブー・アルカーシム・ブン・ビント・マニーウ¹⁴⁹⁾から聞き、その彼はムフリズ・ブン・アウンから聞いた。さらに彼がイブン・アビー・ターヒルから聞いたこの話によると¹⁵⁰⁾、ハンマード・ブン・イスハーク・ブン・イブラーヒーム・アルマウシリー¹⁵¹⁾は、彼の父¹⁵²⁾がこう言ったと述べた。「ある日のこと、私はアルファドル・ブン・ヤフヤー¹⁵³⁾に出会った。彼はたまたま飲み物を飲んでいて、彼の前にはイヌがいた。私は彼に言った。『イヌが飲み友達ですか?!』彼は答えた。『そのとおり。彼は私を害したりはしない。まったくのところ、他人からの邪魔を追い払ってくれる。彼は私が彼に与えるわずかばかりのものに感謝し、私が夜に休んでいるときや、昼間にうたたねをしているときは警護してくれる。』」

アルハサン・ブン・アブドゥルワッハーブは次のような詩を吟じてくれた。この詩の作者は友人を譴責し、イヌを称えている。

あなたはイヌにも劣る性質の持ち主だ。生まれつきイヌは助けと守りを

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

提供してくれる。イヌは忠実で、飼い主が望んだとおりのことをする。近隣一帯を守ってくれる。殴ったりしなくても自らすすんでしなやかに動く。イヌはあなたの怒りをなだめ、あなたを失望から救ってくれる。あなたが彼のようにであれば、わが心の天火で燃えるようなことにはならないだろう。

ある語り手がこう言った¹⁵⁴。「アッラビーウ・ブン・バドルは、イヌを自ら養っていた。アッラビーウが亡くなって埋葬されると、イヌは墓石の上に身を投げだし、死ぬまでそこにいた」。彼はこのようにも言った。「アミール・ブン・アンタラは猟犬と番犬を飼っており、いっしょにいるときはかわいがった。アミールが亡くなると、家族も親族もすでに立ち去っていたのに、イヌたちは死ぬまで彼の墓にとどまった」

次の話はシャリーク¹⁵⁵が語ったものだ。アルアアマシュ¹⁵⁶はイヌを持っており、そのイヌは彼が家を出て戻るまでずっとつきしたがっていた。ある人がこのことを話題にすると、彼はこう答えた。「私は少年たちがイヌをたたいているのを見た。そこで彼らを追い払った。このイヌは私がやったことをわかっており、ずっと私に感謝している。私を見たイヌは尾を振り、私の周りから離れない」。アルアアマシュが今の世に生きていて（あなたにアッラーのご加護がありますように！）、アブー・サマーア・アルムアイティーとその同僚たちについての話を聞いたとしたら、彼はそれまでもまして自分のイヌを愛しただろう！

アブー・サマーア・アルムアイティーは¹⁵⁷、彼に寛大さを示したハーリド・ブン・バルマク¹⁵⁸を揶揄してこう書いている。ヤフヤーが宰相に任じられたとき、アブー・サマーアは祝賀に向う人びとと連れだっていた。ヤフヤーが言った。「そなたが作った詩を聞かせてほしい」。アブー・サマーアは答えた。「どの詩ででしょうか？」ヤフヤーは次の詩を口にした。

私はヤフヤーとハーリドのもとを訪れた。アッラーへのまことの信心をもって。だが、彼らは私をみくだした。私がいつかアッラーを信じなくなり、彼らが崇拜するものを崇拜していたなら¹⁵⁹、彼らは私をみくださなかつただろう。

そしておそらくは、彼らから一目おかれる者となっていただろう¹⁶⁰。だが私はアッラーとその啓示を否定する者たちの同類ではない。

アブー・サマーアは言った。「私はこの詩を知らないし、だれの作かも知らない」。ヤフヤーが彼に言った。「作者を本当に知っていたら、自分の財産を喜捨すると誓えるかな？」アブー・サマーアは誓うと言った。ヤフヤーは続けて言った。「妻を離縁すると誓うか？」そこでアブー・サマーアはそれも誓うと言った。ヤフヤーは、その場にいたアルガッサーニー・マンスール・ブン・ズィヤード、アルアシュアスィー、ムハンマド・ブン・ムハンマド・アルアブディー¹⁶¹のほうを向いて言った。「私たちは、アブー・サマーアに新しい家と妻と使用人と家具¹⁶²を与える必要があると思う！召使よ、彼に一万ディルハム、十の衣服をおさめた箆筒を用意しなさい」。そこで召使はこれらを彼に渡した。アブー・サマーアが去ると友人たちは彼を祝福し、何があったのかと尋ねた。彼はこう言った。「私に言えることは、彼は寛大なふりをした淫売の息子だということだ！」ヤフヤーはすぐにこの件を聞きつけ、彼を呼び戻した。ヤフヤーが話しかけた。「アブー・サマーア、あなたは私たちを揶揄した人物を知らなかった。あなたは私たちをそしった人物を知らないのだな」。アブー・サマーアが彼に言った。「私はその人物を知らない。宰相よ¹⁶³、あなたが聞いたことは私に向けた嘘のつくりごとだ¹⁶⁴」。ヤフヤーは彼をじっと見ると、こう言った。

爪でひっかかなければ、そして噛んだときにイヌの歯がなければ、悪口的になるだろう。そして心強い親戚¹⁶⁵も辱めを受けるだろう。

アブー・サマーアは言った。「いいえ、宰相よ。ある詩人がこう言った」。

高貴な人たちでさえ、栄光をかちとることはできない¹⁶⁶。強者であってさえ、他に額づくまでは。そして酷いあつかいを受けるまでは。だが、あなたはそれでも明るい顔でそれら諸人を見るだろう。卑屈からではなく、度量の深さによってゆるすだろう。

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

ヤフヤーは微笑むとこう言った。「私はあなたをゆるそう。そしてあなたが性根から邪悪を捨てず卑屈を逃れていないことがわかった。運命づけられた邪悪さを潤沢に持てるあなたをアッラーがお守りくださるように！」それから彼は次のような教訓となる詩を語った。

もし人が広い度量を持っていないのなら、広大な地所でさえも彼には狭いものとなるだろう。もし人が分別を欠くならば、育ちをもってしても補うことはできない。

さらにヤフヤーはこう言った。「まさに、ウマル・ブン・アルハッターブ¹⁶⁷⁾ (アッラーが彼を嘉し給うように!) が言った通りだ。信徒は怒りを報復に向けてはならない!¹⁶⁸⁾」のちにアブー・サマーアは、彼に寛容を示したスライマーン・ブン・ジャアファル¹⁶⁹⁾を揶揄したので、アッラシード¹⁷⁰⁾は彼の髪と髭を剃るようにと命じた。アブー・サマーアのような人たちは多いが、長々と引用することはやめておこう。

ある人がこう言った。人びとは今やブタのようだ¹⁷¹⁾。イヌに出会ったのなら手放すな。今時の人間たちよりもイヌのほうがすぐれている。

ある詩人はこう言った¹⁷²⁾。

イヌを得たのなら手放すな。ほとんどの人はブタになったのだから。

アブー・アルアッバース・アルアズディー¹⁷³⁾は私に次のような詩を語った。

イヌのような人間¹⁷⁴⁾と思われるような人は、本物のイヌ¹⁷⁵⁾よりもあなたを害する。本物のイヌであれば、追い払って去らせることができる。だがイヌのような人間はしゃがみこんであなたを非難しようとする。それにイヌは周囲の人を害さない。だが、イヌのような人間はひっきりなしにあなたを苦しめる¹⁷⁶⁾。

次の話はアルアスマイ¹⁷⁷⁾にまつわるものであり、アフマド・ブン・マンスールが彼の父から聞いたこととして私たちに語った。「あるベドウィンが臨終を迎えた。彼のテントの片側にはイヌがいた。彼は長男にこう言った。『彼の面倒をよく見てくれ。彼には私がいつも重んじていたいくつもの美点がある。夜の暗闇のなかで客人のことを私におしえてくれたこともあった。その人は焚火をしながら眠ってしまっていたのだ。』」

アブー・アルファドル・アフマド・ブン・アビー・ターヒル¹⁷⁸⁾は次のような話を私に語った。「ある文筆の士が語った。『イブラヒーム・ブン・ハルマ¹⁷⁹⁾は何頭かのイヌを持っていた。イヌたちは客人に気づくと喜び、吠えたりはしなかった。そしてすぐそばで彼らに尾を振った。彼はイヌたちを称えて次のような詩を作った。』」

わが客人が危険な闇夜のなかを案内されたのは、私の明るい火と私の吠えるイヌたちのおかげ。イヌたちは客人の姿を見つけて相手がわかった。彼らは相手を落ち着かせるかのように尾を振った。相手と気持ちが通じると、イヌたちはまるで歓迎のあいさつを言っているかのように客人を迎え入れた。

アルアスマイ¹⁸⁰⁾はこう言った¹⁸¹⁾。「私は、ある王が、ガゼルを猛然と追いかけるイヌの跡につきながら歓喜の叫びをあげたのを聞いた。おお！イヌたちのために私自らが人質になってもよい！」

アブー・ヌワースも同じようなことを言った¹⁸²⁾。

〔よい獵犬は〕¹⁸³⁾かけがえのないものとして¹⁸⁴⁾守られる¹⁸⁵⁾。彼らには名がつけられ、しっかりと訓練される。

彼はこのような詩¹⁸⁶⁾も作った。

私はイヌを称えよう。あきることなく飼い主に従い、そのひたむきさは幸福感とともに報われる。彼の良きことはすべて彼のイヌとともにある。まるで

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

飼い主のほうがいつもイヌに仕えているかのごとく。夜になれば飼い主は寝床のそばにイヌを呼ぶ。イヌが何も着ていなければ、飼い主は自分の上着をかけてやる。イヌには額に白い印¹⁸⁷⁾があり、その脚¹⁸⁸⁾は下のほうが白い。見事な姿は目を喜ばせる。その顎¹⁸⁹⁾は何とすばらしいのだろう。鼻づらは何と美しいのだろう。イヌが狩りをすると、ガゼルは窮地に追いこまれる。比類なき何とすばらしい獵犬であることか¹⁹⁰⁾。

アブー・ヌワースにはこれと同じ趣旨の作品がいくつもある。そこには珠玉のものもある。イヌの本質的な価値について人口に膾炙していることは多い。そこには良いものも悪いものもあるし、称えるものも貶すものもある。イヌはクルアーンやハディース〔預言者の言行録〕のなかにも登場する。詩やことわざにも出てくるし、吉兆や凶兆を示すときや、人に名前をつけるさいにも使われる。例えば¹⁹¹⁾、アクラブ・ブン・ラビーア¹⁹²⁾、ムカッラブ・ブン・ラビーア・ブン・ニザール、キララブ・ブン・ラビーア¹⁹³⁾、クライブ・ブン・ヤルブーウ¹⁹⁴⁾、ムカーリブ・ブン・ラビーア・ブン・ニザール、キララブ・ブン・ヤルブーウなど枚挙にいとまがない¹⁹⁵⁾。

イヌ（アッラーが汝を支えるように！）には多くの長所があり、短所をうわまわっている。まったくのところ、長所のほうが短所よりも圧倒的に多い。法官、法学者、信心深い人たち、統治者、禁欲的な人たちは誰もがみな、何が正しくて何が禁じられており、何が間違っているかをわきまえている。これらの人たちは、イヌを飼うことに¹⁹⁶⁾反対していない。さらに王侯の宮殿でもイヌを見ることができる。これらのことに快く思わない人がいたとしたら、彼らはそのことを言葉にしたら、イヌを飼うことを禁じていだらう。まったくのところ、もし誰かがイヌを殺したら、そのことで罰せられるべきだというのが彼らの見解なのだ。過去においてイヌを殺すように命じた者は誰であれ、そうすることに意味があるととも何らかの理由があつてそうしたのだ。イヌというものを総じての話となると、まったく別の問題だ¹⁹⁷⁾。

ウマル・ブン・アルハッターブ（アッラーが彼を嘉し給うように！）はこう言った。正しい分別を持たぬ者は、イヌは野生の捕食者¹⁹⁸⁾だと言う。もしそうなら、イヌは人に慣れたりなどしなかつたらうし、野生の補食獣を避けたりし

ないだろう。茂みを避けることもないだろうし、家に落ち着くこともないだろう。砂漠をいやがることもないだろうし、荒地を避けることもなく、人の家のなかで人びとの周囲に座ることもないだろう¹⁹⁹⁾。まさにそのとおりだ。イヌは地面の上で眠ったり伏せたりすることを嫌うからだ²⁰⁰⁾。イヌには絨毯やクッションがその上で寝そべるものだとわかっている。イヌが近づこうとする場所はどこも清潔でよく整えられており、それを咎められることもない。集会では、イヌは主人がとりのけておいた²⁰¹⁾ 最も居心地のよい場所を知っている。

さらに続けよう。イヌもネコも彼らの主人をよく知っており、名を呼ばれば応えるし家の場所もわかっている。彼らはその居場所でわが家のように感じてくつろいでいる。追い出されても戻ってくる。飢えたとしても我慢強く耐え、酷くあつかわれても耐え忍ぶ²⁰²⁾。イヌの美点のなかには、彼らが主人のそばにやって来て顔を向け目をあわせ、愛しそうに主人のすぐそばによってくるということがある。イヌが主人やその子らと遊ぶことさえある。ふざけて甘噛みをしてくるが、痕になるようなことはない。とは言ってもイヌには牙があり、その気になれば木を砕くこともできる²⁰³⁾。

ある詩人は次のように言っている。

イヌを憎む者よ！ わがことばを聞け。よく耳を傾け、心を閉ざすな。イヌには五つの高貴な特質があるので、知っておきなさい。よくしてくれる人たちを守る。獵²⁰⁴⁾ や警護に用いてくれる人たちに忠実だ。イヌは主人の持ち物から目を離さない。大胆な者たちが威嚇して声をあげても不眠不休で。夜になると、近くにいるイヌに守ってもらおうと遠吠えに似せて呼ぶ者たちを助ける²⁰⁵⁾。

真実の人（スィッディーク）アブー・バクル²⁰⁶⁾ はこう言った。ある男が砂漠で迷い、夜が来るのを恐れた。彼はベドウインのイヌ²⁰⁷⁾ が吠え返してくれるようにイヌのごとく吠えた。彼はイヌたちの鳴き声をたどって天幕まで行くことができた。

別の詩人はこう言っている。

あなたがイヌに似ていると言われても、その者たちには闇に続く暁が見えないのだ。あなたはまわりの人たちを守らないが、イヌは忠実に守る。ささやかな²⁰⁸⁾ 親切にさえ感謝し、一生忘れないのだ。遠くからイヌを呼べば、身を低くしてやってくる²⁰⁹⁾。わが唯一の願いと望みと希望は、この暁とともにあなたが真つ当なイヌとなることだ！

アブー・ウバイダ²¹⁰⁾ はある詩人による次の詩を私に語った²¹¹⁾。

隣人や血をわけた兄弟たちは彼を置き去りにした。いっぽう、彼のイヌは飼い主を（掘って）探しあてた²¹²⁾。飼い主はイヌをぶっていたのに。

アブー・ウバイダはこの詩にかかわる話を続けた。バスラに暮らすある男が、アルジャッバーナ²¹³⁾ に向かうために隊商²¹⁴⁾ を待っていた。イヌのうちの一頭が彼の後をついていった。男はイヌについてきてはしかなかったので、イヌを追い払ってぶった。男がイヌに石を投げると、イヌは血を流した。だがそのイヌは頑なに男の後をついていった。男が目的地に着くと、一団の人びとが意趣晴らしを始めた。彼といっしょにいたのは、隣人の一人と兄弟の一人だった。だが二人とも彼を見棄てて逃げ出してしまい、彼を相手の手にゆだねてしまった。男は多くの傷²¹⁵⁾ を負い、とある井戸に投げ入れられた。上から土がかぶせられて、男は埋められてしまった。そいつらは男がもう死んでしまったと思ひ込んだのだ。このあいだ、男のイヌはそいつらにむけてうなっていた²¹⁶⁾ が、そいつらはイヌに石を投げた。そいつらが去ってしまうと、イヌは井戸の上にやって来て、鼻をならしながら²¹⁷⁾ 土をかきむしったので、飼い主だった男の頭が出てきた。男はかろうじて息をしていたが、もはや力尽きる寸前だった。彼の命は風前の灯だったのだ！²¹⁸⁾ 男がこのような状態にあったとき、幾人かの人たちが通りがかり、イヌがいるのを見て訝しく思った。人びとはイヌが墓を掘るように土を掘り返しているを見た。そこで人びとはその場所まで行き、瀕死の男を見つけた。彼らは息のあった男を掘りおこすと家族のもとに送り届けた²¹⁹⁾。アブー・ウバイダによると、この場所は「イヌの井戸」²²⁰⁾ と呼ばれるようになった。この逸話は、イヌが持つ生来の忠実さや友情、飼い主を守ろうとする強い意志を示している。さらにイヌの学習能力、忍耐強さ、高貴さ、ずばぬけた分別、比類ない有益さをも物語っている。

アブドゥッラー・ブン・ムハンマド・アルカーティフ²²¹⁾ が彼の父親から聞いた話として語ってくれた²²²⁾。父親もムハンマド・ブン・ハッラードから聞いたのだが、ある男がアルメニアの知事²²³⁾ と連れだつてあるスルタンのもとに赴いた。その男が帰宅するさい、とある墓地を通りかかった。その墓地には廟のある墓があった。そこにはこう刻まれていた。「此処はイヌの墓なり。かかる話を知りたい者は、どこそこ村までさらに進むべし。其処に語り伝えし者あり」。男はその村の場所を聞き、方角を教えてもらった。男は村をめざした。男が村人に尋ねると、ある老人のことを教えてくれた。そこで男はその老人のもとに使いの者を遣り、会いにきてくれるように頼んだ。老人がやって来た。百歳を超えている。男が老人に尋ねると、老人は答えた。「さよう、このような話なのです。このあたりには強大な王がいて、娯楽や狩猟や旅行を楽しむことでつとに知られていた。王はイヌを飼っており、自分で世話をして名前もつけていた。イヌはどこに行くにも王といっしょだった。王が昼食や夕食をとるさいには、自分の食事を分け与えていた。あるとき、王は狩猟小屋²²⁴⁾ の一つに出かけていき、使用人にはこう言った。『サリーダ (ミルクプディング)²²⁵⁾ を用意するよう料理番に言うように。余はサリーダをどうしても食べたいのだ。美味しく作ってくれ』。こうして王は狩猟小屋へと出かけていった。料理番はミルクを持ってくると王のために大きなサリーダを作ったが、蓋をするのを忘れてしまった。そして他の料理を作るのに忙しかった。すると壁の裂け目から現れた毒蛇がミルクをすすり、サリーダの中に毒を吐いた。このとき、イヌは伏せたまま一部始終を見ていた。もし毒蛇を追い払えるのなら、そうしていただろう。だが、イヌには蛇、それも毒蛇に対抗する術などなかった。王には口のきけない老女²²⁶⁾ の召使がいた。彼女は毒蛇がやったことを見ていた。その日の終わり、王は狩猟から戻ってきて言った。『召使よ、最初にサリーダを持ってきなさい』。王の前にサリーダが置かれると、口のきけない老女が身ぶりで何事かを示した。だが、誰も彼女が言うことを理解しなかった。イヌはうなり、吠えた²²⁷⁾。だが、誰もイヌに注意を払わなかった。イヌはしつこく吠え続け、意図するところを伝えようとした²²⁸⁾。王はイヌにいつものように食べ物を投げ与えた。だがイヌは食べ物には触れようとせず吠え続けた。そこで王は召使に言った。『あのイヌを連れていけ。何かよくないことがあるのだらう』。それから王はミルクに手をのばした。王が食べようとする

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

のを見たイヌは、食卓の中央にとびのり、自分の口²²⁹⁾をミルクに²³⁰⁾つつこんで舐めた。イヌは倒れて死に、肉はバラバラになった。王はイヌのようすとイヌがやったことを見て驚愕した。口のきけない老女は、そこにいた人びとに向ってふたたび身ぶりで何事かを示し、人びとはそのイヌがおこなったことによって彼女の意図を察した。王は食客たちや従者たちに向って言った。『自分の命を投げうってわが命を救ってくれた生き物には報いねばならない。ほかならぬわが手で彼を運び、埋葬しよう』。こうして王は、自らの父と母の墓の間にイヌを埋めて廟を建て、あなたが読んだような碑文を刻んだ。これがそのイヌの物語です」

法官のアブー・アルアラー・ブン・ユースフが、信義に篤い²³¹⁾ある長老から聞いた話として私に語ってくれた²³²⁾。「ある年のことだが、巡礼に旅立った私たちは荷物を携えてアルヤーシリーヤ²³³⁾まで行き、清水のある場所で座って昼飯をとっていた。近くにイヌが伏せていたので、いくばくかの食べ物を投げてやった。私たちは腰をあげ、ナフル・アルマリクでとまった。私たちが携帯食²³⁴⁾をとりだすと、前日と同じイヌがそばに伏せていた。私は使用人たちにこう言った。『あのイヌは私たちについてきた。したがって養うのは私たちの義務だ。面倒を見てやりなさい』。そこで使用人たちはイヌの前に携帯食の包みの布を広げ、イヌは食事をした。イヌは私たちが足をとめるたびに、こうやってずっと後をついてきた。そして誰かが私たちのラクダや荷物に近づくと、うるさく吠えた。がこのため、私たちは泥棒にあう心配もなく²³⁵⁾、メッカに到着した。そこから私たちは商用のため²³⁶⁾イェメンまで下ることに決め、イヌはクバー²³⁷⁾まで私たちに同行した。私たちがバグダード²³⁸⁾に戻ったとき、イヌはまだいっしょにいた」

次の話はアブー・アブドゥッラーによるもので、彼には文法学者のアブー・ウバイド、アブー・アルヤクザーン・スハイム²³⁹⁾・ブン・ハフス²⁴⁰⁾、アブー・アルハサン・アリー・ブン・ムハンマド²⁴¹⁾・アルマダーイニー²⁴²⁾が伝え、彼らにはムハンマド・ブン・ハフス・ブン・サラマ²⁴³⁾・ブン・ムハーリブが伝えた。実は、私たちは別の経路で伝わったこの話をアブー・バクル・アブドゥッラー・ブン・ムハンマド・ブン・アビー・アッドゥンヤー²⁴⁴⁾からも聞いたことがあり、世間ではよく知ら

れているものなのだ。ある家の住人が猛威をふるう疫病²⁴⁵⁾に倒れた。地元の人たちは²⁴⁶⁾、その家の人たちは老いも若きも一人残らず死んでしまったと思った。しかしながらその家には、まだ乳を飲んでおり、這うばかりで立つことのできない男の子が残されていた。身をひそめていた地元の人たちはその家の扉の前まで行くと、出られないようにしてしまった。何か月か後、相続人の一人がその家に越してくると、扉を開けて中庭まで入っていった。そこでは男の子が雌イヌの仔イヌたちと遊んでいた。家の持ち主が²⁴⁷⁾飼っていた雌イヌだった。彼が雌イヌを見ていると、男の子が雌イヌのもとまで這っていき、雌イヌは男の子に自分の乳を吸わせた。この男の子はただ一人家の中に残され、たいそう空腹だったことがわかった。男の子は仔イヌたちが雌イヌの乳を吸うのを見て、雌イヌに頼ったのだ。雌イヌは男の子がひとたび乳を吸い終えても近くにとどまり、求めるままに乳を与え続けた²⁴⁸⁾。

アリー・ブン・ムハンマドから聞いたのだが、ムハンマド・ブン・アルフサイン・ブン・シャッタードがこのような話を語ってくれたそうだが²⁴⁹⁾。アルカーシム²⁵⁰⁾に任命されて、ナイサーブール²⁵¹⁾のアフマド・ブン・マイムーンの後継者となった私は、ラーシビーという一族のアリー・ブン・アフマド・アッラーシビーを訪ねていった²⁵²⁾。私は当地にある一軒の家に滞在し、隣人がかの一族に仕える兵士であることを知った。兵士はナシーム²⁵³⁾という名で、男ぶりがよかった。ナシームは一頭のイヌを飼っており、いつもいっしょに出かけ、ともに家のなかに入ってきた。イヌが家の扉のところに座っていると、ナシームはイヌをそばに呼び、自分が着ていた上着をかけてやるのだった。私はアッラーシビーに、この若者の地位と司令官は彼が家のなかでイヌをいれていることを認めているのか²⁵⁴⁾と尋ねた。このイヌは獵犬ではなかった²⁵⁵⁾。アブー・アルワリード²⁵⁶⁾はこう答えた。彼に尋ねてみよ、自分のことを語ってくれるだろう。そこで私は若者を呼ぶと、どうしてイヌを自分の家であのようにあつかうのかと尋ねた。彼は答えた。「アッラーの思召しで、あのイヌが大変なできごとから私を救ってくれたのです」。彼のその忌まわしい言葉に私は気分を害し、それ以上はとて聞かなくなかった。彼は言葉が続けた。「イヌの話を書いてくだされば、私のおこないをゆるす気になるでしょう。私が親しくしている友人にムハンマド・ブン・バクルというバスラ出身の男がいます。彼とはいつもいっしょでした。何年もの

あいだ²⁵⁷⁾ 食事をともにし、ナツメヤシでつくった酒など何でもわけあってきたのです²⁵⁸⁾。私たちはディーナワル²⁵⁹⁾ の人びととの戦いに出発し²⁶⁰⁾、もうすぐで家に戻るころでした。私は財布用の腰帯にいくばくかのディナール貨幣と多くの戦利品をつめこんでいました。彼はそのことをぜんぶ知っていたのです。私たちはとある場所で足をとめると、飲み食いを始めました。私がほろ酔い気分になったとき、彼が襲いかかってきたのです。私の両手両足を結わえて背の後ろで縛り上げました。彼は私をワーデイ（涸れ谷）に投げ捨て、私の持ち物すべてをとりあげたのです。そして私を置き去りにして逃げていきました。私は生存の望みを捨てました。そのとき、このイヌは私のそばに座っていました。そしてやはり私を置いて行ってしまったのです。しかしイヌはすぐに戻ってきました。一切れのパンを持ってきて私の前に置いたのです。私はパンを食べ、少しずつ水がある場所まで這って行って水を飲みました。イヌは一晩じゅう、私のそばにいて朝まで鳴いていました。やがて眠くなりました。イヌの姿が見えなくなりましたが、一切れのパンを持ってすぐに戻ってきました。私はそのパンを食べ、二日目も前日と同じことをしました。そして三日目、イヌは去っていきました。私は一人ごとを言いました。イヌはパンを持ってくるためにいなくなったのだろう。まもなく戻ってきて私にパンを投げるだろう。私がパンを食べ終えるまでに、私の息子が泣きながら見下ろしてきたのです。彼は言いました。『そこで何をしていますか？ 何が起こったのですか？』 息子はやって来ると私のいましめを解き、ワーデイから出してくれました。私は息子に言いました。『私がここにいるとどうやって知ったのか？ 誰がおまえをここまで案内してきたのか？』 彼は答えました。『あのイヌは毎日私たちのもとにやって来ました。そこでいつものようにひとかけらのパンをイヌに与えたのです。でもイヌはパンを食べませんでした。あのイヌはいつもあなたといっしょでしたから、イヌがあなたといっしょに戻ってこなかったことを訝しく思いました。イヌはパンを口にくわえたのに食べたりはせず、駆けだしました。これを見て私たちは驚き、イヌの後を追ってあなたを見つけたのです』。これが私とそのイヌの話です。私にとってこのイヌは、どの家族よりもどの親族よりも大切なのです」。ムハンマド・ブン・アルフサインはこうつけ加えた。私はナシームの手に縛られた痕を見た。醜い痕跡となっていた。

アブー・アブドゥッラーから聞いたのだが、これもアブー・アルフサインことムハンマド・ブン・アルフサイン・ブン・シャッダードが語ってくれた話だ²⁶¹⁾。「私はキリスト教徒であるアブドゥッラー・ブン・アッタバリー²⁶²⁾に会うため、ダイル・ムハーリク²⁶³⁾に行った。アッタバリーは、カリフのムウタディト²⁶⁴⁾のために農産物を任されていた²⁶⁵⁾。私は、彼の代理人であるイブラーヒーム・ブン・ダーラーンを同行して、バースィーリー・アッスフラ²⁶⁶⁾と呼ばれる村の土地測量をするための協力者たちを得たいと頼んだ。彼は私に言った。『今回の巡回のためにすでに使いを遣っています』。私は答えた。『私は道端に座っていたが、誰も通っていかなかった』。彼が言った。『私たちの前を通っていったイヌを見たでしょう？ あのイヌを遣ったのです』。これを聞いた私は憤慨し、彼を罰するように命じて罵った。そのことについてアッラーの御赦しを乞わねばならない²⁶⁷⁾。彼が私に言った。『一同がすぐにやって来なければ、わが命はあなた的手中にある』。この少し後、関係者一同が大急ぎでやって来た。一同の先頭にはイヌがいた。私はイブラーヒームに、どうやってイヌに伝言を持たせたのか、なぜイヌが来たのかを尋ねた。彼が答えた。『イヌの首に伝言の紙をかけ、道を行かせたところ、私が望むとおりの人たちを集めてきたのです。一同は伝言を読んで何をすべきかを知りました。そして書かれていますとおりにしたのです。』

罪を悔いあらためたある盗賊²⁶⁸⁾が、次のように語った²⁶⁹⁾。「ある人びとから教えてもらった町に行き、盗品を物色していた。だが、何も見つけられなかった。とある裕福な両替商が目をついた。そこで時間を稼ぎ、すきを見て彼の財布を盗った。さっとすり抜けたが、さほど行かないうちにイヌを連れた老婦人に出会った。彼女は自分に身を投げかけると接吻してまとわりつき、こう言った。『とうとう見つけた、愛しい息子よ』。この間じゅう、イヌは尾を振って俺の機嫌をとっていた。人びとが立ち止まり、俺たちを見た。老婦人がこう言った。『イヌをご覧ください。神さまに誓って申しますが、どうしたわけか彼のことがわかるのです』。人びとは驚いたが、俺は不審に思った。『彼女は乳母だろう。だからわからないのだ』。彼女が言った。『いっしょに家に来てずっとそこにいて』。彼女は俺を一人にせず、俺は結局彼女の家に行った。そこには若者の一団がいて飲み交わしていた。あらゆる種類の果実やいい香りの花が彼らの前に置かれてい

た。一同は俺を歓迎し、こちらに来ていっしょに座るようにと招いた。誰もが綺麗な服を着ていたので、失敬しようと目をつけた。俺は一同に飲み物を注ぎ、彼らは飲んだ。だが俺は控えめにしていたところ、やがて彼らは眠ってしまった。家のなかの全員が寝た。俺は立ち上がると彼らの物をひとまとめにして、去ろうとした。するとあのイヌがライオンのように襲いかかってきた。吠えながら後ずさりして、一同が目を覚ますまで吠えるのをやめなかった。おれは困惑して恥じた。夜が明けると一同は、前の日とまったく同じことをやり始め、俺も同じことをした。俺は夜になるまで、どうやってイヌをかわすかを考え続けたが何も思いつかなかった。一同が眠ってしまうと、俺は昨日と同じことをした。だが、前と同じように今度もイヌが立ちはだかった。俺は三晩試してみたがうまくいかず、あきらめて一同のもとから去ることにした。俺はこう言った。『もうおいとましよう。アッラーの御恵みを！』俺は一刻も早くそこから去りたかったのだ。一同が答えた。『あの老婦人次第』。そこで俺は彼女にいとまを願った。彼女が言った。『あの両替商から盗った物をよこしなさい。そうすればどこでも好きなところに行ってよい。この町にはとどまるな。私のもとにそのような不届き者はいません』。彼女は財布をとりあげると、俺を去らせた。俺としても唯一の望みは彼女のもとから消えることだった。俺はいくばくかの金をくれと彼女に泣きついた。彼女はそのとおりにしてくれた。彼女は町の外まで俺と同行した。イヌも一緒だった。そして町境を越えると彼女は立ち止まったが、イヌはそのまま俺が遠くに行ってしまうまでついてきた。それからイヌは後戻りをしたが、時折ふりむいては俺から目を離さなかった。俺もイヌを目で追っていたが、やがて姿が見えなくなった』

ジャバル地方²⁷⁰⁾の出身でおかみに仕える急使²⁷¹⁾だったある人物が、私に次のような話をしてくれた²⁷²⁾。「私は一団の人たちとイスファハーンをめざしていた。道にそってしばらく行くと、古くなって²⁷³⁾朽ちた隊商宿があった。なかには誰もいなかったが、突然、イヌが吠える声と激しい動きがあった。私たちが隊商宿のなかに入ると、ひとりの男がいた。われわれの仲間、顔見知りの急使だった。彼はイヌを伴っていた。そのイヌは彼がどこに行くにもそばを離れなかった。だが、麻葉(ヒヨス)を使って襲う泥棒²⁷⁴⁾に襲われてしまったとか。この

急使はうまくかわしたので、襲撃者は自分の計画はうまくいかないだろうと思った。そこで彼の首に紐をかけて絞め殺そうとした。何が起こったかを見ていたイヌは襲撃者にとびかかり、相手を退散させた。イヌは襲撃者の顔に爪をたて、首筋に噛みついたので肉が裂け、襲撃者はのびてしまった。私たちは死にかけていた仲間の首から紐をはずした。私たちは襲撃者を取りおさえ、本人が持っていた紐で彼を縛りあげると当局に引き渡した」

イブラーヒーム・ブン・バルカーンが次のような話を語ってくれた²⁷⁵⁾。「近くに、アルハシーブと呼ばれるイスファハーン出身の男がいた。男は山あいから連れてきたイヌを飼っていた。この男と隣人のあいだにいさかいがあり、殴り合いになった。イヌは飼い主が殴られているのを見ると、相手の男にとびかかり²⁷⁶⁾、首の動脈²⁷⁷⁾に爪をたてた。そして首の後ろを噛んだ。相手の男は気が遠くなり、地面には血がほとばしった」

イヌを批判する人たちのなかには、このように言う者もある²⁷⁸⁾。「人びとは夜に寝る。いと高きアッラーが休憩の時と定められたからだ²⁷⁹⁾。そして夜が明けると仕事に出かける。偉大なるアッラーが活動²⁸⁰⁾の時と定められたからだ。イヌたちはこの反対のことをしている。この意見に異議を唱えて、イヌが夜に起きて昼は寝ているのは王侯の特徴だと言いたてた者もある。これがさかさまであれば、王侯は率先してそのようにするだろう。イヌが夜に起きているのは、盗賊がうろつく時間だからだ。壁をよじ登ったり穴をあけたりしながら盗賊が横行する。盗賊たちは誰かの家に押しいると、殺しに手を染め、邪悪をなし、財産を盗んでいく。イヌたちはこのような出来事に備えており、家主を起こすのだ」

ある文人が語ってくれた詩も同じことをうたっていた。

わが心は失われた。どこで見つければよいのだろう。もろびとよ、再び幸福を手にするのは難しい。友人の裏切りのせいで幸福は遠ざかった。私は膝を屈したのに、彼は戦いを決意した。彼は心のなかに偽善を隠し、憎悪を包みこんでいるのに、外見は私への愛を示すのだ。ある日のこと、私は彼のおこないに

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

苦しんで言った。「おまえはイヌだ！」彼は答えた。「冗談で言っているのか？悪口なのか？」私は言った。「悪口のほうだ！」彼は言い返した。「そのことは悪口ではない。主人を守るのはイヌの天性だ。闇の時間には近隣を守る。イヌは近隣のすべてを見守り、夜じゅう両の眼をあけて起きている。空腹で身をかがめながらも、人びとが安らかに眠っているあいだ、イヌは夜を過ごしながらいびとが危険なめにあわぬよう心を配る。まるで愛する人のことを思うように。砂漠でイヌは頼りになる。火が消えたときにあわて騒ぐ人に寄り添う。恐れる人はイヌのような声を出して、鳴き返すイヌの声を聞き、声がする方向へと闇のなかを手探りで進む。これほどすばらしいイヌをどうして貶めるのか？教えてほしい。イヌのような人をけなすことはできないし、イヌだと言われるのは悪口ではない」

メディナから来た人が次のような詩を教えてくれた。この詩は彼のイヌであるムーク²⁸¹⁾の強さをうたったものだ。

おお、ムークよ、みじめな暮らしをするなよ！泥水を飲むなよ！彼の整った頭は粉ひきのよう。彼の爪は腹を引き裂く。彼の沈黙は怒りを示し、彼の吠え声は猛烈だ。空腹²⁸²⁾なときでさえ、おびき寄せられたりはしない。噛むことこそ彼の意図することであり、彼の攻撃は死そのもの。彼の縄張りを犯す悪者は無事ではすまない²⁸³⁾。彼の動きは剣や槍よりも素早い²⁸⁴⁾。矢や投げ槍さえも彼の威力には及ばない。心すべき凶悪なトルコ人とダイラム人²⁸⁵⁾、さらにザンジュの民²⁸⁶⁾、くわえてビザンツの将軍たち—これらの敵も彼の縄張りに入れば散り散りになるだろう。英雄たちの軍団が彼のそばを通れば、彼らの雌ラクダは恐れて膝を屈するだろう。

私は友人の一人に、この件について何か知っているかと尋ねた。彼は知っているかと答え、次の詩を語ってくれた。

アフマド²⁸⁷⁾が私に語った。アフマドは男盛りだった。彼に匹敵する者はいなかった。彼は見目麗しく、人柄も良く、博識ですべてにおいて雄弁だっ

た。彼には華があり、どの集まりでも目をひいた。飲み物に興じるとき、彼は庭を飾る花ともなった。誰かの心が悲しみに沈むとき、アフマド・アルマルズバーンが慰めてくれた。「友よ、イヌについては心に刻んでいることがある」。私は言った。「イヌをけなすようなことか？」彼は答えた。「いや違う。イヌの名誉となることだ」。彼は続けた。「わが兄弟よ、よく聞きなさい。そして聞いたことを皆にも知らしめてほしい。それほどに機知に富む話なのだ。イヌを褒めることと、とある人たちを批判することだ」。そして彼自身が目にした話をしてくれ、やがてわが目にも確かなこととなった。彼は言った。「私は、自分が知っている友人の多くよりもイヌは信頼できることに気づいた。不在の折にも信用できるし、常と変わらぬ顔で迎えてくれる。いっぽう、二つの顔を持つ人びともいる。わずかばかりの報酬に感謝し、恩を忘れることはない。だが、多くを与えられながら恩知らずな友人もいる。イヌはあなたの大切な家族を守り、夜には寝ずの番をする。藪のなかで会ったものに対してはライオンのごとく、巣穴のなかの二頭の仔を守る。イヌはどのような好意にも感謝し、情け深い者に見られればつつましく目を伏せる。忍耐強く、役に立ち、常に献身的で親しみ深く、イヌは侵入者を撃退し、恩を着せなくとも守ってくれる。友人には優しく包む外套となり、敵には鋭い槍となる。あなたやその家族を別にすると、人間とは生まれつき、オオカミでもありウシでもある」

犯すべからざる信頼を友人に台無しにされた人びとの話もある²⁸⁸⁾。いっぽう、イヌは助けとなった。それらの話のひとつは、アムル・ブン・シャンマルから聞いた次のようなものだ。アルハーリス・ブン・サアサアには飲み仲間たちがいていつも一緒に過ごしていた。彼は飲み仲間たちをたいそう愛していた。彼らの一人が、彼の妻に手をだし、彼女に伝言を送った。アルハーリスはイヌを飼っており、自分で世話をしていた。彼は飲み仲間たちとともに別荘に出かけたが²⁸⁹⁾、件の男は後に残った。アルハーリスが家から遠い場所まで行くと、件の男は彼の妻に近づいて家に滞在し、飲み食いをした。二人が酔って一緒に寝ていると、イヌは男が女の腹の上にいる²⁹⁰⁾のを見た。そこでイヌは二人にとびかかり、両人を殺してしまった。帰宅したアルハーリスは二人を見て、何が起こったかを察した。彼は飲み仲間たちにこの一件を話し、次のような詩を作った。

彼はいつも私に忠実で、私を守った。彼は友人が私を裏切ったとき、私の妻を守った。なんと、あの友人はわが名誉を台無しにしてしまった。驚くなかれ、あのイヌは私を守ってくれたのだ。

彼は飲み仲間たちと別れ、イヌを飲み仲間であり友人として過ごすようになった。彼はアラブの民の間で伝説となり、次のような詩も作られている。

イヌは不実な友人よりもよいものだ。彼は私が留守の間にわが妻を誘惑した。私は生きている限り、イヌを飲み友達としよう。そしてイヌにわが愛情と心からの友情をささげよう。

イブン・ダーブ²⁹¹⁾もこのような話を語った²⁹²⁾。アルハサン・ブン・マーリク・アルガナウィーには友人や飲み仲間たちがいた。彼らの一人が彼の信頼を台無しにした²⁹³⁾。彼は家の扉のところでイヌを飼い、自分で世話をしていた。ある日、一人の男がアルハサンの家を訪ね、妻のもとに行った。彼女が言った²⁹⁴⁾。「夫は遠くに行ってしまいました。ここにとどまりますか？ そうすれば一緒に楽しめます」。彼は答えた。「そうしましょう」。こうして二人は飲み食いし、彼は彼女にいどみかかった。男が彼女の上に乗ると、イヌがとびかかり、二人を殺した。帰宅したアルハサンは、二人のようすを見た。二人がやろうとしていたことは一目瞭然だった。彼は次のような詩を作った。

友人に心からの友情を示したのに裏切りにあい、恥の家に打ち倒された。兄弟のような顔をしながら、わが妻を誘惑して私を裏切った。だが私のイヌが墓場へと連れて行って、懇ろに寝かせてやった。

アルアスマイーはこのような話も語った²⁹⁵⁾。マーリク・ブン・アルワリードには何人かの友人がいた。彼らはいつも一緒に過ごし、何をするのも一緒だった。彼らの一人が彼の妻に伝言を送り、彼女は色よい返事をした。ある晩、彼はやって来ると、マーリクの部屋の一つにその妻と一緒に隠れた。だが、マーリクは何も気づいていなかった。男が女に手を出すと、マーリクのイヌの頭が彼らにと

びかかり、二人を殺した。マーリクは酔っていたので何もわからなかったが、しらふになると、彼らのそばに立って次のような詩を作った。

あなたの友人はあなたを裏切るが、イヌはあなたの守護者だ。彼が生きている限り、たとえ裁きの日まで生きていようとも。あなたの財産もあなたの妻もあなたが彼に心からの友情をささげるならば、イヌは守るだろう。

別の詩人はこう言った。

もしイヌにこう言ったとしよう。「畜生め！ 失せろ！」あなたは私を非難の目で見ろ。まるで私があるあなたに同じことを言うかのように。だが、あなたはイヌの足元にも及ばない。

同じ話はサアサア・ブン・ハーリドについても語られている。彼には無二の友がいた。だがある日のこと、サアサアは、友人が彼の妻と同じ寝台で死んでいるのを見つけた。二人は彼を裏切ったのだ。彼は次のような詩を作った。

裏切りは有象無象の本性。だがイヌはいつも忠実。悪徳の士を避け、イヌを大事にせよ。そうすれば裏切りからも欺瞞からも逃れられるだろう。

友人の一人が言った²⁹⁶。「ある晩、私は酔ったまま外出した。所用があつてとある庭に入った。私は自分で世話をしている二頭のイヌを連れており、杖を持っていた。だが私は眠ってしまった。突然、イヌたちが吠えたりうなったりしたのでその騒音で私は目が覚めた。何も困ったことは見つからなかったの、私はイヌたちをぶって追い払った。私はまた眠ってしまった。するとイヌたちがまた騒ぎ出し、吠えたりして私を起こした。今度も不都合なことは何も見つからなかった。そこで私は立ち上がるとイヌたちを追い払った。だが気づいたら、イヌたちが私の上に乗って前足と後ろ足で私を揺さぶっているではないか。何かおそろしいことが起こったさいに、誰かが寝入った人を起こそうとしているときのようなだった。私が飛び起きると、そこには黒蛇がいて私に近づいていた。私は蛇に襲

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

いかかって殺し、家に戻った。アッラーを別にすれば、この二頭のイヌは私の救い主だ」

預言者（アッラーの祝福と平安がありますように！）の妻であったマイムーナ²⁹⁷についてこういう話がある²⁹⁸。彼女はミスマール²⁹⁹という名のイヌを飼っていた。彼女が巡礼に出たとき、イヌを連れていった。そのため、ミスマールが番をする彼女の荷物に近づく者は誰もいなかった³⁰⁰。戻ってきた彼女はミスマールをジャディーラ部族にのもに残し、養うための金を支払った。ミスマールが死んだとき、そのことを知らされた彼女はこう言って泣いた。「ミスマールという名のわが子を失ったように心が痛みます」³⁰¹

アブー・ムハンマド・アブドゥッラフマーン・ブン・アブドゥッラーが語ってくれた話である。彼はヤフヤー・ブン・アイユーブからその話を聞き、彼もまたユーニス・ブン・ザイド³⁰²から、アブー・ラーフィウの語った話として聞いたとそうだ。「アッフフリーという人がメスの猟犬を飼っていたが、仔犬が欲しくて立派な種オスをずっと探していた³⁰³。そんなある日、一人の男が人びとと一緒に飲んでいると、そのなかの一人が彼の妻を見ていた。そこで彼は言った」

さあ、楽しく食べよう！ だが楽しく飲むな！ やめておけ、恥知らずめ！友人の妻と二人きりであるときに、色目を使うような飲み友達などいらない！³⁰⁴

この本を書き終えるにあたり、もうひとつ話がある³⁰⁵。私の友人が語ってくれた。彼の友人の妻が亡くなり、幼い息子が残された。彼は自ら世話をしているイヌを飼っていた。ある日のこと、彼は息子とイヌを家に残して所用³⁰⁶で出かけた。しばらくして戻ってくると、イヌが玄関先におり、その顔も鼻先³⁰⁷も血まみれになっていた。彼はイヌが息子を殺して食べてしまったのだと思った。彼は家に入るより先にイヌに襲いかかると殺してしまった。それから彼は家に入り、ゆりかごで息子が寝ているのを見た。そのそばには木の幹ほどもある³⁰⁸毒蛇がばらばらになっていた。イヌがその毒蛇を殺し、喰いちぎったのだ。彼はイヌを

殺してしまったことを激しく後悔し、手厚く弔った。

アッラーはすべてのことをよく知っておられる。本書の最後を締めるにあたって、わたしたちの望みもかくのごときである。はじめから終わりまで表も裏もなくすべてのことは、アッラーをほむべきかな。われらが主人たるムハンマドさまに、そしてゆかりの者たちすべてにアッラーの祝福と平安がありますように³⁰⁹⁾。

謝 辞

本稿は、科学研究費助成事業による基盤研究 (B)「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」(課題番号: JP16KT0098, 代表・西尾哲夫)ならびに人間文化研究機構・ネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」事業の研究成果の一部である。

イブン・アルマルズバーンの本の翻訳を思いついてほぼ二年が経ってしまった。スミスの校訂版をもとに作業をすすめればと安易に思っていたが、多くの点で不備がある校訂本であることがわかり、研究者として最良のものをという強迫観念からどうしても直接に写本にあたらざるをえなくなった。そのおかげでスミスの校訂版が利用できなかったいくつかの古い写本を新たに参考とすることができた。デジタル・ヒューマニティーズという言葉が喧しいように多くの写本は所蔵先の図書館でデジタル化されており、比較的簡単に入手できたが、これまで見逃されていたものもあった。エル大学図書館には特にここで謝辞を記しておきたい。世界がコロナ禍にあるなかで積極的に世界の研究者の便宜を図る方針には感銘した。また膨大なアラブ古典文献を渉猟するにしても図書館をこれまでのように利用できないなかで、やはりデジタル化された古典文献アーカイブなりその検索プラットフォームの存在は極めて有用であった。あらためてそのようなデータベースを構築している人たちに感謝の意を表したい。その意味で本稿は、フィールド調査に出かけられない状況だからこそできた仕事である。イブン・アルマルズバーンの執筆動機は推察するよりないが、おそらく彼もまた犬好きだったのだろう。最後に、ちょうど二年前に亡くなった愛犬ジッポとの出会いと、いっしょに暮らした15年と10か月の歳月、そして別れを経験することがなければこの仕事はなかった。彼に感謝しつつその思い出とともに筆をおくことにする。

注

- 1) 各物語の内容については、『ガラン版千一夜物語』(西尾哲夫訳, 全6巻, 東京: 岩波書店, 2019~2020年)を参照。なお、以下で参照するアラビア語の書名については、日本語による定訳があるものはそれを採用しアラビア語名を付記, それ以外のものについてはアラビア語名を記し必要に応じて日本語訳を付記する。
- 2) 『ガラン版千一夜物語』に入っている「愛の奴隷, アブー・アイユブの息子ガーニムの話」については、訳者のアントワヌ・ガランがどの写本を底本としたかわからなかったが、パリの国立図書館が所蔵するアラビア語写本 (Arabe 3893) であると推定される。ガラン

- が〈主（あるじ）のものは奴隷にはご法度〉と訳した箴言的表現は、同写本のアラビア語原文では、「……神よ、忌まわしき悪魔からお救いください。神よ、ライオンの場所に犬が座ることがないようにしてください。主人のものはすべて奴隷には禁じられしもの」となっており、主人的存在のライオンと奴隷的存在のイヌが対比されている。
- 3) イスラーム世界のイヌに関する基本情報については、Abou El Fadl, Fudge, Omidsalar, Viréらによる各事典項目ならびに Subasi (2011) を参照。
 - 4) 現代的視点からイスラーム世界の動物観を分析した著作は少ないが、Foltz (2006) のなかのイヌに対するムスリムの態度を分析した第7章を参照。またイスラーム初期から中世における動物学に関わるアラビア語資料の網羅的な文献学的研究として、Eisenstein (1984) ならびに Eisenstein (1990) が基本的情報を与えてくれる。
 - 5) イヌを狩猟に使っていたことを示す最古の証拠が、およそ八千年前に書かれたアラビア半島の岩絵に残っており、その姿は現在のアラビア半島の地域犬と非常に似ているとのことである（藪田 2019: 26-27）。
 - 6) マルズバーン (Marzubān) という言葉はペルシア語に由来し、もとは国境などの辺境地帯を監督する役人を意味している。イブン・アルマルズバーン自身はそのような役職にあったわけではないが、彼の出自はイラン系であったのかもしれない。ただし、アッバース朝期を含めて初期のイスラーム王朝期にはイラン系の人間が官僚や学者として活躍したのも事実であるが、行政用語などもペルシア語を転用する機会が多く、マルズバーンという名前だけでは必ずしも彼自身がイラン系であったとも言えない。イブン・アルマルズバーンの生涯については、Smith and Abdel Haleem (1978: xii-xii) ならびに *EF*² の “Muḥammad b. Khalaf” (G. Troupeau) を参照。
 - 7) イブン・アルマルズバーンの『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』を初めて校訂出版したルイス・シェイホは、イブン・ハッリカーンの有名な『伝記事典』ならびに同書の記述に拠ったハーッジ・ハリーフアの文献事典『カシュフ・アズズーン』を引用しながら、イブン・マルズバーンの正式名がアブー・バクル・アリー・ブン・アフマド・ブン・アルマルズバーンでシャーフィイー派の法学者であるとし、彼の没年をヒジュラ暦 366 年／西暦 977 年としている (Cheikho 1909: 516)。しかしながら、イブン・ハッリカーンならびにそれに拠ったハーッジ・ハリーフアの記述が、シャーフィイー派法学者のアブー・アルハサン・アリー・ブン・アフマド・アルバグダーディー (ヒジュラ暦 366 年／西暦 977 年没) と、ここで対象としているアブー・バクル・ムハンマド・ブン・ハラフを混同しているための誤りであると思われる。
 - 8) ヤークートの『地理事典』によると (Yāqūt 1866-1873: vol. 4, 432-433; Yāqūt 2011: vol. 5, 79)、バグダードから 1 ファルサフの距離にある村である。
 - 9) イブン・アルマルズバーンの『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』を校訂ならびに英語訳をおこなったスミスとハリームによれば、当時のバグダードにはムハウワル村へ通じるムハウワル門が市の西側にあり、ニスバがこの街区に関わるもので、イブン・マルズバーンがその近くの街区に住んでいたとする立場と (Smith and Haleem 1978: xii; *EF*² “Muḥammad b. Khalaf” (G. Troupeau)), あくまでムハウワル村出身であるとする立場に分かれる (al-Shinnārī n.d.: 49)。
 - 10) 『アルフィフリスト』では、アブドッラー・ムハンマド・ブン・ハラフ・ブン・アルマルズバーン (‘Abd Allāh Muḥammad ibn Khalaf ibn al-Marzubān) となっている。
 - 11) ただしこのなかに、『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』は入っていない。
 - 12) *Dhamm al-thuqalā*’ (不愉快な者たちへの非難) と *al-Muntakhab min kitāb al-hadāyā* (贈り物の書からの抜粋) の二冊の本と、アルキフティー (アリー・ブン・ユースフ・ブン・アルキフティー、生没年ヒジュラ暦 568 ~ 646 年／西暦 1172 ~ 1146 年) の *al-Muḥammadūn min al-shu‘arā*’ (詩人たちの中のムハンマド [という名前を持つ者] たち) のなかで、イブン・アルマルズバーン作の詩が引用されている (Qiftī 1970: 301-303, 項目番号 267)。その詩は、ムハンマド・ブン・アルアッバース・ブン・アルハッパーズ (イブン・アルマルズバーンの『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』の冒頭で言及されている人物) の祖父にイブン・アルマルズバーンが書いてくれたものであって、アルハッパーズから伝えられてきたものとされる。
 - 13) アラビア語の書名については、ファドル (fadl) 「長所、美点」とタフディール (tafḍīl)

「(～を) 優れているとする(見做す)こと」という、前者は名詞、後者は動名詞による表現のどちらをとるかで二つに分かれる。実際に、ハーッジ・ハリーフアの文献事典『カシュフ・アズズヌーン』では両方の書名が別々の箇所而言及されている。おおまかな傾向としては後代になるほど後者の動名詞を使った表現が好まれるようである。イブン・アルマルズバーンの同書をよく引用しているダミーリーの『動物の生活誌』においては前者の表現になっていることや(al-Damīrī 2005: vol. 3, 591)、ベルリン写本を除いてほとんどの写本で前者の表現になっていることを考えると、ファドル(faḍl)を使った書名の方が本来のものであった可能性が高いであろう。ただし、後で検討するようにシェイホの校訂版がもし一番古い写本によるものとするれば、彼の校訂版のみでfaḍā'il (faḍlの複数形)が使われていることに留意すべきかもしれない。

- 14) 以下の写本情報は、 Brockelmann 2016-2018 [1868 ~ 1956年に刊行されたドイツ語版の英語訳補訂版]: vol. 1, 113; suppl. vol. 1, 186) とスミス(Smith and Abdel Haleem 1978: xix-xxv)による書誌情報をもとに新たな写本情報を加えている。
- 15) スミスの校訂版からの情報による(Smith and Abdel Haleem 1978: xxv)。同書においても間接情報に基づいているために、実見によるこの写本の所蔵確認はいまだされていない。アズハル大学図書館には膨大な量の写本が所蔵されているが、クルアーンやハディース関連のカタログは出版されているものの、それ以外の写本については書誌情報の確認が困難である。
- 16) ベルリン写本あるいはパリ写本と比較した場合、どちらかと言うと、後者の方に単語の変更や誤記などの特異点において似ているかもしれない。また推察の域を出ないが、①のもう一つのアズハル写本を近代になって書写複製をおこなったものという可能性もある。
- 17) スミスの校訂版で伝聞情報として載せられているが、エジプト国立図書館(Dār al-Kutub al-Miṣriyya)のカタログでは確認できない(Smith and Abdel Haleem 1978: xxv)。
- 18) スミスの校訂版に記載された伝聞情報では、現代マグリブ書体で書かれており、最近になってからの書写と思われるが、③の写本の場合と同様にエジプト国立図書館(Dār al-Kutub al-Miṣriyya)のカタログでは確認できない(Smith and Abdel Haleem 1978: xxv)。
- 19) ペテルスブルグ国立大学図書館のカタログ情報では、1885年の日付になっているが、当該写本の表紙のメモには1883年となっている。
- 20) 細かいことではあるが、アラビア語文の文献学的書字上の慣例として、人名によく出てくる「イブン(ibn)」は、その前に別の名前の単語が来る場合には「ブン(bn)」と書かなければならないが、行が替わって文頭に来る場合にはその場合でも「イブン(ibn)」もとの表記に戻して書かなければならない。ランドバーク写本ではその慣例にしたがっているが、ペテルスブルグ写本ではその慣例を知らなかったためだろうか、元の底本写本の文頭の「イブン(ibn)」が行の真ん中に来る場合にもそのまま書写している。
- 21) スミスの校訂版にも言及がないし、世界じゅうのどの図書館にも蔵書情報が確認できないものの、アズハル大学図書館の目録には、1900年にアブドゥッラフマーン・ハサン・マフムードによる校訂本の書誌情報が掲載されている。ただし、「見本印刷」と記してあることから未出版の原稿の状態にあるものと推定される。
<http://www.egyptlib.net.eg/Site/OPAC/Availability.aspx?ID=2314825&ResID=3> (2021年10月1日閲覧)
- 22) シェイホはベルリン写本の存在も蔵書目録によって確認しているが、タイトルの相違に言及するのみで利用していない。底本にした写本はその後、所有者の神父がイラクの国立博物館に寄贈したところまで確認できたが、近年のイラク戦争時に起こった略奪等による混乱のためあって所蔵が確認できない。
- 23) スミスの校訂版が依拠した⑦のカイロ写本、さらには⑥のランドバーク写本や⑨のペテルスブルグ写本が拠った底本と同系の写本であった可能性が高い。
- 24) 19世紀以降、アラブ世界でも古典の再発見とテキストの校訂出版が盛んになる。理由のひとつには、ヨーロッパにおける研究からの刺激と印刷出版技術の導入とそれに伴う読者層の興隆がある。さらには伝統墨守によるウラマー層の学問硬直状態への危機意識があった。近代以降の古典の校訂出版に伴う知的環境の変容についてはエル・シャムシーの研究に詳しいが(El Shamsy 2020)、ここでの議論を校訂作業というテクニカルな面に限ると、19世紀から20世紀にかけての古典テキスト校訂作業は、「校正(タスリーフ)」的なものから「校訂(タフキーク)的なものへと変化したという。近代以降のテキスト作成は、本

- 文を写字してその周辺等に語釈や文意補注、関連文献からの引用、さらには写本作成時期の状況に関する情報の補足などを「説明（タフシール）」していくことであり、その際に本文の単語等が訂正されることもある。「校正（タスリーフ）」とは特に外形的な後者の訂正作業を指し、現在の出版作業における校正作業に相当する。いくつかの異本を比較して本文テキストを編集していく近代的な意味での文献学的校訂作業にあたるのが、「校訂（タフキーク）」である。①と②の校訂本はどちらかというところ「校正（タスリーフ）」的なものである。特に後者については、アラビア語で「その刊行の世話をした（者）イブラーヒーム・ユースフ」と表紙に書かれており、現代的な意味での校訂テキストではないと言える。
- 25) また後で見ると、スミスの校訂版ではそれ以外にも作為的な修正が加えられており、アラビア語本文と英語訳が必ずしも対応しておらず、前者にはこれまでの本文伝承に従って逸話の順番をそのままにしてあるが、英語訳ではいくつかの逸話の順番をいかなる説明もないままに大幅に入れ替えており、原著者の意図が損なわれている。アラビア語文献に通暁しない他の専門家に資料を提供するという本来の役割を考えると不適切な翻訳作業と言わざるを得ない。
 - 26) 異同がある多くの場合、校訂本①のものを採用しているが理由は明記されていない。
 - 27) ジャーヒズの『動物の書』やタヌーヒーの『座談の粹』に類話が見られるが、シャバールーの校訂本では、不用意に元の類話からの言葉に差し替えたり、ひどい場合にはまったく新しい逸話を引用したりしている。
 - 28) ただし校訂本②の間違いと同一箇所が散見される。
 - 29) 校訂本③の刊行の後でいくつかの校訂本がアラブ世界で出版されたが（参考文献の校訂本リストを参照）、基本的に本文テキストについては写本を参照せずに、多くは校訂本③（まれに校訂本②）を踏襲あるいは加筆修正している。語釈や本文解釈において参考になる意見が述べられている場合もあるので、本稿の訳文作成において利用した場合のみ引用箇所をあげることにする。ちなみにデジタル化されたテキストがウェブ上でいくつか確認できるが、基本的に校訂本②に拠っている。
 - 30) ハイユーヤ（ハイヤワイヒの誤記）の言として、原著者のイブン・アルマルズバーンから許認可とともに聞き書きした手稿が失われた旨のことが追記してある。注の39）を参照。
 - 31) 写本中には補足情報として「[ヒジュラ暦] 543年にイジャーザ（許認可）とともに（アルマーリキーが）私（＝アルハラニー）に伝えた」とある。
 - 32) 「アビー」の直前にこの祖先の人物が法官であったことを示す単語が入っている。
 - 33) スミスの校訂版では、アルジャワーニー（al-jawānī）と読んでいるが、明らかに誤読である（Smith and Abdel Haleem 1978: xxii）。
 - 34) ハイユータ（ḥayyūta）とも読める。
 - 35) 「アルカーミル」の直前にこの祖先の人物が法官であったことを示す単語が入っている。
 - 36) ベルリン写本について記した注の30）31）はこのアズハル写本にも当てはまる。
 - 37) アズハル写本と同じく、「アルカーミル」の直前にこの祖先の人物が法官であったことを示す単語が入っている。
 - 38) ベルリン写本について記した注の30）31）はアズハル写本と同様に、このパリ写本にも当てはまる。
 - 39) 人物Bの名前は、アブー・ウマル・ムハンマド・ブン・アルアッパース・ブン・ハイヤワイヒ（ḥayyawayhi）となっている。また、人物Cのタヌーヒーに関して他のどの印刷校訂本や写本にはない表現として、「（読み聞かせておしえてくれ）そして彼はそれを書き留めた」とある。これが事実だとすれば、伝世している写本群はイブン・アルマルズバーン本人が書いた本を伝えているというよりも、そして原著者による手稿が存在したことを否定するものではないが、最終的にはそれをタヌーヒーが書き留めたものに起源があると言えるかもしれない。そうすると別の問題が生じてくる。イブン・アルマルズバーンのこの書のなかには、後で見るとタヌーヒーの『座談の粹』からの引用あるいはその類話と思われる逸話が多く含まれており、どちらが大元かという疑問が残る。現代の校訂者がよくするように、タヌーヒーが自分の知っている逸話を挿入した可能性も否定できないし、むしろ逆に『座談の粹』の方がイブン・アルマルズバーンから借用したのかもしれないし、あるいは両者ともに別のかたちで人口に膾炙している逸話を各々が採録したのかもしれない。その意味では、タヌーヒーの『座談の粹』に拠って、イブン・アルマルズバーンの本文を修正するのはリスクがあるかもしれない。

- 40) それぞれの名前の由来や語源については、注の 191) を参照。
- 41) 参考のためにジャーヒズの『動物の書』で挙がっている名前を、ハールーンの校訂に従って記しておく (al-Jāhiz 1965-1969: vol. 1, 313)。
 カルブ・ブン・ラビーア (kalb b. rabī'a, ①に相当。別の写本ではアクラブ ('aklab) となっているとの補注)、
 キラーブ・ブン・ラビーア (kilāb b. rabī'a, ③に相当)、
 ムカーリブ・ブン・ラビーア (mukālib b. rabī'a, ⑤に相当。ただしブン・ニザール (b. nizār) が欠落)、
 ムカッラバ・バヌー・ラビーア [・ブン・ニザール] (mukallaba banū rabī'a [b. nizār], ②に相当。ただしブン・ニザール (b. nizār) が欠落している場合と付いている場合の両方の異本がある。またムカッラブではなくムカッラバと女性の名前になっている点、さらに ibn (bn) 「～の息子の」という表現ではなく、banū という「一族、部族」を指す表現をとっている点がイブン・アルマルズバーンのものと大きく異なる)。
- 42) この点でパリ写本はベイルート版と同じであり、もしベイルート版が最も古い本文伝承による写本を底本にしていたとしたら、パリ写本についてもその伝承を残していると言えるかもしれない。
- 43) ペテルスブルグ写本の場合は単なる誤写の可能性が高い。
- 44) 通常のアラビア語の単語では、ダブウ (ḍab') あるいはその個体を示すダブア (ḍab'a) で、ここでは小さいものやかわいいもの、親しいものを指す縮小形が用いられている。ちなみにアラビア語の名詞語尾につけられる /a(-t)/ は女性形語尾であるが、動物や昆虫に付けられた場合には二通りの意味を持っている。ひとつは文字通りメスを指す場合である。カルブ (kalb) に対してカルバ (kalba) は雌イヌとなる。もうひとつの場合は、その動物や昆虫の一個の個体を指す場合である。ハエを意味するズバーブ (ḍhubāb) とズバーバ (ḍhubāba) の場合は、前者は集合的に種としてのハエを意味し、後者は個々のハエを指して使われる。例えば、ハエが三匹飛んでいるという表現なら後者であり、ハエもゴキブリもノミも嫌いだなどという表現の場合は前者を使うことになる。女性形語尾を付けた場合にどちらの意味をもったものとして機能するかは、当該の生物と人間との距離感に左右される (西尾 2006: 33)。
- 45) 異本では、カルブ (kalb) ともある。
- 46) このあとさらに、ジャーヒズは「バヌー・カルバ (banū kalba, 無理に訳すと雌イヌ部族?)」という部族名を挙げている。
- 47) マーリク学派の著名な法学者。北アフリカ出身でバグダードに学び、ヒジュラ暦 446 年にエジプトで没す。
- 48) 著名な法学者で文学者。ヒジュラ暦 827 年／西暦 938 年 (あるいはヒジュラ暦 829 年／西暦 940 年) にバスラの法官 (カーディー) の家系に生まれ、ヒジュラ暦 382 年／西暦 994 年にバグダードで没した。父親の跡を継いで法官として活躍したが、政争に巻き込まれて財産没収や投獄の憂き目にあうなど波乱に富んだ人生を送った。晩年はバグダードで語り部として暮らしたと伝わる。彼が聞き書きした逸話集である『悲しみの後の喜び』と『座談の粹』(日本語訳は、森本公誠訳『イスラム帝国夜話』, 2017 年, 岩波書店。タヌーヒーの生涯と著作については、下巻の訳者解説に詳しい) は、そのなかの逸話が後年にアラビアンナイト (千一夜物語) に取り入れられたということにもまして、当時の一般の人びとの暮らしぶりを伝える社会史的資料としても貴重である。
- 49) 生没年はヒジュラ暦 295 ～ 382 年／西暦 907 ～ 992 年 (Ziriklī 2002: vol. 6, 182)。アブー・ウマル・ブン・ハイヤワイヒ・アルハッザーズ・アルバグダーディーあるいは単にイブン・ハイヤワイヒとして知られる。有名なハディース伝承者で、イスナード (伝承経路) における彼の信頼度は高いとされる。ハッザーズ (khazzāz) (α 系統のランドバーク写本とペテルスブルグ写本ではハッラーズ (kharrāz) = 靴直し職人) は、絹商人を意味する職業名詞で屋号の名前であるが、祖先から受け継いだものか、実際にイブン・ハイヤワイヒが従事していたかは不明。ちなみに写本間でこの部分の異同が大きく、ハイヤワイヒ→ハイユヤー／ハイユバ、ハッザーズ→ハッラーズ、ハザール、ハラニー等と誤写されている。
- 50) 西暦 991 年 9 月 23 日に対応。イブン・アルマルズバーン没後 70 年となる。
- 51) 各写本ならびに印刷校訂版ごとの伝承経路の詳細な比較は、本稿の第 4 章を参照。本訳

では α 系統のランドバーク写本ならびにスミスの校訂版に従って訳しておく。なおスミスの英語訳では伝承経路にタヌーヒーの名前は登場せず、このイブン・ハイヤワイヒから始まる。

- 52) スミスの校訂版の英語訳に従うと「彼やいあわせた人びとに」となるが、ほとんどのテキストは「わたしに～わたしたちに」と伝承経路にかかる標準的な動詞表現である。なおスミスの校訂版はユースフ版におおむね従ったためか、ベイルート版では採用された伝承属性の正統を示すための「イジャーザ（許認可）」という単語を省略している。意味を汲んで訳すと、「イブン・アルマルズバーンはわたしたち（イブン・ハイヤワイヒ）に以下のことを、正確な本文を伝えるものであると承認しつつ語り伝えた」ということになる。ただし後期の写本（パリ、ベルリン、アズハル等）では、「私は、この本を最初から最後まで、アブー・バクル・ムハンマド・ハラフ・ブン・アルマルズバーンから、書きとりながら聞いた。それから（私の書きとった本が）失われたので、別の写本を手に入れたが、それを私がアブー・バクルのもとで朗読しなかったし、（他の者によって）彼のもとで朗読されたこともない。だが、【私への】イジャーザなしでそれを私が語るものでもない」とある。ここから推察されることは、イブン・ハイヤワイヒにイブン・アルマルズバーンが語って書き伝えられた写本には、直接的にイジャーザを得た写本と間接的にそれを得た写本の二系統がすくなくとも存在してきたということであろう。詳しくは本論文の第4章での分析を参照。
- 53) スミスの校訂版の英語訳にはアラビア語原文にはない小見出しが、読者の便宜を考慮して付いている。本訳でもそれにならって【 】で示しておく。
- 54) 話し合い相手の友人に対して、イブン・アルマルズバーンが呼びかけの時によく使うフレーズ。スミスの校訂版の写本や各版の照合にかかる注には、ベイルート版には「アッラー」の単語の後に神を称える言葉の <ta'ālā> が加えられているとするがこれは間違いで、ベルリン写本である。
- 55) ベイルート版、ランドバーク写本、ペテルスブルグ写本にはこの一文がない。シャバーラー版のみがこれに従っている。
- 56) シンナーリーの校訂版は、引用された言説に対してハディース学の方法論を援用しながら伝承経路（イスナード）について検証しており、この点で同版は有益な情報を含む。それによると、ここでのギファアリー言説にかかる伝承経路の確実さは大変弱く（*da'if jiddan*）、彼からアブー・アッダルダダーへの経路も弱く（*da'if*）、次のアブー・ムスリム・アルハウラーニーへの経路は良い（*hasan*）である。以下ではシンナーリーによるこの種の情報については割愛する。ちなみにこの部分はアラビア語では完了形を使った *qad ruwiya* が正しいが、ユースフ版、ランドバーク写本、ペテルスブルグ写本では *qad yurwā* と未完形が使われている。その他のいくつかの点でこれら三つは類似点があり、後者の二つが底本にした写本は前者と同系の写本の一つの可能性が高い。
- 57) ヒジュラ暦 32 年／西暦 652 年没。キナーナ部族系のギファール部族出身。本名はジュンダブ・ブン・ジュナーダ・ブン・スフヤーン・ブン・ウバイドで、クンヤがアブー・ザッル。預言者ムハンマドの教友。その清貧な生活と信仰心、貧者への厚情から、イスラームにおける社会主義の理想を体現する者とみなされることもある（Ziriklī 2002: vol. 2, 140-141）。
- 58) ベルリン写本では、「増大」という意味の *tazayyud*（ランドバーク写本とペテルスブルグ写本では同じ意味の *tazyīd*）の代わりに「偽造」という意味の *tazayyuf* というアラビア語が使われており、「ありもしない言い訳～」と訳せる。
- 59) ユースフ版ならびにランドバーク写本とペテルスブルグ写本では、前半の文について後半の文と同じ動詞が使われており、「心から謝っていると信じられる～」と訳せる。なおベルリン写本には後半の文しか本文にはなくて、前半の文は欄外に（後代に？）補筆されている。
- 60) ラビード・ブン・ラビーア。ヒジュラ暦 41 年／西暦 661 年没（*EAL* 460-461）。初期イスラーム時代を代表する詩人のひとり、有名な『ムアッラカート詩集』に彼のカスイーダ（長詩）が収められている。彼と動物をめぐる美しいエピソードが伝わるが、イヌに関するいくつかの詩が伝わっている。
- 61) ヒジュラ暦 285 または 286 年／西暦 898 または 899 年没（*EAL* 536）。本名はアブー・アルアッパース・ムハンマド・ブン・ヤジード・アルムバッラド。バスラ文法学派を代表す

る学者で、主著は古典文法書の『アルムクタダブ（簡明）』だが、知識人の心得る教養を修めるいわゆるアダブ書の『アルカーミル（完全）』は、イブン・ハルドゥーンが四大古典アダブ書の一つに選んだほど後代に影響を与えた。

- 62) シンナーリーの注釈によると (al-Sinnāri 2006?: 113), ビシユル・アルハーフィー (al-hāfi) として知られる人物。生没年は、ヒジュラ暦 150 ~ 227 / 西暦 767 ~ 841 (Zirikli 2002: vol. 2, 54)。この世の華美を避けて履物もはかず忍ぶように歩く様から、アルハーフィー（隠れし者）という綽名（ラカブ）で呼ばれるほど清貧な暮らしぶりですつと知られる。
- 63) アラビア語では mu'wir 「つけこまれる（ところを持った人やあやうい場所）」という通常の辞書にはない単語を使っている。パリ写本では ma'mūr 「人が住んでいる」と誤写しており意味をなさない。
- 64) ジャーヒズの『動物の書』(al-Jāhiz 1965-1969: vol. 1, 319) およびイブン・アブド・アルバツル（ヒジュラ暦 463 年 / 西暦 1079 年没）の *Bahjat al-majālis wa-'uns al-mujālis* (Ibn 'Abd al-Barr 1982: vol. 1, 800) で同じ詩文の前半部が引用されており（ただし両方の本ともに、「喜びながら」と訳した単語の *surrū* が *hashshū* 「機嫌よく、好意を持って」となっている）、彼らによれば同詩はアルハーリス・ブン・アルワリードという人物の作とされる。
- 65) スミスの校訂版はベルリン版にある *ghummū* 「悲嘆する、当惑する」の単語を採用しているが、各版での異同が大きく、ユースフ版では 'abasū 「眉をひそめる、顔をしかめる」、ペイルート版、ランドバーグ写本、ペテルスブルグ写本では *sabbū* 「ののしる」、パリ写本とアズハル写本では *nattū* 「(湯が) 沸く [怒りで顔を真っ赤にする?]」となっている。ちなみにスミスの校訂版では最後のものを誤読して *natū?* と注記している。
- 66) ナスナース (*nasnās*) あるいはニスナース (*nisnās*) とも呼ばれる架空の生き物。手足が一本ずつしかなく、森の奥深くに棲んでいる。語形成上は「人間たち、人びと」を意味する *nās* あるいは 'unās の同音(節) 反復によって形成された単語であろう。アラビア語にはこの種の造語は生産性がないが、南アジア地域の言語にはよく見られ基本的には縮小辞的な機能をもっている。現代アラビア語の特にエジプト方言などではナスナースが「猿」を意味する場合もあり、スミスの校訂版の英語訳ではその訳語を当てている。ちなみにペテルスブルグ写本のみが *al-tisnās* と誤写している。
- 67) スミスの校訂版はベルリン版にある *huqqiqū* 「確かめられる」を採用している。ユースフ版では *khubirū* 「試される」、ペイルート版とランドバーグ写本では *huṣṣilū* 「突き止められる」、その他では *huṣilū* 「(悪いことが) ふりかかる」となっている。この単語を含むこの詩の一部が、ハディース伝承者として有名なアブー・ヌアイム・アルファドル・ブン・ドゥカイン（ヒジュラ暦 219 / 西暦 834 年没）作の詩にもあり、そこでは *futtishū* 「検査される」となっている。
- 68) イブン・ヒッバーン・アルプスティー（ヒジュラ暦 354 年 / 西暦 965 年没）の *Rawḍat al-'uqalā'* (Ibn Hibbān al-Bustī 2009: 368) によれば、アルカフザミー (*al-qahzamī*) というバスラ出身の詩人（ヒジュラ暦 222 年没?）とされる。
- 69) アラビア語のミルフ「塩」は、古代アラブ人が水と塩で互いに誓約の証としたように信愛の象徴であった（西尾 2021b）。
- 70) 「よき人たち」と訳したアラビア語のミラーフは塩（ミルフ）からの派生語で、「(塩を分かち合うほどの) 立派な (人)、(いっしょに食事ができるほどの) 親しき (人)」を意味する。
- 71) スミスの校訂版はユースフ版と同じくベルリン写本、アズハル写本、ランドバーグ写本、ペテルスブルグ写本にある *al-'asmajūna* 「もっとも醜悪な者たち」を採用している。ペイルート版とパリ写本は *al-'asmahūna* 「もっとも心寛き者たち」となっており、誤写と思われる。ちなみに上記の注のイブン・ヒッバーン・アルプスティーの書にあるアルカフザミーの詩では、スミスの校訂版と同じになっている。
- 72) この一節は各版あるいは各写本で大きく異なる。スミスの校訂版はペイルート版に倣って上記の訳のようにしている。ユースフ版とアズハル写本は前句を *maridtu* 「わたしが病氣だったとしても」として、後句を *tajahhalū* 「軽くみなしてくれる」と受ける。パリ写本、ランドバーグ写本、ペテルスブルグ写本は前句が同じ *maridtu* で後句でスミスの校訂版等と同じ単語の *taḥammalū* 「我慢する」を使う。ベルリン写本も前句が同じだが後句で *tajammalū* 「親切のふりをする」という単語を使っている。字面において *taḥammalū* / *tajahhalū* / *tajammalū* はよく似ているのでたがいに誤写の可能性が高いが、本来の詩の前句

- がスミスの校訂版等のものをとるべきかユースフ版等のものをとるべきかについては判断が分かれる。後者だと「私の調子が悪くてもだいじょうぶだと言ってくれる」と訳せる。
- 73) パリ写本では、アブー・アブドゥッラー・アッスーシーになっている。
- 74) ペテルスブルグ写本ではこの一文が文中になく、欄外に後から赤字で補筆されている。また、ランドバーク写本では「彼自身が私に次の詩を吟じてくれた」と表現されており、直接聞いたことが強調されている。
- 75) パリ写本のみが *balā*(¹)「試練、災難」という単語を使用している。
- 76) アラビア語では *fa-ka-annahā* (～-¹*annamā*) *khuliqat li-'allā* (=li+¹an+lā) となっており、この構文の理解が足りなかったのか幾つかの版では誤記が目立つ。特にペテルスブルグ写本ではアラビア語として理解不可能な転記となっている。ランドバーク写本でも同様で、この詩句の部分が白紙になっており、欄外に補注として正しい詩句が記されている。
- 77) アラビア語は *dhū al-tharā'* (字義どおりには「富の所有者」) だが、スミスの校訂版は *dhū al-narā'* と誤記されている。
- 78) ベイルート版には最後の一行が抜けており、シャバールー版もそれに倣っている。
- 79) この後ろの半句は難解である。ランドバーク写本とペテルスブルグ写本を除き、スミスの校訂版も含めて全版が *bi-siwā nabāt al-ṣāliḥīna nabāt-an* としており、前句から続けて逐語訳すると「善人たちの産み出したものが実をつけることなく、彼らの住処は彼らの死後に取って代わられた」となる。ペテルスブルグ写本では *bi-siwā thabāb al-ṣāliḥīna thabāt-an* (最後の単語は *tabāt-an* とも読める) となっており、この読みはベイルート版で校訂者のシェイホが補注のなかで推奨した読みでもある。逐語訳すると「善人たちが安楽な場所に座り続けることなく、～」となる。シェイホが底本とした写本にペテルスブルグ写本と同じ語句が実際に記されていたかどうかは、同写本の存在が確認できないので決定的なことは言えないが、同写本とペテルスブルグ写本が他の写本より古い伝承を保っている可能性が高いかもしれない。この点において、ランドバーク写本は *bi-siwā thabāb al-ṣāliḥīna nabāt-an* で両方のあいだのような表現になっている (ただし欄外注で、最後の単語が *tabāt-an* とする)。
- 80) *ṣadiq* 「友人」の代わりにユースフ版、ベイルート版、ランドバーク写本、ペテルスブルグ写本では *ṭariq* 「道」を使っている。ただしベイルート版では校訂者のシェイホは *ṣadiq* と読むべきと補注している。後者の場合は「夜にそぞろ歩く道を恐れる～」と訳せる。
- 81) スミスの校訂版の補注でベルリン写本には最後の一文が欠けていると述べているが、実際には欄外に補筆してある。
- 82) イブン・ハムドゥーン (ヒジュラ暦 562 年 / 西暦 1167 年没) は *al-Tadhkira* の中で、この詩が有名なアラブの詩人ファラズダク作としている (Ibn Ḥamdūn 1996: vol. 7, 296)。ただし前半の二つの詩句のみが実際には挙げられている。一方、サアラブ (ヒジュラ暦 91 年 / 西暦 904 年没) の *Majālis* によると、この詩はアブドゥッラー・ブン・シャビーブ作とされ、ここに挙げた全句が載せられている。ただし二番目の詩句の *dār* 「家」の代わりに *dahr* 「時、時代」という単語が使われている (Tha'lab 1948-1949: 61)。
- 83) ベルリン写本のみが、この前半の二つの詩句において主語を一人称の「私が～」にしている。ただし後半の二つの詩句については他と同じ二人称となっている。
- 84) 正確には「目と目のあいだには」と訳せる。アラブ・イスラーム世界では人の運命が額に書かれていると考えられている。
- 85) ユースフ版とペテルスブルグ写本では *ḥanān* 「慈悲」とある。スミスの校訂版によると底本の一つにしたカイロ写本でも同様の単語を使っている。またランドバーク写本では *jinān* 「庭園、天国」とあるが、文字の類似性から考えて *ḥanān* の誤記と思われる。
- 86) “*lā 'abā la-ka*” の決まり文句を “you must be a fool” とスミスの校訂版の英語訳は逆の意味でとらえて誤訳している。字義どおりには「あなたには父がいない」ということになるが、クルアーンやハディースの難解語を解説した古い辞書によると、この表現は一種の誉め言葉で、父親がいなくても一人で十分に生きていけるようになったことを相手に伝えるために使われるとある。ちなみに類似の表現に “*lā 'umma la-ka*” 「あなたには母親がいない」があるが、こちらは「あなたは捨て子だ」ということを意味する侮蔑表現になる。
- 87) ベイルート版はこの最初の部分が欠けている。
- 88) スミスの校訂版は補注で、この詩が本文のテーマとは何の関係もなく挿入されていると述べているが、浅薄な見解である。俗世における人と人の関係、人と物との関係が先人から自分を經由して後の人に繋がっていることを人びとが自覚しなくなると、この詩人は

嘆いているのであり、前後に来る他の詩文との脈絡から判断しても適所に置かれていると言える。おそらくスミスの校訂版ならびに英語訳は、先の詩文の誤訳による誤った理解とともに、先の詩文が非難や諦念をテーマとしていると捉えてしまったために、著者のイブン・アルマルズバーンが様々な古の詩文を重ねてたみこむように自らの主たるテーマへと、イヌと人間の関係性のなかに一縷の望みを託しながら展開させていく流れを、ここでは十分に把握できていないと言える。

- 89) アッバース朝時代の代表的な詩人 (EAL 47-49)。ヒジュラ暦 232 年／西暦 845 年頃没。宮廷詩人としてカリフのムウタシムの寵愛を受け、彼に捧げた称賛詩を多く残す。彼がジャーヒリーヤ (前イスラーム時代) の詩などから編纂した『ハマーサ (武勇) 詩集』で知られる。なおパリ写本のみ詩人名が記されていない。
- 90) アラビア語は *sināt al-dahr* 「時のまどろみ」だが、ベルリン写本では *siṭār al-dahr* 「時の帳」となっており、後者の方がアッラーマフルムズイー (ヒジュラ暦 360 年／西暦 971 年没) の *'Amthāl al-ḥadīth* に引用されている同詩の表現と一致する (al-Rāmhurmuzī 1983: 143)。スミスの校訂版の底本とされるカイロ写本、さらにランドバーグ写本とペテルスブルグ写本ともに *sinān* 「槍先、研石 (?)」で意味をなさないので誤写と思われるが、このように三つの写本が近い関係にあることを示唆している場合が少なくない。
- 91) 新たな詩風のアブー・タンマームと、その師弟関係にあり伝統的な詩風のプフトゥリーという当代随一を競う二人の詩人の技法を比較した、アーミディー (ヒジュラ暦 371 年／西暦 987 年没) の有名な著作である『両詩人の比較考量の書 (*al-Muwāzana*)』ではこの詩が引用されており、ここでは「人生」と訳した単語の *'ayyām* 「日々」ではなく、*'arzāq* 「糧、収穫」が使われている (al-Maktaba al-Shāmīla のアラブ古典文献デジタル・プラットフォームで検索 → <https://shamela.ws/book/26183/813>, 2021 年 10 月 1 日閲覧)。
- 92) 字義どおりには「この時代はロバである」となる。アーミディーの『両詩人の比較考量の書 (*al-Muwāzana*)』における解釈によれば、前文の詩句は、「目が覚めて覆いが外された者は他の者ともわけへだてなく人間関係を保てるが、今の時代は愚鈍の象徴であるロバのごとく、義信なき者の無明の世となっている」ということを意味している。
- 93) ここで「塵芥」と訳したアラビア語の *ḥalbāja* 「愚鈍な人」はほとんど使われない難解語であり、ベルリン写本では欄外に語釈が記されている。パリ写本では *halyāh* と誤写されたり、ランドバーグ写本とペテルスブルグ写本では欠落していたり (前者ではこの詩句の意味がとれなかったのか、全体が白紙になっており、欄外にとりあえずの読みを記入している)、ユースフ版では *ra'ā'* 「最下層の人びと、ならず者」という単語に差し替えられたりしている。
- 94) この一文の詩句はバイルート版ならびにスミスの校訂版の底本のカイロ写本、ランドバーグ写本、ペテルスブルグ写本には欠けている。ベルリン写本ではこの詩句と最後の一文の詩句の順番が入れ替わっている。ここで「邪悪」と訳したアラビア語の単語 *'athām* は各写本で異同が大きく、パリ写本とアズハル写本では *'ayyām* 「日々」、ベルリン写本では *'ā'ām* 「?」 [誤記] (このベルリン写本についてスミスの校訂版の補注では *'athām* と転記ミス)、スースフ版では *kanā* 「悪口、わいせつな言葉」となっている。
- 95) イブン・アッルーミーとして知られるアッバース朝期の詩人 (EAL 364-365)。正確な本名は、アブー・アルハサン・アリー・ブン・アルアッバース・ブン・ジュライジュ。ヒジュラ暦 283 年／西暦 896 年没。著名なペルシアの詩人のジャラルルーディーン・ルーミーとは別人。
- 96) この訳の最後の二つの文にあたる詩句が、ランドバーグ写本とペテルスブルグ写本から脱落しており、イブン・アビー・ターヒル・アルカーティブの「人びとは欺瞞と狡猾を兼ね備えるようになり、だれもが二枚の舌を持っている」という詩句が最後に挿入されている (ランドバーグ写本では欄外に記入している)。これは *α* 系統のランドバーグ写本とペテルスブルグ写本のみに見られる。なおイブン・アッルーミーの元の詩は本訳の通りの全句を含んでいる。この詩については、『イブン・アッルーミー詩集 (*Dīwān Ibn al-Rūmī*)』 (Ibn al-Rūmī 2002: vol. 3, 382-383) を参照。同詩集中の詩句と本書の詩句を比較すると若干の詩句の違いが見られ、例えば最初の詩句である「馬の手綱を握った」とあるところは、アラビア語で *'awālī al-murrān* とあり、「堅固でしなやかな槍の先を操った」とでも訳せる。
- 97) アブー・ヒッファーン (ハッフアーンと読んでいる場合もまれにある)・アルミフザミー (ヒジュラ暦 255 年／西暦 869 年没) を指している可能性がある (EAL 35)。バスラ生まれ

の詩人で、貧しくほとんど体を隠すこともできないような服を恥ずかしげもなく着ていたと、ズィリクリーの『著名人事典 (*al-ʿĀlām*)』は述べている (Ziriklī 2002: vol. 4, 65)。彼は有名な詩人のアブー・ヌワースの弟子で、『アブー・ヌワースの伝記と詩選集』でよく知られている。

- 98) この詩の部分はユースフ版、ランドバーク写本、ペテルスブルグ写本では欠落している。なお、後者の二つの α 系統に属する写本では、この部分から、本訳では【人間の最良の友】と章題をつけた部分よりも前のところまでが欠落している。このことはランドバーク写本とペテルスブルグ写本がおそらく同一の底本に拠ったことの証拠であると同時に、元々は α 系統には欠落相当部分が存在しなかったのかもしれない。ただし、同じくらい古いかもっと古い本文伝承を伝える写本に拠ったバイルト版やユースフ版には当該の欠落部分が書写されているので、ランドバーク写本とペテルスブルグ写本が拠った写本にはたまたま一葉か二葉の物理的な欠損があったのかもしれない。
- 99) アラビア語は *zabad* で、パリ写本が *zand* 「(火打石といっしょに使われる着火用の) 木切れ」であるとスミスの校訂版は補注しているが、パリ写本も前者の単語を使っており、これは誤読である。
- 100) 著者のイブン・アルマルズバーンのことを指す。
- 101) バイルト版のみが、著者のイブン・アルマルズバーンを主語にして「彼は～会った」、「彼は彼に～と言うと」のように三人称の動詞を使って校訂している。おそらく直前の「彼は言った」の主語がイブン・アルマルズバーンであって、その語りの内容がここから新たに始まっていることが理解できなかったためであろう。
- 102) ヒジュラ暦 230 年／西暦 844-845 年生まれ、ヒジュラ暦 278 年／西暦 891 年没 (*EF* “*Ismāʿil b. Bulbul*” (Sourdel, D.)). アッバース朝カリフ、ムウタミド (在位西暦 870～892 年) の時に重用されワジール職に就く。しかし次のカリフ、ムウタディド (在位西暦 892～902 年) によって投獄されて殺害された。多くの詩人がイスマイール・ブン・ブルブルを称賛あるいは非難する詩を作っている。
- 103) ここで再びイブン・アルマルズバーンが話し相手の友人に語りかけている。
- 104) バイルト版では *bayān* 「明白さ、説明」という単語が欠けている。
- 105) アラビア語は *ṣāhib al-khātām* 「封印の所有者」。初期イスラーム時代のウマイヤ朝に設置された、公文書等の封印を担当する官庁であるディーワーン・アルハータム (*dīwān al-khātām*) の役人を指していると考えられる。
- 106) アルマフドゥーム (*al-makhdūm*) が、パリ写本とアズハル写本ではアルマジュズーム (*al-majdhūm*) となっている。
- 107) 「話」と訳したアラビア語の単語 *khābar* (複数形は *ʾakhbār*) は「情報、報告、物語」を意味し、見聞きした実際の出来事についての言説を指す。現代ではもっぱら「ニュース」の意味で使われる。
- 108) ジンの一種で、人間と同じく神によって創造された存在。キリスト教でのサタン (悪魔) に相当する。イスラームの教えでは、人間は土から、ジンは煙の出ない火から創られたとされる。ジンは日本語では魔人や精霊などと訳される。ディズニー映画の「アラジン」に登場するジーニーも同じ。人間と同じように社会を作っており、その頭領はイブリースと呼ばれる。人間にとっては良い存在のものも悪い存在のものもいる。なかにはムスリムのジンもいる。特に害悪をなすものとしては威力の強い順に、マーリド、イフリート、シャイターンなどがいる。
- 109) 文脈からアブドゥッラーのクンヤ名と推定される。
- 110) バイルト版では「あなたが彼を遠ざければ～あなたが彼を嫌いになれば」という表現になっている。
- 111) 預言者ムハンマドがアッラーから啓示された言葉をまとめたものがクルアーン (コーラン) であるが、様々な機会に信者たちから尋ねられてムハンマドがひとりの人間として語った言葉をハディースと呼ぶ。多くのハディース集が編纂されたが、基本的にマトンと呼ばれるハディース本文と、イスナードと呼ばれる当該のハディースを伝承した経路の部分から構成される。ハディース自体の真偽、つまり本当にムハンマドが語ったのかどうかということについては、ハディース本文の内容ではなくイスナードの正しさによって判断される。ここに挙げたハディースは有名なブハーリーのハディース集などのイスラーム法学で正式に参照されるものには該当するハディースが確認されない (Smith and Abdel

- Haleem 1978: 35)。シンナーリーの校訂版では (al-Sinnārī 2006?: 125-131)、二つのハディースのイスナードを詳細に検討しているが、どちらも確証がなく、前者については「正しくない (lā yasihh)」、後者については「否定される (munkar)」と結論付けている。
- 112) スミスの校訂版の英語訳ではこの伝承経路が欠落している。
- 113) クーフアに生まれ、ハディース学を修めたのちメッカに移住し、聖モスクの近くで生涯を送った。シンナーリーの注釈によれば (al-Sinnārī 2006?: 131)、イブン・ヒッバーンの言として「よく修行に励み、つねに信仰心を持ち、深い神への畏れを抱き、多くの悲哀を嘆き、孤独を好んで人を遠ざけ、この世のしがらみを避けるように生きた」とある。
- 114) この言い伝えの初出はバイハキーのハディース集 *Shu'ab al-'imān* だが、ここでは直訳すると「彼の敵に信用されるまでは神を畏れる〔神の〕奴隷になることはない」とあり、主語が rajul 「人、男」から 'abd 「奴隷」になっている (al-Bayhaqī 2003: vol. 10, 426, 項目番号 7743)。
- 115) アルフダイルが続けて言った文章は、スミスの校訂版が底本としたユースフ版で相当部分が欠落しており、前文と合わせて「敵にさえ裏切らないと安心されない限り、そして友人にさえ恐れられない限り、神を畏れる者の仲間とはなれない」と訳せる。なお、ペイルト版を含めて他のパリ写本、ベルリン写本、アズハル写本では欠落がない。また前注で述べたバイハキーの当該箇所では、ここで訳した「続けて彼は言った。「～安心しようか?」」の後半のすべての文が載っていない。
- 116) ここで「不誠実な」と訳したアラビア語の単語 *mādhīq* の原意は「(ミルクなどが水で) 薄められた」という意味だが、語釈が必要な難解語であるためか、スースフ版では *māziq* と間違っただけで校訂されており、パリ写本とベルリン写本では *māriq* と誤写されている。次の注に挙げた、より古い伝承を掲載した書の校訂本では *mādhīq* となっている。ちなみに後者の詩のなかでは、*khalata* 「混ぜる (あわせ持っている)」が同じ意味だが *shāba* という古語になっている。この例は典型だが、特定の詩の語句の伝承は必ずしも盲目的に同じ語句が伝えられているわけではなく、同じ意味だがより通用している単語に置き換えられたり、意味不明のまま別のスペルの単語に置き換えたりされる場合がある。したがって、特定の書物の校訂本なり写本を読む場合、あるいはそれに基づいて新たな校訂本を作ったり翻訳をしたりする場合、校訂者や書写者がその特定の書物内のテキスト部分を元の写本に忠実に写そうとしているだけでなく、特に詩の場合などはその詩を含む全く別に伝えられてきた書物を参照にしていることに留意すべきである。
- 117) 著名な地理学者のアブー・ウバイド・アルバクリー (ヒジュラ暦 487 年/西暦 1094 年没) のことわざ注釈書 *Faṣl al-maqāl fī sharḥ kitāb al-'amthāl* に、この詩とほぼ同じものが載っている (al-Bakrī 1971: 59)。同書の校訂者の注釈によれば、同詩の初出はイブン・クタイバ (ヒジュラ暦 276 年/西暦 889 年没) による初期のアダブ書として最重要な『情報の泉 ('*Uyūn al-'akhbār*)』とされる (Ibn Qutayba 1930: vol. 3, 107)。
- 118) 風刺詩 (ヒジャー) を得意とする詩人 (*EAL* 193)。ヒジュラ暦 246 年/西暦 860 年没。生地はクーフアでバグダードに暮らした。
- 119) 正確なアラビア語は *ibn 'amm* 「父方のおじの息子」。アラブ・イスラーム社会では伝統的に父方のおじが最も近い親族とされ、その息子や娘が慣習的には婚姻関係を結ぶうえでの理想とされている。
- 120) 正確なアラビア語は *ibn zāniya* 「不義の子」。
- 121) アラビア語は *'awlād al-tarīq* で、字義どおりには「道の子どもたち」となる。ドゥジャイリー校訂のディウビル詩集によると (*Khuzā'ī* 1962: 173)、原詩の *'abnā' al-tarīq* (単数形 *ibn al-tarīq*) は同じく「道の子ども (たち)」を意味しており、語釈によると前句の *ibn zāniya* 「不義の子」と同義とある。なお別のアブドゥルカリーム・アルアシュタルによる校訂詩集では、イスファハーニーの『歌の書』に依拠して上述の単語を含めて後半の詩句の単語を変えている (*Khuzā'ī* 1983: 407-408)。日本語にすると、「公にはあなたを喜ばせ、密かにあなたを損なっている」となる。
- 122) ウマイヤ朝期の有名な詩人。ヒジュラ暦 105 年/西暦 723 年没。正式名は、クサイイル・ブン・アブドゥッラフマーン・ブン・アルアスワド・ブン・アーミル・アルフザーイーまたはアルムラーヒーで、クンヤ名はアブー・サフル (*Ziriklī* 2002: vol. 5, 219; *EAL* 458)。イスラーム以前のウズラ部族に関わる恋愛物語に端を発したウズリー恋愛詩を得意とする。彼自身も実生活の中でアッザという名前の人妻に恋をし、そのことを詩材にした

- ことから、クサイイル・アッザ（アッザの〔所有する〕クサイイル）という綽名で呼ばれることになった。またシア派的な考え方を持っていたとも伝わる。なおイフサーン・アッバース編のクサイイル・アッザ詩集にはここで挙げた詩は含まれていない。
- 123) イブン・アビー・ターヒル・タイフル。ヒジュラ暦 280 年／西暦 893 年没。アッバース朝期の歴史家であり文学者で、特にバグダードの初期の歴史についての著作で知られる (Toorawa 2005; *EAL* 306-307)。
- 124) ペテルスブルグ写本では、本書の先に出てきたアリー・ブン・アルアッバース・アッルーミーの詩の最後の一文を、ここの詩の最後の一文に入れ替えて途中の部分削除したままで次の節に入っている。ランドバーグ写本も同様だが、おそらくこの詩句が前の詩句につながらないと判断したためであろうか、本文は空白にしてこの一節を欄外に記入している。ランドバーグ写本とペテルスブルグ写本の底本になったカイロの古写本にもともと欠落部分があったのか、ペテルスブルグ写本の筆写者が誤写あるいは意図的に削除したのかはわからない。ただ次の節になって初めて同書のテーマである「イヌ（犬）」が登場するので、その導入部として同時代の人間観察をしているところは、ランドバーグ写本とペテルスブルグ写本の筆写者には不必要と感じられたのかもしれない。
- 125) アラビア語は *al-'akh al-shaqīq* で、血のつながった兄弟を意味する。
- 126) アラビア語の *ḥarīm* 「禁じられた（者）」は、特に女性の家族である妻や娘たちを指す。
- 127) 「イヌは飼い主が～」の部分は、ジャーヒズの『動物の書』からの引用 (*al-Jāhīz* 1965-1969: vol. 2, 173)。
- 128) ベイルート版、パリ写本、ベルリン写本では、アムルとなっている。下記の注 134) にあるように、ダミーリーの『動物の生活誌』でもアムルとしてイブン・アルマルズバーンから転載されている (*al-Damīrī* 2005: vol. 3, 591-592)。
- 129) 正確には、「バヌー・ズフラ（あるいはズフラ部族）の家畜の群れ」。ユースフ版、ランドバーグ写本、ペテルスブルグ写本では、「アブー・ズフラ」となっている。スミスの校訂版には、「全ての写本ではバニー・アビー・ズフラである」と注釈しているが、これは明らかな誤解である。
- 130) 「群れを守っていたイヌ」と訳した語句はアラビア語で *kalb al-māshīya* とあり、このような役割を持つイヌを指す用語と思われる。ジャーヒズ『動物の書』でも類出する (*al-Jāhīz* 1965-1969: vol. 1, 157, 302, 377; vol. 2, 178, 203)。
- 131) アラビア語では *ḍīm* だが、ダミーリーの『動物の生活誌』の引用箇所では *diya* 「血の代価（親族を殺害されたときに求める代償）」となっている。
- 132) アラビア語では *māl* だが、ベルリン写本のみにある単語である（ちなみにスミスの校訂版では校訂注で、ベイルート版より採用したと記しているが間違い）。
- 133) アラビア語では *ahl* だが、ランドバーグ写本とペテルスブルグ写本では *'aṣl* 「血統」となっている。
- 134) ここに引用された預言者ムハンマドの言葉はどのハディース集にも確認できない。なおここでのエピソード自体はイブン・アルマルズバーンからの転載として同じものがダミーリーの『動物の生活誌』に載っている (*al-Damīrī* 2005: vol. 3, 591-592)。ただし、ダミーリーの同書には「同胞たる～」以下の預言者の言葉は載っていない。
- 135) 第二代正統カリフ。生没年は西暦 592 ～ 664 年。
- 136) アブドゥッラー・ブン・ウマル・ブン・アルハッターブ（ヒジュラ暦 73 年／西暦 692 年没〔下記の *EI*¹ および *ODI* では西暦 693 年没〕 (*Ziriklī* 2002: vol. 4, 108; *EI*² “Abd Allāh b. 'Umar b. al-Khaṭṭāb” (Vaglieri, V); *ODI* 2)。教友の一人で、父親とともにメッカからメディナへの聖遷を経験する。北アフリカへの遠征に二度参加したこともあり、最後はメッカで亡くなった。
- 137) 預言者ムハンマドの同時代人で、タミーム部族出身 (*Ziriklī* 2002: vol. 1, 276; *EI*² “al-Ahnaḥ b. Ḳays” (Pellat, Ch.))。特にカリフ・ウマルの時の征服活動における名将として知られる。ヒジュラ暦 72 年／西暦 690 年没。
- 138) ユースフ版、ランドバーグ写本、ペテルスブルグ写本では、「彼からの愛情を（信用しなさい）」となっている。
- 139) アラビア語では *baṣbaṣa* 「（犬などが）尾を振る、機嫌をとる」から派生した表現がとられている。
- 140) 本名はアーミル・ブン・シャラーヒール・ブン・アブド・ズィー・キバル・アッシャ

- アビー・アルヒムヤリーで、クンヤ名がアブー・アムル。ヒジュラ暦 19 年／西暦 640 年にクーファに生まれる (Zirikli 2002: vol. 3, 251; *El*² "al-Sha'bi" (Juynboll, G. H. A.)). 法学者で詩人として有名。ヒジュラ暦 103 年／西暦 721 年没。
- 141) ベルリン写本では、このアッシャアビーの言葉の部分が本文から欠落しており、欄外に補筆されている。
- 142) 本名はアブドゥッラー・ブン・アルアッバース・ブン・アブドゥルムッターブ・ブン・ハーシムで、クンヤ名がアブー・アルアッバース。ヒジュラ暦 3 年／西暦 619 年にメッカに生まれる (Zirikli 2002: vol. 4, 95-96; *El*² "Abd Allāh b. al-'Abbās" (Vaglieri, V.)). 預言者ムハンマドの教友の一人で、彼を介する多くの信頼に足るハディースがある。ヒジュラ暦 68 年／西暦 687 年没。
- 143) このムハンマドがパリ写本とアズハル写本では欠落している。スミスの校訂版は誤読しており、パリ写本はマフムードとなっているとするが間違いである。
- 144) パリ写本、ベルリン写本、アズハル写本ではムハンマドと誤写されている。
- 145) タービウ (複数形はタービウーン) と呼ばれ、預言者ムハンマドの教友 (サハーバ) の後継世代の一人で、ハディースの伝承経路 (イスナード) においては信頼がおける人物とされる。生没年は不明。
- 146) スミスの校訂版の英語訳では、ジャアファル・ブン・スライマーンに至るまでの伝承経路 (イスナード) を省略している。スミスの校訂版は本書の冒頭の部分でも同様の方針をとっているが、アラブ世界の古典文学の本文にかかる翻訳による情報提供から見ると、本文批判的に信頼に足る資料としての価値が損なわれており、文献学的に適切な作業とは言えない。
- 147) イブン・サアドの『伝記 (タバカート) 集成』によれば (Ibn Sa'd 2001: vol. 9, 289, 項目番号 4138), 本名はジャアファル・ブン・スライマーン・アッドバイーで、クンヤ名はアブー・スライマーン。ハリーシュ部族のマウラー (解放奴隷) の出で、後にシア派の信徒になった。ヒジュラ暦 178 年に亡くなった。
- 148) 本書の最初に登場した人物で、イブン・アルマルズバーンが直接に語った相手。なおユースフ版ではこのハイヤワイヒがハイラ (khayra) と誤写されている。ベルリン写本ではハブラ (habra), ランドバーグ写本とベテルスブルグ写本ではハブラ (khabra) となっている。ちなみにスミスの校訂版の補注ではベルリン写本もハイラ (khayra) とするが間違い。バイルート版、パリ写本、アズハル写本がここでは正確に伝えている。
- 149) ズィリクリーの人名辞典によれば、本名はアブドゥッラー・ブン・ムハンマド・ブン・アブドゥルアジーズで、アブー・アルカーシム・アルバガウィーとして知られる (Zirikli 2002: vol. 4, 119)。ヒジュラ暦 213 年／西暦 828 年にバグダードに生まれ、ヒジュラ暦 317 年／西暦 929 年に同地で没する。イラクにおけるハディース伝承者の一人。
- 150) スミスの校訂版の英語訳ではこの伝承経路は省略されている。
- 151) ハンマードの父親のイスハーク・ブン・イブラーヒーム・アルマウシリー (西暦 768 ~ 850 年) は、《地上の楽園》と称えられた彼の父親のイブラーヒーム・アルマウシリー (西暦 743 ~ 806 年) とともに中世アラブ・イスラーム古典音楽の巨匠の二人とされる。イブラーヒームによって音楽は詩と同様に宮廷の儀式の一部となり、高貴な芸術の域に達した。息子のイスハークは《歌手たちの海》とも呼ばれ、黄金時代のアラブ古典音楽を体現する人物であり、その名声は父を凌駕した。マウシリー派の音楽については、シモン・ジャルジー (2019: 43-56) を参照。
- 152) つまりイスハーク・ブン・イブラーヒーム・アルマウシリーのことを指す (上記の注を参照)。パリ写本、ベルリン写本、アズハル写本ではこの文言が欠落しており、ハンマードが語った話となっている。ちなみにダミーリーの『動物の生活誌』にも類似の話が取り上げられているが、そこではハンマードの父親ではなく、ムハンマド・ブン・ハルブという人物が最初に語ったことになっている (al-Damīrī 2005: vol. 3, 673-674)。
- 153) アルファドル・ブン・ヤフヤー・アルバルマキー (西暦 766 ~ 808 年) は、父親のヤフヤー、弟のジャアファルとともにアッバース朝時代に権勢を誇った有名なバルマク家一族のメンバー。特に弟のジャアファルはカリフのハルーン・アッラシードの大宰相になり、逸話も多くアラビアンナイトにも登場する。バルマク家はハルーン・アッラシードの逆鱗に触れたために一族全員が処刑あるいは投獄された。アルファドルは父親のヤフヤーとともに獄死したと伝わる。

- 154) この逸話は、タヌーヒーの『座談の粹』（第7巻、127話）（日本語訳は、森本公誠訳『イスラム帝国夜話』、岩波書店。ただし日本語版ではこの逸話は割愛されている。）にも載っている（al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 7, 218）。日本語訳の解説によると、タヌーヒーの原典は元から11巻あったが、最初の3巻目までと8巻目しか伝世しておらず、日本語訳も拠ったシャルジーによる校訂本では、第4巻目から第7巻目までについては後世の著述家による引用部分から復元してものである。イブン・アルマルズバーンの『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』についても、シャルジーによる校訂本では同様の位置づけになっており、タヌーヒーの『座談の粹』と共通する逸話が本来どちらに先に掲載されていたのかどうかは判断できないとも言えるだろう。森本公誠訳『イスラム帝国夜話』にある「殺人事件を飼い犬が暴く」（第1巻、180話）という逸話（タヌーヒー 2016: 上巻、263-264; al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 1, 340-341）は、タヌーヒーの本来の原典にあったものと判断できるが、イブン・アルマルズバーンの書には載っていない。一方で、第6巻162話はシャルジーが、アッサッラージュ（ヒジュラ暦500年/西暦1106年没）（EAL 693）による *Maṣāri' al-'ushshāq*（愛しあう者たちの闘いの場）に載っている「黒人たちの愛」と題する逸話（al-Sarrāj n.d.: vol. 2, 36）から復元したものである。イブン・アルマルズバーンの書の冒頭にあるものと同じような、タヌーヒーからハッザーズを経てイブン・アルマルズバーンへと繋がる伝承経路が記載されており、本来はイブン・アルマルズバーンの書に収録されていてもおかしくない逸話であるが、実際には収録されていない（al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 6, 109）。アッサッラージュの当該の逸話では、黒人女性を愛した男性がそのために黒いイヌまで好きになってしまうほどだとする内容で、色との連想でイヌが比喩的に登場する。ちなみにシャバーラーの校訂版では、この逸話と先の「殺人事件を飼い犬が暴く」という逸話をともに採用して編集している。
- 155) 本名はシャリーク・ブン・アブドゥッラー・ブン・アルハリス・アンナハイー・アルクーフイーで、アブー・アブドゥッラーあるいはシャリーク・アンナハイーの名で知られる（Zirikli 2002: vol. 3, 163）。ヒジュラ暦95年/西暦713年にブハラに生まれ、ヒジュラ暦177年/西暦794年にクーフアで没する。法学者でクーフアの法官（カーディー）に任命され、正義に厚い判決をすることで評判となる。
- 156) 本名はスライマーン・ブン・ミフラーン・アルアサディーで、アブー・ムハンマドとしても知られる（Zirikli 2002: vol. 3, 135）。アルアアマシュ（弱視の人）は彼のラカブ（綽名）である。ヒジュラ暦61年/西暦681年にライに生まれ、ヒジュラ暦148年/西暦765年にクーフアで没する。クルアーンならびにハディースに精通した学者。
- 157) この逸話に入る直前にアラビア語文では、「彼は言った（qāla）」という一語が入っている。スミスの校訂版の英語訳では無視して訳しておらず、シャバーラーの校訂版では補注で、伝承経路のなかのタヌーヒーから聞いた話としてアルカービシーが言ったと解釈しているが、これは誤りである。この書の冒頭で伝承経路を記して「彼（＝イブン・アルマルズバーン）が言った」として本文が始まっているのを、ここでは繰り返しているのとすべきである。直前の逸話が第三者からイブン・アルマルズバーンが聞いたことを書き留めているのに対して、ここでは彼自身の情報として語っている。この種の誰が言ったのかすぐには判明しない「彼は言った（qāla）」が特に初期の古典文献ではよく登場するが、本文が口承から書承へと移行していく過渡期を示しているもので、本文解釈には影響しないことではあるが、情報源がどこにあるかを示している一語を本当は疎かにすべきでない。
- 158) アッバース朝期に三代にわたって宰相などを輩出したバルマク家（注の153）を参照）の初代当主。次に登場するヤフヤーは彼の息子でハールーン・アッラシードの教育係となり、その後は宰相に任じられた。
- 159) バルマク家の祖先はイランのホラサーン地方バルフの出身で、代々ゾロアスター教（古くは拝火教とも呼ばれた）を信奉していたと伝わる。ただし最近の研究では、バルマク家は古くは仏教徒であり、後にはゾロアスター教徒でもあったというのは、バルマク家の権勢に対する揶揄から出た後代の捏造とする意見もある。ともかくここでの詩はバルマク家の出自に関わる当時の世間での評判が背景にある。ちなみにゾロアスター教におけるイヌの扱いについては、Moazami (2006), Folz (2010) を参照。
- 160) バリ写本の第9葉表では詩のこの行までしかなく、第9葉裏の下から2行目へと飛んでいる。第9葉表の4行目からの文は第12葉表の下から5行目に続く。バリ写本の書写の元になった写本が同様の間違いをしていたのか、バリ写本の筆者による誤写なのかは判然

- としない。
- 161) ベイルート版とベルリン写本ではアルマウバディー、パリ写本ではアルムイーリー、アズハル写本ではアルムギーリー(?)となっている。
- 162) スミスの校訂版のアラビア語校訂本文では、家 (manzil)、道具~家具 ('āla)、使用人 (khadam)、家具~食糧 (mutā') とあるが、英語訳ではそれに従ってここに日本語訳したように、「家と妻と使用人と家具」となっている。各版ならびに各写本間で「使用人 (khadam)」にあたる単語にゆれがあり、ユースフ版、パリ写本、アズハル写本では「妻 (haram)」, ベイルート版では「(古い) 家具 (khurshī)」, ランドバーグ写本、ペテルスブルグ写本ならびにスミスの校訂版が依拠したカイロ写本では「(広い) 土地~外套 (kharqī ~ khirqī) (誤写?)」となっている。前文の内容から判断すると、アブー・サマーアの誓いにも関わらず仲間の友人はそうではないと思ったわけだから、家財と妻を失ったアブー・サマーアに必要なのは「新しい家と家具と妻と食糧」となり、ベルリン写本だけに確認される「使用人 (khadam)」をアラビア語本文に採用したことには十分な根拠がないと言える。
- 163) パリ写本のみ、「宰相 (wazīr)」ではなく「長官 ('amīr)」となっている。
- 164) ベイルート版、ペテルスブルグ写本、ベルリン写本、パリ写本、アズハル写本では、「私が妬まれ (私への妬み)、私に向けたうそ」となっている。ランドバーグ写本のみが最初の単語を hirtu 「私は困惑した」(誤記?) としている。
- 165) ユースフ版、ベルリン写本、パリ写本、アズハル写本では、「親戚 (qarāba)」ではなく「妻たち (qarā'in, パリ写本は qarāyin)」となっている。またペテルスブルグ写本では、誤写と思われる wāthiba (飛び跳ねる女?) という単語が使われている (ちなみにランドバーグ写本では欄外に補注としてこの詩句の一文を記して、wāthiya と転記している)。
- 166) ユースフ版、ランドバーグ写本、ペテルスブルグ写本ならびにスミスの校訂版が依拠したカイロ写本では、この文が過去の否定文となっている。
- 167) 第二代正統カリフで、生没年は西暦 592 ~ 644 年。
- 168) 厳密にこの文を訳せば、「信徒は彼の怒りを鎮めることはないだろう」となる。シンナーリーの注釈によれば、これと同じウマルの文言はないがこれによく似たウマルの言葉として、「アッラーを怖がる者は彼の怒りを鎮めることはなかった。またアッラーを畏れる者は彼が望むことをすることはなかった。もし審判の日がなかったならば、あなたたちが見ているものとは違っていただろう。」という文言が伝わっている (al-Sinnārī 2006?: 150)。
- 169) 正式名は、アブー・アイユブ・スライマーン・ブン・アビー・ジャアフアル・アルマンズール・アブドゥッラー・ブン・ムハンマド・アルアッバシー (Zirikli 2002: vol. 3, 122)。メッカに生まれる (生没年不明)。ダマスカスとバスラ (ヒジュラ暦 248 年に任命) の総督を務め、道義に厚いことで知られた。
- 170) アッバース朝の有名なカリフのハルーン・アッラシード (西暦 766 [一説に 763] ~ 809 年) のこと。
- 171) ベイルート版では、「今やブタしかいない」となっている。
- 172) 中世スペイン・アンダルシアの文人であり歴史家のマッカリー (ヒジュラ暦 1041 / 西暦 1632 年没) の有名な『ナフフ・アッティーブ (芳香)』には、アブー・アブドゥッラー・アルジャバリー・アッタビーブ・アルクルトゥビーが言った言葉として、ここと同じ詩と、もうひとつ前半は同じだが後半が異なる詩があり、「それ [そのイヌ] から別れるな、まことに人間 [と呼べる者] たちはもう亡くなってしまった」と続く (al-Maqqarī 1988: vol. 4, 118)。
- 173) おそらく著名な文法学者のムバッラド。注の 61) を参照。
- 174) アラビア語では、kalb al-nās で文字通りには「人びとの (中の) イヌ」。
- 175) アラビア語では、kalb al-kilāb で文字通りには「イヌたちの (中の) イヌ」。
- 176) ランドバーグ写本とペテルスブルグ写本では、最後の文が「あなたはカラスのごとく貶められる」とある。スミスの校訂版の校訂注によれば、同版の底本となったカイロ写本でも「カラス (ghurāb)」という単語が使われているとあるので、ランドバーグ写本やペテルスブルグ写本と同様の表現なのかもしれない。なおこの詩と類似のものが、アルカーリー (ヒジュラ暦 356 年 / 西暦 967 年没) の文選『アルアマーリー (口述)』に載っており、それによると「彼にはアブー・バクルが伝え、また彼にはアブドゥッラフマーンが伝え、また彼には彼の父方のおじが伝え、その彼が言うには、彼の父方のおじがあるベドウィンがその詩を吟じるのを聞いた」とされる。最初の詩句の一文は同じだが、上記の日本語訳の

第二と第三の文がなく、最後の二つの詩文が「なぜならイヌは友人を害さない。たとえこの友人が苦しみのなかにあるとしても」とあり、そのあとでまったく異なる二連二行の詩文が続く (al-Qāfi 2001: 375)。イブン・アルマルズバーンのこの本で引かれているイヌに関する情報のなかには、特に詩の形で伝承されたものの場合、その伝承経路を他の文献に依拠しながら辿っていくとベドウィン (アラブ遊牧民) の言説に至ることが多々あり、そのような文献学的分析によって生業形態との関連のなかでイヌに関する民族誌的情報を分類できるだろう。

- 177) アッバース朝時代の代表的な文法学者 (EAL 110)。ヒジュラ暦 122 年/西暦 740 年にバスマラに生まれ、カリフのハールーン・アッラシードの息子で将来のカリフとなるアミーンとマムーンとの教育係となる。ベドウィンの言葉遣いや文化語彙への関心にもとづき、動物関連の語彙集などを残す。また前イスラーム時代 (ジャーヒリーヤ時代) のアラブ詩を編纂した『アスマイーヤート』は貴重である。ヒジュラ暦 213 年/西暦 828 年頃没。
- 178) 前出のイブン・アビー・ターヒル・アルカーティブと同一人物。注の 123) を参照。
- 179) イブン・ハルマ・アルクラシーとも呼ばれ、ウマイヤ朝からアッバース朝に生きた詩人。ヒジュラ暦 90 年/西暦 709 年にメディナに生まれ、ヒジュラ暦 176 年/西暦 792 年頃没。「純粋な (ファシーフ) アラビア語による最後の古典詩人と見なされた。イブン・アビー・ターヒルが著した『イブン・ハルマの伝記と詩選集』は現存しておらず、イブン・ハルマ作の詩も散逸してしまってほとんど伝世していない。
- 180) ユースフ版には主語のアルアスマイーにあたる語が書かれていないが、バイルート版、ベルリン写本、アズハル写本、ランドバーク写本、ペテルスブルグ写本では主語が明示されており、この逸話の引用元であるジャーヒズの『動物の書』(次の注を参照) も同様のなので、アルアスマイーの言葉と見なしてもよいだろう。
- 181) ジャーヒズの『動物の書』にも同じ逸話がある (al-Jāhīz 1965-1969: vol. 1, 312)。スミスの校訂版は引用箇所を間違っている。
- 182) 以下の言葉はアブー・ヌワースの詩からの部分引用である。関連する詩については、『アブー・ヌワース詩集』(‘Abū Nuwās 1953: 628-629) を参照。なお、スミスの校訂版の校訂注は引用箇所を間違っているので要注意 (英語訳の補注の 28 ならびにアラビア語文の校訂注 26 頁用の 4 [本文の 67 頁])。ジャーヒズの『動物の書』(al-Jāhīz 1965-1969: vol. 2, 36-39) も同様の詩を引用しているが、詩集とは言葉遣いが異なっている。
- 183) 猟犬 (tardī) をテーマにした詩の一つなので訳として補った。
- 184) アラビア語は mufaddayāt で、ジャーヒズの『動物の書』の校訂注によれば、「その [=イヌ] の主人がそれ (のために) 身代金を払って解放するもの」とあり、お金の糸目をつけられないほど価値があるという意味ととれる。『アブー・ヌワース詩集』では munaddayāt になっており、書写の段階での間違いとされる。なお、ベルリン写本では mughdayāt, パリ写本では muqaddayāt, ペテルスブルグ写本では mu‘addayāt となっており (ランドバーク写本ではこの詩の部分が明瞭でなかったのだろうか、空欄にして欄外に詩句が記入されており、ペテルスブルグ写本と同じく mu‘addayāt となっている)、これらも同様に誤写であろう。
- 185) アラビア語では muḥammayāt 「庇護された (もの)」の意味だが、ベルリン写本のみが mukallabāt 「訓練された (もの=猟犬など)」となっている。
- 186) ほぼ同じ詩が『アブー・ヌワース詩集』(‘Abū Nuwās 1953: 624) にある。またジャーヒズの『動物の書』(al-Jāhīz 1965-1969: vol. 2, 35-36), ダミーリーの『動物の生活誌』(al-Damīrī 2005: vol. 3, 591-592) でも引用されている。
- 187) アラビア語では ghurra で、通常は馬などの額の白い斑点を指すが、顔全体が白い場合にも使われる。
- 188) アラビア語では zand で、ヒトの場合は前腕を指す。
- 189) 『アブー・ヌワース詩集』に掲載の詩では、「顎が後ろに伸びていること (引き締まっていること?)」となっている。
- 190) この最後の詩の一文の前に、『アブー・ヌワース詩集』では「イヌはガゼルの鬨いで杯を飲み干し、軽やかな走りで二十頭も狩る」という一文が入る。ただしジャーヒズの『動物の書』ではこの一文の後半の詩句が省略されている。このアブー・ヌワースの詩の場合が典型であるが、各写本 (やそれに基づく校訂本) の間に見られる異同は、多くの場合は筆写者による誤写や誤読、さらには難解語の読み替えなど当該写本間の書写に帰することが

できるが、それに加えて考慮すべき場合として、対象となる詩の文章を当該写本の伝承ではなく、例えばアブー・ヌワースの詩であれば彼の詩集のどれかの写本や版を参照して修正・加筆していることが少なくない。例えば、ここで「イヌが何も着ていなければ」と訳した文に対応するアラビア語の単語は 'arā であるが, ghadā (ペイルート版, ユースフ版, ベルリン写本, パリ写本, ランドバーグ写本, ベテルスブルグ写本), 'adā (アズハル写本) となっており, それぞれのアラビア文字が相互に比較的類似しているための誤読・誤写とも考えられるし, 当該のアブー・ヌワースの詩の写本間にある異同もこれと類似していることから, 本来の詩からの転記とも考えられる。シンナーリーの校訂版では, 「彼の良きことはすべて彼のイヌとともにある」の次に「彼の分け前はすべて彼のイヌから得たものである」という一文が挿入されているが, イブン・アルマルズバーンのこの書のどの写本にも確認できず, またよく参照されるアブー・ヌワース詩集のどの版にも相当する詩句が確認されない(シンナーリーの校訂版の最大の欠陥として, 参考文献について同定可能な情報を記していないことである)。この種の校訂作業は過剰な本文確定作業であり, イブン・アルマルズバーンの本書の理解のためには不適切と言わざるを得ないが, 同種の本文伝承が伝世する写本間にもおこなわれていた可能性も否定できないのも事実である。

- 191) これらの人名はジャーヒズ『動物の書』からの引用である(アラビア語のイヌという単語と関わりのある人名や部族名については, al-Jāhīz 1965-1969: vol. 1, 313; vol. 2, 184-185 を参照)。以下の名前の一部として, アクラブ ('aklab → よりイヌのような [比較形]), ムカッラブ (mukallab → イヌのようにされた [動詞派生形第Ⅱ形の受動分詞]), キラーブ (kilāb → イヌたち [複数形]), クライブ (kulayb → 子イヌ [縮小形]), ムカーリブ (mukālib → イヌのように接している [動詞派生形第Ⅲ形の能動分詞]) が含まれているが, これらの単語には, アラビア語でイヌを表すカルブ (kalb) と同じ三つの子音 (k と l と b) から派生した単語である。イブン・アルマルズバーンはこれらの名前を事例として引いているが, ジャーヒズの情報によると, これらの名前を持った人物はバヌー・カルバ (banū kalba, バヌーは「子どもたち」を意味し転じて「部族」, カルバはカルブの女性形で「雌イヌ」) の系統に属する者たちである。伝によると, ラビーア・ブン・ニザールには 15 人の子どもがいて, そのうち男子が 8 人でその中の 4 人が肉食獣 (sab') の名前 (アサド = ライオン, ダブア = ハイエナ, ズィーブ = オオカミやジャッカルに関わる単語) をつけられ, 残りの 4 人がイヌに関わる名前を付けられたとある。
- 192) ペイルート版のみがアクラブでなくカルブとなっている。ただし引用元であるジャーヒズの『動物の書』でもカルブとなっている(異本ではアクラブも確認)。
- 193) 本名はキラーブ・ブン・ラビーア・ブン・アーミル・ブン・サアサアで, カイス・アイラーン部族出身のジャーヒリーヤ期の人物。生没年不明。一族はメディナ近郊に住んでいたが, 一部はシリアに移住した (Ziriklī 2002: vol. 5, 229)。
- 194) 本名はクライブ・ブン・ヤルブーウ・ブン・ハンザラで, タミーム部族出身のジャーヒリーヤ期の人物。生没年不明。彼の子孫に有名な詩人のジャリール (ヒジュラ暦 111 年 / 西暦 729 年没) がいる (Ziriklī 2002: vol. 5, 232)。
- 195) 人名例と順番については各版と各写本に異同が大きいので, 本訳ではスミスの校訂版にしたがっておく。ただしスミスの校訂版は言うなればすべての版に登場する人名を漏らさず列挙した校訂版と見なせる。詳細は本稿の第 4 章での分析を参照。
- 196) ユースフ版ならびにベテルスブルグ写本では, 「家のなかで」という文言が入っている(ランドバーグ写本では欄外に補注で記入)。
- 197) この逸話の次に, スミスの校訂版の英語訳では預言者の妻マイムーナの逸話を挿入しているが, アラビア語本文伝承ではすべての版においてかなり後の方に挿入されており, スミスの校訂版のアラビア語校訂本文でも英語訳とは異なり通常版と同じようになっているので, ここではアラビア語本文伝承に従う。
- 198) アラビア語では, sibā' (単数形は sab') という単語を使っている。
- 199) パリ写本では, 「もしそうなら, イヌは砂漠や荒地を去ることもなく, 人や集会や家に慣れなかっただろう」という短い一文になっている。
- 200) この文より以下の内容は, ジャーヒズの『動物の書』と類似している (al-Jāhīz 1965-1969: vol. 2, 161)。
- 201) アラビア語は yaṣūnu-(hu) 「(彼 = イヌを) 守る, 囲う」となっているが, ベルリン写本だけは yaḍribu-hu 「彼 = イヌを」叩く」とあり, 両者がアラビア文字の綴り上で類似して

- いることから見て誤写の可能性が高い。
- 202) ここまでの内容は、ジャーヒズの『動物の書』とほぼ同じである (al-Jāhiz 1965-1969: vol. 1, 196)。
- 203) 正確に訳せば「噛み痕が残される」だが、バイルート版だけでは「穴があげられる」とある。
- 204) アラビア語では、本来は戦争や戦闘を意味する *ḥarb* が使われている。アフサンの『アッバース朝時代の社会生活』によると、闘犬も盛んだったようで闘犬用のイヌは *kilāb al-hirāsh* (文字通りには「闘いのイヌ」と呼ばれていた (Ahsan 1979: 61)。当時、実際の戦争にイヌが使われたか判然としなないということのためか、スミスの校訂版の英語訳では *hunt* という訳語を当てており、本訳でもそれに従った。ちなみに次の「警護」にあたる単語は *hars* となっており、詩の韻律と語呂合わせのために両単語を含む詩句 (*ḥarb-an wa-hars-an*) を詩人が使ったとも考えられる。
- 205) この一文にあたる詩句がランドバーク写本とペテルスブルグ写本では欠落している。
- 206) 初代正統カリフ (在位西暦 623 ~ 634 年)。
- 207) アラビア語では *kilāb al-ḥayy* で、直訳すると「その(遊牧)部族のイヌたち」。この表現が特定の役割をもったイヌを指しているのかどうかは明確でないが、イヌの遠吠えが聞こえる範囲が、そのイヌを飼っている部族の領域と見なされるという記述が民族誌あるいは歴史資料中に確認される (ルトファッター・ガリー／縄田浩志訳 2013: 115)。
- 208) ランドバーク写本とペテルスブルグ写本では、「めったにない」となっている。
- 209) ランドバーク写本とペテルスブルグ写本では (さらにバイルート版では元の二人称の主語が三人称になっているが)、「(あなたが)心をこめて速くからイヌを呼べば、(イヌも)心をこめて身を低くしているのが見える」となっている。これら三つの版がおそらく古い本文伝承を残していると思われる。
- 210) アブー・ウバイダ・マアマル・ブン・アルムサンナー (ヒジュラ暦 110 ~ 209 年／西暦 728 ~ 824/825 年)。イスラーム初期における最も重要な文法学者の一人。伝世する著作は少ないが、馬に関する語彙集やクルアーンの難解語辞書がよく知られる (EAL 49)。
- 211) 以下の逸話と同じものが、ジャーヒズの『動物の書』(al-Jāhiz 1965-1969: vol. 2, 122-123) とタヌーヒーの『座談の粹』(第7巻 129 話) (al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 7, 222-223) にも収められている。
- 212) ユースフ版、パリ写本、アズハル写本では「渴望する」、ベルリン版では「親愛の情を示す」という動詞を使っている。ジャーヒズの『動物の書』の該当詩では、ここに訳したものと同じ動詞を使っており、ここでもバイルート版、ランドバーク写本、ペテルスブルグ写本がより古い本文伝承に拠っているとわかる。
- 213) ローマ字転写すると、*al-jabbāna*。ユースフ版ならびにアズハル写本ではこの綴りになっているが、バイルート版では *al-jabbān*、他のパリ写本、ベルリン写本、ランドバーク写本、ペテルスブルグ写本 (スミスの校訂版が使用したカイロ写本も) では、*al-jannān* となっている。ちなみにジャーヒズの『動物の書』では *al-jabbān* である。ヤークートの『地理辞典』によれば、*jabbāna* の語源は *jabbān* で「砂漠」を意味するとある (Yāqūt 1866-1873: vol. 2, 16; Yāqūt 2011: vol. 2, 116-117)。
- 214) 正確なアラビア語は、「乗るためのラクダの一行」。
- 215) ランドバーク写本とペテルスブルグ写本では、「大きな傷」。
- 216) アラビア語では、*harra* という動詞 (名詞は *harīr*)。
- 217) アラビア語では、*ʿawā* という動詞 (名詞は *uwaʿ*)。
- 218) ランドバーク写本とペテルスブルグ写本では、飼い主の頭が出て来て以降の描写が単純で、「彼には息があり、一命をとりとめた」となっている。ジャーヒズの『動物の書』においても同様に「彼は息を吹き返し、命が戻った」とあることから、上記の二写本が原典に近いと言えるのかもしれない。
- 219) ベルリン写本では、この一文が欠落している。
- 220) アラビア語では *bi'r al-kalb* (al-Jāhiz 1965-1969: vol. 2, 123)。ダミーリーの『動物の生活誌』では、カズウィーニーの『被造物の驚異』からの転載としてアレppo近郊の村にある同名の井戸を紹介している (al-Damīrī 2005: vol. 3, 590)。それによれば、「イヌに咬まれた者がそこから飲めば狂犬病 (*kalib*) が治癒することでよく知られる」とある。
- 221) ベルリン写本では、アルカーティブ (「書記」の意味) がアルカルビー (「イヌの」とい

- う形容詞) になっている。
- 222) 類話がタヌーヒーの『座談の粹』(第7巻130話)にあり(al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 7, 224-225)。ダミーリーの『動物の生活誌』ではタヌーヒーの書名を挙げてそこからの転載として紹介している(al-Damīrī 2005: vol. 3, 593-595)。
- 223) アラビア語では、知事・地方長官を意味する‘āmil。ユースフ版では、支配者・統治者を意味する ḥakīm。
- 224) アラビア語の原義は「(パーティーや散歩など気晴らしをして) 楽しむ場所」。版によって、mutanazzahāt (スミスの校訂版、ベイルート版) / manzahāt (パリ写本) / muntazahāt (その他のすべての写本と校訂版) と意味はほとんど同じだが異なった単語が用いられている。問題はスミスの校訂版である。同版の底本の一つとなっているベイルート版のものを採用したのであろうが、校訂注には「ベイルート版が muntazahāt」とあり、さらに「ベルリン写本に拠って誤記(を修正)」とあるが、実際にはベイルート版が mutanazzahāt で、ベルリン写本は muthazahāt (同写本の二行下には muntazah とあるので誤写と推定) となっており、スミスの校訂版の校訂注による情報とは異なっている。スミスの校訂版が校訂においてなぜ当該の単語を選んだのか、それもベイルート版も含めてより古い本文伝承を反映したものから選ばずにそうしたのか理由が判然としなだけでなく、校訂版情報としてこのような誤記がこの部分だけでなく少なからず見られるのは、残念ながらスミスの校訂版の価値を下げていると言わざるを得ない。
- 225) アラビア語では tharīda (tharīd とも) で、パンを細かく砕いてスープなどに浸しておかゆ風にした料理。スミスの校訂版の英語訳ではミルクプディングとしている。ちなみにベイルート版、ベルリン写本、ランドバーグ写本、ペテルスブルグ写本では, thurda という単語を使っている。
- 226) 女性の形容詞としてスミスの校訂版のアラビア語校訂文は、「年老いた」という意味の zumnā’ (‘azman の女性形) としているが、ランドバーグ写本のみがこの単語を使っており(おそらくスミスの校訂版が使用したカイロ版も)、他の校訂版や写本では zamnā あるいは zamna となっており、「中風の、足の悪い、片足の」という意味となる。ここではランドバーグ写本にしたがって訳した。
- 227) アラビア語では, nabah / sāh という動詞が使われている。どちらも「吠える」「鳴く」と訳せるが、特に後者は人間が叫ぶ場合にも使われる。ちなみに後の文の「しつこく吠え続け」という表現には、後者の動詞の動名詞が使われている。
- 228) ベイルート版(それに拠ったスミスの校訂版)、ベルリン写本、パリ写本、アズハル写本では、文の後半が過去表現になっており、「イスはしつこく吠え続けたが、誰も意図するところがわからなかった」と訳せる。ここではランドバーグ写本に近い訳にしておく。
- 229) ランドバーグ写本では「手」となっている。
- 2230) ベイルート版、ベルリン写本、ランドバーグ写本、ペテルスブルグ写本では「大皿に」、パリ写本では「大きな椀に」となっている。
- 231) パリ写本ではこれにくわえて、「白髪の」とある。
- 232) 類話がタヌーヒーの『座談の粹』(第6巻143話)にある(al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 6, 220-221)。
- 233) ヤークートの『地理辞典』によれば、バグダード近郊の大きな村の名前。イーサー川(ナフル・イーサー)に面している(Yāqūt 1866-1873: vol. 4, 1002; Yāqūt 2011: vol. 5, 488)。
- 234) アラビア語では sufra で、旅行用の食料や、それを包む革や布(それを食卓にも使用する)を指す。
- 235) ベルリン写本では「道中の心配もなく(つつがなく)」、ペテルスブルグ写本では「(命や積み荷などを)失う心配もなく」、ランドバーグ写本では「そこからメッカまで心配もなく」となっている。
- 236) ベルリン写本ではこの語句が抜けている。
- 237) アラビア語では qubā または qubā’ と表記される。シャバーラーの補注ではメディナ近郊の同名の場所としているが、スミスの校訂版の英語訳の補注ではメッカからバスラの間の巡礼路にある別の場所としている。
- 238) アラビア語では madīnat al-salām で、「平安の町(都)」という意味でバグダードを指す。パリ写本では madīnat al-nabī としており、「預言者の町」つまりメディナとする。古い本文伝承を維持していると思われるカイロ写本(スミスの校訂版の底本の一つ)、ランドバーグ

- 写本、ペテルスブルグ写本では「彼 [=そのイヌ?] の町 (その上に平安あれ!)」となっております、旅立った元の町であるバグダードと解釈できる。
- 239) ベルリン写本ではサハム。
- 240) アブー・アルヤクザーン・アーミル・ブン・ハフスのことかと思われる (Zirikli 2002: vol. 3, 250)。ヒジュラ暦 190 年/西暦 806 年生まれ。カランマス (qalammas) 「水が豊かな井戸、寛大な人」という諱名 (ラカブ) で知られる。
- 241) スミスの校訂版の校訂注には、この名前の一部の「ブン・ムハンマド」がベルリン写本では欠けているとするが、誤解であり実際には欠けていない。ちなみにランドバグ写本とペテルスブルグ写本では、当該部分の「ムハンマド」の一語のみが欠けている。ここからは推量だが、スミスの校訂版が底本の一つとしたカイロ写本はこれら二つの写本に酷似しているところが多々あるので、おそらく上記の校訂注はカイロ写本の誤記と思われる。
- 242) ヒジュラ暦 228 年/西暦 842-843 年没。アッバース朝時代の著名な歴史家で、音楽家のイスハーク・ブン・イブラーヒーム・アルマウシリーのパトロンとなったことで知られる。バスラ生まれで、昔のクテシフォンであるマダーインにしばらく暮らし、後にバグダードで亡くなった (Zirikli 2002: vol. 4, 323)。
- 243) スミスの校訂版はサラマ (salama) と読むが、バイルート版では二番目の子音にスクーン (母音無し記号) が振ってあるのでおそらくサルマ (salma)。
- 244) イブン・アビー・アッドウンヤーとして知られる (Zirikli 2002: vol. 4, 118; EAL 304)。バグダードでヒジュラ暦 208 年/西暦 823-824 年に生まれ、ヒジュラ暦 281 年/西暦 894 年に没す。ハディース学者で多くの宗教書を著し、アッバース朝カリフのムウタミドの兄弟で権力者だったムワフファクの庇護を受け、彼の息子で将来のカリフとなるムウタディドや孫のムクタフィーの教育係となったことでよく知られる。
- 245) アラビア語では、ターウン (tā'ūn) という単語が使われている。一般的に疫病を表すとともに、特に中世の文献ではいわゆるペスト (黒死病) を指す場合が多い (Dols 1977)。
- 246) 正確に訳すと、「その街区 (mahalla) の人たち」。
- 247) ベルリン写本のみで「亡くなった家の持ち主が」とある。
- 248) ベルリン写本には、「このような事績をもたらされた御方に栄光あれ!」という一文が最後に加えられている。
- 249) 類話がタヌーヒーの『座談の粹』(第 4 卷 97 話) にもある (al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 4, 206-207)。
- 250) バリ写本ではアブー・アルカーシム。なおこのバリ写本とアズハル写本を除いては、カーシムの長母音が表記しない古い綴りになっており、ランドバグ写本のみが文字の真上に短いアリアフ (長母音の ā の記号) を補っている。
- 251) アラビア語をローマ字転記すると naysābūr で、イランのホラサーン地方でカスピ海の南東にある有名な町。この地名には本文伝承間で大きな異同があり、スミスの校訂版はユースフ版に拠って校訂したと思われるが、他にはバリ写本とアズハル写本が同じく naysābūr で、バイルート版では shāyārzān、ベルリン写本では al-bahābzārān (短母音記号が振られていないのでここでのローマ字転記は推測。おそらく語頭の b(a) の文字は、本来あった場所を示す前置詞の b(i-) を地名の一部とみなした誤写)、ランドバグ写本とペテルスブルグ写本では shāmūr となっている。
- 252) この文の後半部分 (ラーシビー家～) はバイルート版とベルリン写本にしかない。ベルリン写本に拠ってスミスの校訂版は加筆しているが、根拠なく語句の順番を入れ替えている。話の後の方でアッラーシビーが登場することから考えると本来は話の導入部に当該の一文があったはずであり、ランドバグ写本とペテルスブルグ写本からは欠落しているものの、同じくより古い本文伝承を底本にしたバイルート版にここでは従っておく。
- 253) ナシムという名前は「心地よいそよ風」を意味する。
- 254) この質問にあたるアラビア語文をスミスの校訂版ではどの版や写本にも存在しないものに意図的に書き換えており、「彼が家のなかにイヌをいれていることを認めてそのことで黙っているのか」と訳せる。スミスの校訂版が依拠したすべての版や写本では、「彼が家のなかにイヌをいれていることを認めてそのことを認めているのか」となっており、繰り返しの表現が不自然で悪文に誤写されたためとスミスの校訂版の校訂注にはある。しかしながら、より古い本文伝承に拠るとされるランドバグ写本 (ならびにペテルスブルグ写本) では、当該アラビア語文の最初の動詞 yaqna' 「満足する、納得する」に対して yaşna'

「おこなう」となっており、「彼が家のなかにイスをいれていることで何かしたのか、そのことを認めているのか」となり自然な文となる。ここでは文意を汲んで自然な流れになるように訳したが、どちらにせよまったく典拠のない原文を校訂者が作文することは好ましくない。

- 255) 「獵犬」と訳したアラビア語は *kalb šayd* で文字通り「狩獵のイス」であるが、ベイルート版にはこの表現に *zi'nī* という形容詞がついている (*kalb šayd zi'nī*)。またランドバーグ写本とペテルスブルグ写本では一文が加えられており、前文も含めてアラビア語の全文を転写すると、*laysa bi-kalb šayd wa-lā zanbī* (最後の単語の母音は不明。おそらくベイルート版の *zi'nī* に相当) となり、「獵犬でもなく、ザンビー〔産～種?〕でもない」と訳せる。*zi'nī* が *zanbī* の誤写であり、ランドバーグ写本とペテルスブルグ写本の表現のほうが原文に近いと判断できるかもしれない。ただし、中世アラブの大辞書、イブン・マンスールの『リサース・アルアラブ (アラブの舌)』によると、動詞の *zaniba* は *samina* 「太る」と同義であり、形容詞 *'aznab* 「太っている」、名詞 *zanab* 「太ること」とあるので、*zanabī* と当該の単語を読めば「太っていない (大型犬ではない)」と解釈でき、中世アラブの狩獵犬の代表は有名なサルキーという大型犬であることから (Allen and Smith 1975)、その種のイスではないと言っている文かもしれない。実際に、*zīmī* あるいは *zi'nī* がジャーヒズの『動物の書』においても当時の犬種のひとつとして記載されているが (al-Jāhīz 1965-1969: vol. 1, 157, 311; vol. 2, 179)、狩獵犬ではなくより小型のバセット種の牧羊犬を指している (Shehada 2013: 44; Mikhail 2014: 73)。
- 256) アリー・ブン・アフマド・アッラーシビーのこと。彼のクンヤ名と思われる。ベルリン写本のみ、「アッラーシビーはこう答えた」と修正している。
- 257) パリ写本のみ「二年間」となっており、理由がわからないが、スミス校訂版ではパリ写本を採用した上で、翻訳では「何年ものあいだ」にあたる英文にしている。
- 258) ベルリン写本では、ここより前の二つの文が欠けている。
- 259) 現在のイラン西部のケルマンシャー州にあった都市で、西暦 7 世紀から 10 世紀にかけて栄えた。
- 260) ランドバーグ写本とペテルスブルグ写本では、この一文と前の一文が欠けている。
- 261) 類話がタヌーヒーの『座談の粹』(第 7 巻 56 話) にもある (al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 7, 95)。
- 262) パリ写本のみ (誤写か?)、アッタイリーあるいはアッティエリーと読める。
- 263) アラビア語をローマ字転写すると *mukhāriq* だが、*muḥāriq* (パリ写本)、*muḥārif* (ベルリン写本) ともある。ダイル (*dayr*) は修道院を意味しており、ダイル・ムハーリクという地名なのか、ムハーリク修道院なのかは判然としない。シャバールーの注釈によると *mikhṛāq* ~ *mukhrāq* とも綴られ、イラン南西部のフーズスターン州にある地名とされる。イブン・ルスタの地理書『アルアラーク・アンナフィーサ』では、ワーシトとスーク・アルアフワズの間位置し、ワーシトから 13 ファルサフのところにある。
- 264) 正確にはアルムウタディド・ピッラーで、アッバース朝第十六代カリフ (在位西暦 892 ~ 902 年)。
- 265) スミスの校訂版ではここで *nuzl* (穀物、客への食物) と解釈しているが、*nazl* (滞在場所、宿) とも読める。意味が難解なためか、写本間での異同が大きく、まったくアラビア語として存在しない綴り字もある。ランドバーグ版では *yazk* (歩哨、見張り) とあり、「歩哨の任についていた」と訳せる。
- 266) アラビア語をローマ字転写すると *bāšīrī* となるが、写本間で異同が大きく、*bāšīrī* (ベイルート版、ランドバーグ写本、ペテルスブルグ写本)、*nāšīrī* (ベルリン写本)、*māšīrī* (パリ写本) である。スフラーは地名等に付くと「下の、低い」という意味なので、バースィーリーの低地 (下バースィーリー) とも解釈できる。
- 267) この文とその前の文が版によって異なっており、もっとも単純なベイルート版 (それに拠ったスミスの校訂版も)、ベルリン写本、ランドバーグ写本、ペテルスブルグ写本では、「彼については命じて今ならアッラーの御赦しを乞うようなことを与えた」(つまり、罰を与えた) となり、ユースフ版、パリ写本では「彼については今ならアッラーの御赦しを乞うようなことを命じて罵った」(ちなみにアズハル写本では「命じて」の部分欠く) となる。
- 268) アラビア語では *liṣṣ ta'ib* だが、改悛した犯罪者はタウワーブ (*tawwāb*) とも呼ばれ、そ

- の知識を警察が利用して下手人を捕まえたりもしていた（アーウィン 1998: 192-193）。
- 269) 類話がタヌーヒーの『座談の粋』（第7巻 54話）にもある（al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 7, 90-91）。
- 270) アラビア語では al-jabal。ジャバルは一般的には「山」を意味し、ここの文脈ではアッバース朝期などの中世におけるイラクの特にイラン側の地方を指す言葉で、ハマダーン、ディーナワル、ライ、イスファハーン、カズウィーンなどの町が含まれる。ユースフ版ではこの単語を al-hiyal (hīla の複数形)「策略、洞察力」としており、スミスの校訂版はこれに従うが（「おかみに仕える急使で利発なある人物が」とでも訳せる）、ペイルート版やランドバーグ写本をはじめ他のほとんどでは al-jabal としているし、話のなかにイスファハーンが登場することも考えて、本訳ではこの読みに従っておく。ちなみにパリ写本では al-habl（「縄」の意味）になっているが、al-hiyal の読みの場合と同様に al-jabal とアラビア文字表記が酷似しているための誤記であろう。
- 271) アラビア語は fuyūj（単数形は fayj）で「急使、伝令」を意味する。ユースフ版、ペテルスブルグ写本、ランドバーグ写本では、「長老」を意味する shuyūkh（単数形は shaykh）となっており、ベルリン写本では shuyūkh と先に書いた後で fuyūj に修正している。
- 272) 類話がタヌーヒーの『座談の粋』（第4巻 109話）にもある（al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 4, 228）。
- 273) ユースフ版のみ「古い」という形容詞が加えられている。
- 274) 大麻あるいはヒヨスを指すバンジュ (banj) というアラビア語が用いられている。12世紀ないし13世紀以前には、いわゆる麻薬としてではなく薬、毒薬、媚薬の原料としての使用が一般的だった。アラビアンナイトのような民間説話集では一種の睡眠薬として登場することが多い。後期に編纂された物語になると、バンジュで混乱した人物による滑稽譚がよく語られる。現代アラビア語でもバンジュから派生したバンナジャという動詞が「麻醉をかける」という意味で使われる。バンジュを使って相手の抵抗力を奪う泥棒のことを特にムバンニジュ (mubannij) と呼び、極悪非道な輩には子どもさらいが黙らせておくためにバンジュを使った（アーウィン 1998: 206-207）。
- 275) 類話がタヌーヒーの『座談の粋』（第6巻 142話）にもある（al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 6, 219）。
- 276) パリ写本、ベルリン写本、ペテルスブルグ写本では「爪でひっかけ」となっており、ランドバーグ写本でも欄外に同じ語句を注記している。
- 277) ユースフ版でのみ、「目の一つに」とする。
- 278) 類似の逸話が、ジャーヒズの『動物の書』に散見する（al-Jāhīz 1965-1969: vol. 1, 283, 302-303）。
- 279) クルアーンの第6章 96節を参照。
- 280) アラビア語は masrah となっており、正確には「牧場、牧草地」を意味する。ペテルスブルグ写本とランドバーグ写本では、musrij「(馬などに乗って) 出かける」とある。
- 281) アラビア語は mūq だが、より正則的なアラビア語では mu'q となり、ma'iqā「すすり泣く」という動詞から派生した単語で、涙が出てくる目の内側の隅の部分（涙腺付近）を指す。イヌにつける名前についてジャーヒズは次のように書いている。「イヌの飼い主がこう言っている。『イヌは二ワトリと一つの点で違う。イヌは皆が知っているように名前や綽名を持っている。人懐っこいか、四肢や他の体の部位がどうか、純血かどうか、速く走り狩猟がうまいか、血統がしっかりしているか、それが帳簿に記録されているか、種の特徴を保持しているか、生まれた場所や日付がわかっているかなどによって [名前がつけられるのだ]』。」（al-Jāhīz 1965-1969: vol. 2, 17）。また有名なイスファハーニーの『歌の書』が歌手のイブン・ジャーミウについて伝えるところによると、「アリー・ブン・アブド・アルアズィーズがイブン・ホルダーズベから聞いたこととして私に語ってくれたのだが、ある人がイブン・ジャーミウにイヌをプレゼントしたところ、彼は『その名前は何か?』と尋ねた。『私は知らない』と相手が答えると、彼はイヌの名前が記帳されたもの (daftar) を持ってこさせると、イヌが応えるまでそこにあるすべてのイヌの名前を呼んだ。」とある（al-ʿIṣfahānī 1955-1964: vol. 6, 277-278）。
- 282) スミスの校訂版では、おそらくベルリン版に従って shaghab（「不穩」の意味）とするが、ユースフ版、ペイルート版、ランドバーグ写本、ペテルスブルグ写本では saghab（「空腹」の意味）となっており、これに従う（ちなみになぜかスミスの校訂版の英語訳は後者のも

- のとなっている)。パリ写本の *sha' b* (「人びと」の意味) は明らかに誤写であろう。
- 283) この一文は版によって異同が少なからずある。そのためか、パリ写本とアズハル写本では割愛されている(後者では欄外に補足のかたちで記している)。
- 284) アズハル写本ではこの一文の詩句も欠落している(欄外には補足のかたちで記している)。
- 285) ダイラムとは、カスピ海南西部のギーラーン地方にある山岳地帯を中心に暮らす住民を指す。剣や槍、投げ槍などを使った戦いに長じており、ダイラム軍閥として時の支配権力に与することもあった。
- 286) ザンジュとは黒人奴隷を意味し、特に東アフリカ一帯からイラク地域に連れてこられた人びとを指す。アッバース朝期にはイラク南部の農地で働いていたザンジュたちの大規模な反乱(ザンジュの乱、西暦 869 ~ 883 年)を起こした。
- 287) ベルリン写本、パリ写本、アズハル写本では、アフマド・ブン・アフマドという名前になっている。
- 288) 類話がタヌーヒーの『座談の粹』(第 6 巻 167 話)(al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 6, 245) とダミーリーの『動物の生活誌』(al-Damīrī 2005: vol. 3, 592) にもある。
- 289) ベルリン写本では、「件の男は後に残った。アルハリースが家から遠い場所まで行くと」までの文が欠落している。
- 290) ユースフ版、ペテルスブルグ写本、ランドバーク写本では、「男が女の腹の上で激しく動いている」とある。またベイルート版では、「一緒に寝ていると～」からこの箇所までが、「(男が) 彼女と二人だけになろうとすると」という簡略化された文に入れ替えられている。敬虔なキリスト教徒の司祭でもあったシェイホが校訂したアラブ古典文学作品のなかには、彼によるベイルート版アラビアンナイト校訂本に典型的に見られるように、倫理的に不適切な文や時には物語全体が差し替えられる傾向にある。
- 291) 興味深いことに、ランドバーク写本とペテルスブルグ写本ではともに「ダーブ」にあたる部分が白紙の状態になっている。後者の写本では欄外注に「底本も白紙」とあることから、両写本が底本とした写本はおそらく同一だった可能性が高い。
- 292) 類話がタヌーヒーの『座談の粹』(第 6 巻 169 話) にもある(al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 6, 247)。
- 293) ベイルート版ではこの一文が欠けている。
- 294) ベイルート版では、この一文から「そうしましょう」までが欠けており、さらにその次の文が、「こうして二人は飲み食いし、悪いおこないをしようとした。するとイヌがとびかかり」となっており、ここでも不品行な表現が修正されている。
- 295) 類話がタヌーヒーの『座談の粹』(第 6 巻 151 話) にもある(al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 6, 229)。
- 296) 類話がタヌーヒーの『座談の粹』(第 6 巻 139 話) にもある(al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 6, 216)。
- 297) 正確にはマイムーナ・ビント・アルハリース・アルヒラーリーヤで、預言者ムハンマドの妻の一人。生没年には諸説あるが、ヒジュラ暦 51 年/西暦 671 年に他界しており、預言者の最後の妻にして最も長生きしたとされる。
- 298) スミスの校訂版では、この逸話のアラビア語本文は校訂しているものの、どういう理由かわからないが英語訳は別の箇所に挿入している。注の 197) を参照。ベイルート版の注釈で「ここは底本において物語の始めであると欠落しているので割愛する」述べて、次の逸話とともに本文の校訂をしていないことや、この逸話の前後のものに比べるととまどみに欠ける印象をもたざるをえないことを考えあわせると、本文の伝承過程で欠落してしまった逸話があったのかもしれない。なお、類話がタヌーヒーの『座談の粹』(第 6 巻 140 話) にもある(al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 6, 217)。
- 299) ミスマールというアラビア語の単語は「釘」を意味する。また古い意味では「ラクダの世話人」もある。
- 300) スミスの校訂版ではベルリン写本に従って、「アラブの民のなかで彼女の行李を狙うものは誰もいなかった」と訳せるアラビア語文になっているが、他のすべての印刷校訂版ならびに写本では、ここで訳したようなアラビア語文になっている。
- 301) アラビア語は *fujī 'tu bi-mismār* となっており、この動詞表現は自分の子どもや両親などきわめて親しい家族を亡くした時のたとえような悲哀を意味しており、動物であるイヌ

に使われているところに留意すべきである。ペイルート版とベルリン写本では、これを *lahiqā* 「後を追う（時に、「後を追って亡くなる」の譬喩表現でも使われる）」という動詞を使って変更しており、訳すと「私もミスマルの後を追いましょう」となる。このような難解語ではあるが、テーマと深い関連性がある表現が本文伝承の過程で、意味が理解できなくなっていったために他の単語と置き換えられていることが多々ある。より古い本文伝承を文献言語学的手法をもって再構する意義はそのようなところにもある。ちなみにスミスの校訂版の英語訳では、悲しみを表す普通の英語表現がとられており、動物であるイヌと人との関係性の機微が捉えられていない（おまけに英語訳の注で、ミスマルを別の逸話に登場する別のイヌの名前のムークと誤解している）。先に記したように、スミスの校訂版では、アラビア語本文は原典のままの位置においているが、英語訳は別の箇所に移行させている。おそらくこの逸話を最後の方に持ってきた著者イブン・アルマルズバーンの意図がじゅうぶんに理解できていないためであろう。

- 302) ベルリン写本、ペテルスブルグ写本、ランドバーク写本では「ヤジード」とある。
- 303) スミスの校訂版のアラビア語の校訂本文では、この逸話の全体が収められているが、英語訳では伝承経路のところはもちろん、「アズフリー〜」からこの箇所までが、次の逸話と無関係と判断したためであろうか、あるいはスミスの校訂版が拠ったカイロ版がそのような順番になっていたのであろうか、先のマイムーナの逸話とともに別の箇所に挿入されている。注の 298) を参照。
- 304) スミスの校訂版がマイムーナの逸話とズフリーの逸話を敢えて別の場所に挿入した理由はわからないが、たしかに一見すると唐突感是否めない。イブン・アルマルズバーンが人と、動物としてのイヌとの関係性のなかに、人と人との関係性を透かし見るメタファーをもって議論してきたとすれば、マイムーナの逸話とズフリーの逸話にはイヌの飼育に関わる人間社会との何らかの連関があると読み込まなくてはいけないだろう。池谷 (2019: 64-65) は人類史のなかで犬狼を位置づけて、狩猟採集民と農耕民におけるその生業形態と社会構造からくる犬狼の持続性と相違を指摘しているが、藪田 (2019: 43) が言うように、西アジアでの牧畜の誕生に伴い「牧畜がよく吠えるイヌを産んだ」とするならば、牧畜（遊牧）社会における番犬（牧羊犬）としてのイヌの存在と猟犬としてのイヌの存在を議論する必要がある。マイムーナの逸話はイヌの飼育や管理を得意とする特定の部族の存在、ズフリーの逸話はそのような部族に属する特定の個人による知識や技能の管理、さらにはイヌの交配をめぐる何らかの慣習法（ウルフ）の存在を示唆しているのかもしれない。
- 305) 類話がタヌーヒーの『座談の粹』（第 6 巻 150 話）にもある（al-Tanūkhī 1971-1973: vol. 6, 228）。
- 306) ここで「所用」としたアラビア語は *ḥawā'ij* だが、ベルリン写本のみ、*'ashghāl*（仕事）となっている。スミスの校訂版のアラビア語本文ではほぼすべての印刷校訂版や写本で採用されている前者ではなく後者を採用しているが、理由は明らかにしていない。これは逸話全体の趣旨に関わる変更ではあるが、スミスの校訂版では原則スーフ版とカイロ版に拠るとしている。今回の翻訳の作業を通じて詳細な各版の比較による本文批判がおこなってきたが、スミスの校訂版にはこの種の本文作成が多く見られ、それも理由なく（おそらく現代アラビア語から見てより理解しやすい単語や表現を採用する傾向がある。「所用」→「仕事」という変更も近代以降の社会変化に応じた本文伝承の影響だろう）、本文校訂をおこなっているので注意が必要である。また校訂注についてもどの写本かを示すのを間違えたり、当該の箇所の異同をすべて示すのではなく恣意的に記していたりするところも多く、さらにはアラビア語本文と英語本文が自由訳という限界を超えて必ずしも対応していないところや、まったく翻訳せずに割愛しているところもあるのは、スミスの校訂版の英語訳がアラブ世界におけるイヌ文化の基本資料として他の地域や研究領域で利用されているだけに残念である。
- 307) アラビア語では、ペルシア語起源の *būz* という単語が使われている。
- 308) 「木の幹ほどもある」に相当するアラビア語の表現はベルリン写本のみに見られ、他の印刷校訂版や写本には確認されない。
- 309) 本章の最後の文章は各版によってすこしずつ異なっているが、ここでは、最も古い本文伝承に拠る版のひとつと思われるランドバーク版（ユースフ版もまったく同じ）に従って訳した。

参照文献

略語

- EAL: Encyclopedia of Arabic Literature.* (1998) Edited by Julie Scott Meisami and Paul Starkey. 2 vols. London and New York: Routledge.
EĪ: Encyclopedia of Islam. Second Edition. (1960–2007) Edited by P. Pearman, Th. Bianquis, C. E. Boswarth, E. van Donzel and W. P. Heinrichs. Leiden: Brill.
ODI: The Oxford Dictionary of Islam. (2003) Edited by John L. Esposito. Oxford: Oxford University Press.

写本

- Wetzstein II 1730
Kitāb tafāṭil al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb. Berlin: Staatsbibliothek zu Berlin. 38r–51v
 164 Abāzah (abazah) 6369
Kitāb faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb. al-Qāhira (Cairo): al-Maktaba al-‘Azhariyya, 18ff.
 Arabe 6011.
Kitāb faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb. Paris: Bibliothèque nationale de France, 1r–23r.
 Landberg MSS 350.
Faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb. New Haven: Yale University, Beinecke Rare Book and Manuscript Library, 14ff.
 Ms. O. 911.
Kitāb faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb. Saint Petersburg: Library of St. Petersburg State University, 6ff.

校訂本（本稿で参照されていないものの出版情報も含める）

- Ibn al-Marzubān, Muḥammad ibn Khalaf
 1978 *The Book of Superiority of Dogs over Many of Those who Wear Clothes.* Translated and edited by G. R. Smith and M. A. S. Abdel Haleem. Warminster: Aris & Phillips.
 1909 *Kitāb faḍā’il al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb,* edited by Louis Cheikho. *al-Machriq*, année 12, pp. 515–533. Beyrouth.
 1922 *Kitāb faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb.* Edited (?) by Ibrāhīm Yūsuf. Cairo: Maṭba‘at Maḥmūd Tawfiq.
 1986? *Faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb.* Edited by ‘Abd al-Raḥmān Ḥasan Maḥmūd. [Cairo]: Maktabat al-Ādāb. (Print based on 1922 edition)
 1987 *Faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb.* Edited by ‘Abd al-Raḥmān Ḥasan Maḥmūd. al-Ṭā’if: Maktabat al-Ma‘ārif.
 1990 *Tafāṭil al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb.* Edited by Muḥammad Zuhayr Shāwīsh. Bayrūt: al-Maktab al-Islāmī.
 1992 (1998) *Tafāṭil al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb.* Edited by ‘Aṣṣām Muḥammad Shabārū. Bayrūt: Dār al-Taḍāmun.
Faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb. Edited by Ḥamdī Zamzam. al-Maktaba al-Shāmīla. (Reprint of 1922 edition)
 2003 *Kitāb faḍl al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb.* Cologne: Al-Kamel Verlag (al-Manshūrāt al-Jamal). (The same edition of the Arabic part of 1978)
 2006? *Tafāṭil al-kilāb ‘alā kathīr mimman labisa al-thiyāb.* Edited by Abū al-Muzaffar Sa‘īd Ibn

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

Muḥammad al-Shinnārī.

2019 *Al-Thuqalā' wa- faḍl al-kilāb 'alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. Edited by Muḥammad 'Abdullāh Qāsim. Dimashuq: Dār al-Bashā'ir.

研究書・論文

〈日本語〉

アーウィン, R.

1998 『必携アラビアン・ナイト—物語の迷宮へ』西尾哲夫訳, 東京: 平凡社。

池谷和信

2019 「犬を使用する狩猟法(犬獵)の人類史」大石高典・近藤祉秋・池田光穂編『犬からみた人類史』pp. 46-67, 東京: 勉誠出版。

大石高典・近藤祉秋・池田光穂編

2019 『犬からみた人類史』東京: 勉誠出版。

ジャルジー, S

2019 『アラブ音楽』(文庫クセジュ)水野信男監修, 西尾哲夫・岡本尚子訳, 東京: 白水社。

タヌーヒー

2016 『イスラム帝国夜話』上下巻, 森本公誠訳, 東京: 岩波書店。

西尾哲夫

2006 『アラブ・イスラム社会の異人論』京都: 世界思想社。

2021a 「なぜ日本で中東地域を研究するのか?」西尾哲夫・東長靖編『中東・イスラーム世界への30の扉』pp. 355-365, 京都: ミネルヴァ書房。

2021b 「アリババと塩」『月刊みんぱく』45(12): 6-7。

西尾哲夫訳

2019-2020 『ガラン版千一夜物語』全6巻, 東京: 岩波書店。

藪田慎司

2019 「イヌはなぜ吠えるのか—牧畜とイヌ」大石高典・近藤祉秋・池田光穂編『犬からみた人類史』pp. 24-45, 東京: 勉誠出版。

ルトファッラー, G / 縄田浩志訳

2013 「アラビア半島におけるヒマー保全システムの歴史」佐藤洋一郎・谷口真人編『イエローベルトの環境史—サヘルからシルクロードへ』pp. 112-127, 東京: 弘文堂。

〈外国語〉

Abou El Fadl, K.

2005 *Dogs in the Islamic Tradition and Nature. Encyclopedia of Religion and Nature*. London: Thoemmes Continuum.

'Abū Nuwās

1953 *Dīwān 'Abī Nuwās (al-Ḥasan b. Hānī)*. Edited by 'Aḥmad 'Abd al-Majīd al-Ghazzālī. al-Qāhira (Cairo): Maṭba'at Miṣr.

Ahlwardt, W.

1893 *Verzeichnis der arabischen Handschriften der Königlichen Bibliothek zu Berlin* (Fünfter Band). Berlin: A. Asher.

Ahsan, Muhammad Manazir

1979 *Social Life under the Abbasids*. London and New York: Longman, Beirut: Librairie du Liban.

Allen, M. J. S. and G. R. Smith

1975 Some Notes on Hunting Techniques and Practices in the Arabian Peninsula. In R. B. Serjeant and R. L. Bidwell (eds.) *Arabian Studies* 11, pp. 108-147. Cambridge: C. Hurst and

- Company.
 al-Bakrī, 'Abū 'Ubayd
 1971 *Faṣl al-maqāl fī sharḥ kitāb al-'amthāl*. Edited by 'Ihsān 'Abbās and 'Abd al-Majīd 'Ābidīn. Bayrūt (Beirut): Dār al-'Amāna.
- Al-Bayhaqī, 'Abū Bakr 'Aḥmad al-Ḥusayn
 2003 *al-Jāmi' al-shu'ab al-īmān*. Edited by Mukhtār 'Aḥmad al-Nadwī. 14 vols. al-Riyāḍ: Maktaba al-Rushd.
- Bloch, E.
 1900 *Catalogue de la collection de manuscrits orientaux, arabes, persans et turcs formée par M. Charles Schefer*. Paris: Ernest Leroux, Éditeur.
- Brockelmann, C.
 2016–2018 *History of the Arabic Written Tradition*. Translated by Joep Lameer. 6 vols. Leiden: Brill.
- Cheikh, L.
 1909 Kitāb faḍā'il al-kilāb 'alā kathīr mimman labisa al-thiyāb. *al-Machriq* (Beyrouth), année 12: 515–533.
- al-Damīrī, Kamāl al-Dīn Muḥammad b. Mūsā
 2005 *Ḥayāt al-ḥayawān al-kubrā*. Edited by Ibrāhīm Ṣāliḥ. 4 vols. Dimashq (Damascus): Dār al-Bashā'ir.
- Dols, M. W.
 1977 *The Black Death in the Middle East*. Princeton: Princeton University Press.
- Eisenstein, H.
 1984 *Die Systematik der Säugetiere in Mittelalterlichen Arabischen Quellen*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.
 1990 *Einführung in die Arabische Zoographie: Das tierkundliche Wissen in der arabisch-islamischen Literatur*. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.
- El Shamsy, Ahmed
 2020 *Rediscovering the Islamic Classics: How Editors and Print Culture Transformed an Intellectual Tradition*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- Foltz, R. C.
 2006 *Animals in Islamic Tradition and Muslim Cultures*. Oxford: Oneworld Publications.
 2010 Zoroastrian Attitudes toward Animals. *Society and Animals* 18: 367–368.
- Fudge, B.
 Dog. In *Encyclopaedia of the Qur'ān*. (2001–2006) vol. 1, pp. 545–546. Leiden: Brill.
- Ḥalwajī, 'Abd al-Sattār
 2011 *Fihris al-Makhtūṭāt al-'Arabiyyah bi-Dār al-Kutub al-Miṣriyyah (al-Majāmi')* / *Catalogue of Arabic Manuscripts in the Egyptian National Library (Dār al-Kutub al-Miṣriyyah), Collections (Majāmi')*. 4 vols. al-Qāhira: Dār al-Kutub wa-l-Wathā'iq al-Qawmiyya, London: Al-Furqān Islamic Heritage Foundation.
- Hasan, Aḥmad 'Abd al-Bāsīt
 2015 *Fihris Majāmi' al-Maktabat al-Khāṣṣah bi-Dār al-Kutub al-Miṣriyyah / Catalogue of the Private Collections of Manuscripts in the Egyptian National Library*. 8 vols. al-Qāhira: Dār al-Kutub wa-l-Wathā'iq al-Qawmiyya, London: Al-Furqān Islamic Heritage Foundation.
- Ibn 'Abd al-Barr
 1982 *Bahjat al-majālis wa-'uns al-mujālis*. Edited by Muḥammad Mursī al-Khūlī. 3 vols. Bayrūt (Beirut): Dār al-Kutub al-'Ilmiyya.
- Ibn Ḥamdūn
 1996 *al-Tadhkira al-ḥamdūniyya*. Edited by 'Ihsān 'Abbās and Bakr 'Abbās. 10 vols. Bayrūt (Beirut): Dār Ṣādir.
- Ibn Ḥibbān al-Bustī
 2009 *Rawḍat al-'uqalā'*. Edited by 'Abd al-'Alīm Muḥammad al-Darwish. Dimashq (Damascus): al-Hay'a al-'Āmma al-Sūriyya lil-Kitāb.

西尾 イブン・アルマルズバーン著『衣服を着た多くのものよりもイヌがすぐれている件についての書』

Ibn al-Nadīm

1970 *The Fihrist of al-Nadīm: A Tenth-century Survey of Muslim Culture*. Edited and translated by Bayard Dodge. New York: Columbia University Press.

2009 *Kitāb al-fihrist / The Fihrist of al-Nadīm*. Edited by Ayman Fuad Sayyid. 2 vols in 4. London: Al-Furqān Islamic Heritage Foundation.

Ibn Qutayba

1930 *ʿUyūn al-ʾakhbār*: 4 vols. al-Qāhira (Cairo): Dār al-Kutub al-Miṣriyya.

Ibn al-Rūmī

2002 *Dīwān Ibn al-Rūmī*. Edited by ʾAḥmad Ḥasan Basaj. 3 vols. Bayrūt (Beirut): Dār al-Kutub al-ʾIlmiyya.

Ibn Saʿd

2001 *Kitāb al-ṭabaqāt al-kubrā*. Edited by ʾAlī Muḥammad ʾUmar. 11 vols. al-Qāhira (Cairo): Maktabat al-Khānjī.

al-ʾIṣfahānī, ʾAbū al-Faraj

1956–1964 *Kitāb al-ʾaghānī*. 20 vols. Bayrūt (Beirut): Dār al-Thaqāfa.

al-Jāhiz, ʾAbū ʾUthmān ʾAmr b. Baḥr

1965–1969 *Kitāb al-ḥayawān*. Edited by ʾAbd al-Salām Muḥammad Hārūn. 8 vols. (2nd ed.) al-Qāhira (Cairo): Maktabat wa-Maṭbaʾat Muṣṭafā al-Bābī al-Ḥalbī.

Khuzāʿī, Dīʾbil b. ʾAlī

1962 *Dīwān Dīʾbil ibn ʾAlī Khuzāʿī*. Edited by ʾAbd al-Ṣāhib Dujaylī. al-Najaf: Maṭbaʾat al-ʾĀdāb.

1983 *Shiʾr Dīʾbil ibn ʾAlī Khuzāʿī*. Edited by ʾAbd al-Karīm al-ʾAshtar. Dimashq (Damascus): Majmaʾ al-Lughā al-ʾArabiyya bi-dimashq.

al-Maqqarī, ʾAḥmad b. Muḥammad

1988 *Nafḥ al-ṭīb min ghuṣn al-ʾandalus al-raṭīb*. Edited by ʾIḥsān ʾAbbās. 8 vols. Bayrūt (Beirut): Dār Ṣādir.

Mikhail, A.

2017 *The Animal in Ottoman Egypt*. Oxford: Oxford University Press.

Moazami, M.

2006 The Dog in Zoroastrian Religion: Vidēvdād Chapter XIII. *Indo-Iranian Journal* 49(1): 127–149.

Nathan, H.

2016 Dogs in Medieval Egyptian Sufi Literature. In L. D. Gelfand (ed.) *Our Dogs, Our Selves: Dogs in Medieval and Early Modern Art, Literature, and Society*, pp. 78–93. Leiden: Brill.

Nemoy, L.

1956 *Arabic Manuscripts in the Yale University Library*. New Haven: Connecticut Academy of Arts and Sciences.

Nurbakhshu, J.

1989 *Dogs from a Sufi Point of View*. Translated by Terry Graham. London: Khaniqahi-Nimatullahi Publications.

Omidisalar, Mahmoud and Teresa Omidisalar

Dog. *Encyclopaedia Iranica*. (1985–) vol. 7, pp. 461–470. London: Routledge.

al-Qālī, ʾAbū ʾAlī Ismāʿīl b. al-Qāsim

2001 *al-ʾAmālī*. Edited by Ṣalāḥ b. Faṭḥī Halal and Sayyid b. ʾAbbās al-Julaymī. 8 vols. Bayrūt (Beirut): Muʾassasat al-Kutub al-Thaqāfiyya.

Qiftī, ʾAlī b. Yūsuf

1970 *al-Muḥammadūn min al-shuʾarāʾ*. Edited by Ḥusayn Muʾammar. Riyāḍ: Dār al-Yamāma(?).

al-Rāmhurmuzī, al-Ḥasan b. ʾAbd al-Raḥmān

1983 *ʾAmthāl al-ḥadīth*. Edited by ʾAbd al-ʾAlī ʾAbd al-Ḥamīd al-ʾAẓamī. Būmbāʾī (Mumbai): al-Dār al-Salafiyya.

al-Sarrāj, Jaʾfar b. ʾAḥmad

n.d. *Maṣāriʾ al-ʾUshshāq*. 2 vols. Bayrūt (Beirut): Dār Ṣādir.

Shabārū, ʾAṣṣām Muḥammad

1992 *Tafḍīl al-kilāb ʾalā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. Bayrūt: Dār al-Taḍāmūn.

- Shehada, AlKhateeb Housni
 2013 *Mamluks and Animals: Veterinary Medicine in Medieval Islam*. Leiden: Brill.
- al-Shinnārī, Abū al-Muzaffār Sa'īd Ibn Muḥammad
 n.d. *Tafḍīl al-kilāb 'alā kathīr mimman labisa al-thiyāb*. n.p.
- Smith, G. R.
 1980 The Arabian Hound, the Salūqī: Further Consideration of the Word and Other Observations on the Breed. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 43(3): 459–465.
- Smith, G. R. and M. A. S. Abdel Haleem
 1978 *The Book of Superiority of Dogs over Many of Those Who Wear Clothes*. Warminster: Aris & Phillips.
- Subasi, V.
 2011 Dogs in Islam. Dissertation of Magister des Philosophie, Universität Wien.
- al-Tanūkhī, 'Abū 'Alī al-Muḥassin b. 'Alī
 1971–1973 *Nishwār al-muḥāḍara 'akhbār al-mudhākara*. Edited by 'Abbūd al-Shālījī. 8 vols. Bayrūt (Beirut): Dār Ṣādir.
- Tha'lab, 'Abū al-'Abbās 'Aḥmad b. Yaḥyā
 1948–1949 *Majālis Tha'lab*. Edited by 'Abd al-Salām Muḥammad Hārūn. al-Qāhira (Cairo): Dār al-Ma'ārif.
- Toorawa, S. M.
 2005 *Ibn Abī Tāhir Ṭayfūr and Arabic Writerly Culture: A Ninth-century Bookman in Baghdad*. London and New York: RoutledgeCurzon.
- Vikør, k.
 2003 The Truth about Cats and Dogs: The Historicity of Early Islamic Law. *Historisk Tidsskrift (Oslo)* 82: 1–17.
- Viré, F.
 Kalb. *EF*²
 1973 A propos des chiens de chasse salūqī et zaḡārī. *Revue des Études Islamiques* XLI(2): 231–240.
- Yāqūt, Ibn 'Abd Allāh al-Ḥamawī
 1866–1873 *Kitāb mu'jam al-buldān*. *Jacut's geographisches Wörterbuch*. Herausgegeben von F. Wüstenfeld. 6 vols. Leipzig: F. A. Brockhaus.
- 2011 *Kitāb mu'jam al-buldān*. Edited by Farīd 'Abd al-'Azīz al-Jundī. 7 vols. Bayrūt (Beirut): Dār al-Kutub al-'Ilmiyya.
- Ziriklī, Khayr al-Dīn
 2002 *al-'A'lām: Qāmūs tarājīm li-'ashhar al-rijāl wa-l-nisā' min al-'arab wa-l-musta'ribīn wa-l-mustashriqīn*. 8 vols. (15th ed.) Bayrūt (Beirut): Dār al-'Ilm lil-Malāyīn.